元虐められっ子の学園生活

ぺちゃーん

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

http://www.akatsuki-novels.com/

注意事項

このＰＤＦファイルは「暁～小説投稿サイト～」で掲載中の小説を「暁～小説投稿サイト～」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁～小説投稿サイト～」を運営する肥前のポチに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
元虐められっ子の学園生活

【作者名】
ぺちゃーん

【あらすじ】
不幸とは何なのか？
ふと思い付いた言葉である。
この不幸を題材に物語を構成したいと思います。

俺と言う名のプロローグ

ーーーーーーーー不幸。

それは5歳のころから、唐突に始まった。
それまでは一生懸命であろうとひたすらの努力をし、
その目的は何時しか親に誉められたいと言う可愛いげのあるものだった。
しかし他人から見ればそれは『子供らしくない』と言う評価を受けることになる。
そしてそれは周囲へと感化され、軈ては俺の近くまで魔の手を伸ばす。

『お前は異常だ』

ーーーーーこれが親から言われた言葉だ。
それから先は会話もない。
幼稚園からの帰宅は自力。
用意される筈のご飯も用意されない。
言うところの育児放棄である。
幼稚園には行き帰り徒歩で向かい、
ご飯がなければ家のゴミ箱をあさり、食べられそうなものを探す。
こうして思うと、俺はやはり異常だったのかもしれない。
当時4歳で生存意識が発達しているのだ。
だから俺は転機と呼べるであろう5歳までひたすらに、必死で生き抜いてきた。

そして転機は訪れる。
親の交通事故。前方不注意だったそうだ。
何とも下らない理由で逝ったものだと、今ではそう思える。
その後、幼稚園から帰ってみれば誰もおらず、
机には書き置きが置いてあった。

『この家は好きに使うがいい。

俺達は消える。
願わくばお前がの垂れ死ぬことを祈っている』

これだけだ。
それだけしか書かれていない文を見て、俺は悟った。
捨てられた、と。
別に何時もと変わらないではないか。
そう思った翌日に気が付いた。
今までは食べかすや食材のゴミで凌いできた筈が、
これから先ゴミが出ないことが分かったのだ。

しかしその考えも直ぐに終わりを迎えた。
警察が来たのだ。家に。
警察の口から伝えられた言葉はとても残酷で―――――何て思わなかった。

『ははっ……』

寧ろ喜びが大きかった。

その笑みを見た警察はぞっとすると共に俺の容姿に気が付いた。
服は身体の成長に逆らうかのように所々はち切れでおり、
服の隙間から除く明らかな栄養失調の事実。

俺は強引に腕を引っ張られ、警察署、児童養護施設の順でつれ回された。
俺を見る大人たちはその都度哀れみと同情の年をその瞳に浮かべる。
なんだよ…俺を見世物にしたかったのか。

眼鏡を掛けた優しそうな人はこう言う。

『今日からここが君の家だ』

そう言ったその人の瞳は……奴等と同じだと、直感的に感じた。
俺は表情を作り、大人しそうに振る舞いながら施設内へと入れられる。
そして夕食をなるべく一杯食べ、脱走した。

この場所から家までの道を俺は覚えていない。
だからこそ、俺は気の向くままに道を決め、走った。

やっとの思いで見つけたのは家があった場所。
そう過去形だ。
脱走から3週間が経っていた。
人に見つからず、ごみ捨て場の食べられるものを漁って食いつなぎ、

やっとの思いで到着したのは空き地であった。

絶望。

そんな感情が頭を埋めつくし、その場に倒れ、意識を失った。

目が覚める。

暖かい。ここが天国なのかな…と考えてしまうのは救いを求めているからなのか。

匂いがする。懐かしく、心地のよい、そして何より食欲を掻き立てる。そんな匂い。

嫌に重く感じる身体を起こし、出来る限り慎重に辺りを調べる。

そして見つけたのだ。一人の老婆を。

俺は理解する。

俺は助けられたのだと。

そして不意に声を掛けられた。

『逃げるんならこれを食べてから行きな』

逃走を制止するわけではなく、寧ろ肯定するような言葉。

ぶっきらぼうでいて、何処か優しさを感じたその言葉。

「何でたすけた…」

ご飯、味噌汁、焼き魚と、在り来たりでいて懐かしさを感じる食卓。

俺は静かに、そして警戒を込めて聞いてみた。

「そんな物、寝覚めが悪いからさね」

寝覚めとは何だろう？

この時こそ聞きはしなかったものの、今なら分かる。

結構年のいった婆さんのツンデレと言う物だったのだろう。

「それで、出ていくのかい？」

二人しかいない空間ではお互いが喋れば嫌に響く。

俺はその言葉を頭の中でリピートして、相手の、婆さんの目を見た。

その目には一切の曇がなく、美しく、綺麗だった。

だから俺は言ってやった。

何の思惑があって俺を助けたのかは知らないが、

『子供特有の覚えたての言葉は意味がわからなくても使う』を活用し、

「お婆ちゃんがこの家から居なくなったら出てってやるよ。

寝覚め悪いからな」

ーーーーと。

すると婆さんは一瞬驚いた後、ニヤリと笑う。

「働かざる者食うべからず。アタシを楽にしてみなっ」

そう言った婆さんはとても生き生きしていた。
…そう。今でも鮮明に思い出せる。

出会いがあれば別れもある。
俺と児童養護施設の様に短時間で終わる縁もあれば、
俺と婆さんの８年に渡る縁もある。

日に日に窶れ、寝込む回数が増えていく婆さんは最後、
こう言って別れを告げた。

「お前の名前は九十九…大切な物に命が宿るように…
アタシの大切になってくれたお前にこの名前を……あげる…よ」

俺は、１３歳に成るまでで初めての涙を流した。
８年。感じた時間は一瞬だった。
光陰矢のごとし。
長いだろうと感じる時間さえ、経ってみれば早いものだと、知識の疎ましさを実感した。
今まで『お前』だの『アンタ』だの呼ばれ続け、最後には名前を送って逝ってしまう。
思えば８年間ずっと考え続けた名前なのだろう。

だからこそ、俺は誓うのだ。

「俺は義母（ばぁ）さんに負けないくらい生き続けて見せるよ」

俺、鳴滝　九十九１３歳。
再び独りへ返り咲く。
しかし、その心には硬い誓いが建てられる。
どんなに厳しくても、辛くても、生きることを常に求めて進んでいく。

不幸。
親族や家族の死の事。
しかし、意味はこれだけではない。
自己の環境に置ける変化の中で過酷なことや、理不尽に見舞われることだ。
しかし、俺はそうは思わないだろう。
考えたとしても、絶対にその答えを否定する。
何故なら俺は生きているのだから。
生きていないこと自体が不幸と言うのだと、そう思っているのだから。

将来を見据えることに意義がある

学校とは勉学に勤しむ場所である。高校となれば尚更である。
小、中、高と求められる知識が高まるにつれて着いていけない者は必ず出てくる。
その者達は自身の意欲と向上性に見切りをつけ、
恰(あたか)もそれが当たり前であると決めつけている。
そうして溢れた者達はやがて周囲に同類が居ないかと探し始め、
最終的に努力する時間を秀才と言う名のターゲットを決めつけて虐め始める。
そのターゲットが秀才であれば在るほど砂糖を求める蟻のように集まるだろう。
それが全くの無駄であることに気付かずに。
だからこそこの学校と言うシステムは優等生と劣等生を発現させる、
言わば工場の様なものと認識できる。
更に、学生同士に置ける些細な付き合いにも教員達は目もくれず、
ソレを指摘されたならば、恰も存じ上げていないと虚勢を張るのだろう。
仮にその事が全世界容認の事例なのならば、
俺は社会の必要性を疑う。
この事から結論を見いだすのであれば、
我が平穏道を阻害する無能ども、消えてなくなれ。

さて、婆さんが死去してから数日後。
タンスから1通の封筒が出てきた。
そこにはこれからの俺の生に必要であろうお金と、ソレに当てた手紙だった。
まぁ簡単に言えば、学校へ通えとのことだった。
この時の俺は13歳。行くのならば必然的に中学だろう。
そもそも小学校に行ってないやつが中学行けるの？と思うだろうが、この世には『編入制度』が存在する。

簡単に言えば小学校を通信教育で学び、中学へ入ると言うのがいい例だ。
俺はソレを採用し、ネットで方法等を調べあげて編入を果たした。
しかし、いかに義務教育期間と言えど授業料等が発生する。
そして婆さんが遺していってくれたお金は1学年を通過する位しか無かった。

だからこそ思い出す。
それは婆さんが言っていた『働かざる者食うべからず』と言う言葉。

中学へ編入を果たした俺は早朝のバイトと午後のバイトを始めた。
初心者なのだから体力も続かないであろうと調整の意味をもって始めたものだが、
全くといっていいほど疲れなかった。
これもこの家でやりくりしていたお陰だろうと思った。

大体中学2年になって半年ほどたった頃だろうか。
俺は虐めを受け出した。
理由としては『頭が良いからってデカイ顔するな』、と何とも幼稚な理由であった。
だからその虐めの内容も幼稚な物であって欲しかったのだが、
実際は過激を窮めた。
開始当初は校舎裏、体育館裏、空き教室等に呼び出され、
上記の理由で暴行を。
暫く続くうちに下らないことを学んだようで、
顔に傷があると張れるから服で隠れる身体にしようと言う型式になった。
大体2週間ほどたったなら、陰湿な虐めも加速を見せ、
まともに授業を聞くことさえ叶わなくなった。
それでも予習の段階で教科書の殆どを理解した事もあり、
虐めをエスカレートさせる切っ掛けを上乗せしていった。

そんな環境に負けず、中学3年に上がって直ぐの頃だろうか。
とある女子に告白を受けたのだ。

俺は即答で断った。
何故ならばその女子の眼が嘘を示していたのだから。
しかしそこは奴らの滑降の溜まり場であり俺の毎日の処刑場でもある。
つまり、運悪く奴らが来てしまったのだ。
まぁいつもの事だと割り切り、俺がやられている内に逃げてくれと、もしよかったら先生呼んできて欲しいな…何て期待をしていたのだが、
件の女子は何を血迷ったのか俺を庇うように前へと出たのだ。
彼女は突き飛ばされ、激情した奴らは懐からカッターナイフを取り出す。
そんな状況を見ればこの後どうなるかなど火を見るより明らかであった。
だからこそ、俺を庇ったばかりに彼女が傷つけられるのは我慢がならなかった。
俺は彼女の前へ躍り出て…降り下ろされたカッターで切りつけられた。
顔面左、耳の上辺りから頬骨、頬、顎へと一直線に作られた浅くはない切り傷。
それでも止める、強いてはやったことに罪悪を感じない奴らは、顔を押さえて蹲る俺を蹴りつける。
正直我慢の限界だった。
だからだろうか。
俺が気を失う直後に見たのは奴らが全員倒れ付し、
そのカーストが顔面をパンパンに張らしていた光景だった。
俺は入院をしたものの、2週間ほどで退院し、学校へと通い出す。

見舞いなんて誰も来なかった。
故に俺は勉学に注ぎ込むことができ、退院後の授業に遅れをとることなく卒業を迎える。

ーーーーと、まぁこんなところだ。
そして今、俺は総武高校へと入学し、今日で1年と3週間位を迎えている。

「これはなんだ？」

目の前に鎮座し、俺に一枚の用紙をちらつかせる女教師。
名前は平塚　静…だったか。担当は現代国語。

「紙……ですかね」

「君は私をバカにしているのかね？
私は今日の授業に提出された君の作文の事を言っているんだ」

作文。
つまり冒頭の文章である。

「それならばそうであると、初めから言っていただけませんか？
仮にも現国教師ならば主語等が抜かれた質問に意味がないことくらい分かるでしょう」

「君は……まぁいい。
それで、私が授業で出した課題は何だったかな」

「高校生活を振り替えっての作文ですが何か」

「それがどうしてこんな文章になる？
君は学校に何か恨みでもあるのか」

何故端正込めた作文を否定されなくてはならないのか。
俺は教師と言う職業のあり方に疑問を抱く。

「…詰まりはあれですか。
自分の気に入らない物であれば気に入るまでやり直させると言う…
ちょっと違ったジャイアニズムですか」

「どうしてそうなる…。
はぁ……君の性根はアイツの眼並に腐っているな」

アイツ…？まぁいいか。

「教師で在りながら生徒に腐っている発言とは。
最悪ですね」

「子供が大人をからかうな…」

「今度は子供ですか。
言葉攻めの引き出しが広いんですね」

「失礼しまーす…」

「おお、比企谷、こっちにきたまえ」

話の途中で……！

流石だな大人ってのは。

立場が危うくなれば嬉々として逃げを選択する！

「君はそこで待っていたまえ」

「……」

成る程。放置することによって反省を促す…と。

状況を考えてやれよ。

間違いであると感じるようにさせようとしても俺自身はそう思わないんだぞ。

「さて、私が授業で出した課題は何だったかな」

同じ質問。

この生徒……同じクラスだったな。

と言うことはこの生徒、確か比企谷　八幡？は作文に問題と取られた物を提出したのか。

「は、はぁ…高校生活を振り替えってというテーマの作文でしたが」

「それが分かっていて何故こんな嘗めた作文を書き上げてるんだ。

なんだこれ…どうしてこうなった？」

「はぁ…」

えーっと？

高校生活を振り替えって　　比企谷八幡。

お、やっぱりそうか。

文章は……へぇ、良い作文だ」

「おい、何を言っている」

ん？おっと、声に出たか。

「いえ、良い作文だな、と」

「これの何処が良いんだ…。

君達は揃って大馬鹿者だな…」

「はぁ…」

「やれやれ…」

「…ったく…鳴滝の性根は腐っているし、

比企谷は眼が死んだ魚のようだ…」

「平塚女史の人を見る眼が腐っていますね」

「ＤＨＡ豊富そうですね。そんな賢そうにみえますか」

「真面目に聞け…」

はぁ…直ぐにキレる。

だからこう言った輩には近づきたくないんだ。

「ひぇぁっ…俺はちゃんと高校生活を振り替えってましゅよ？最近の高校生はらいたいこんな感じじゃないでしゅか？」

こんなのに怯えるなよ。

全く怖くないだろうに……。

「小僧…屁理屈を言うな…」

「小僧って…確かに先生の年齢からしたら俺は小僧…」

"パシィンッ"

「なっ…！？」

「…は？」

「…生徒を殴ろうとするとは、

教師としてあるまじき行為であると思いますがね」

比企谷が言い終わる前に平塚女史が比企谷の顔面すれすれに正拳突きを繰り出したのを
俺が掌で受け止めた。

平塚女史は信じられないと言う眼をし、
比企谷に至っては「何コイツ人間？」見たいな顔をしている。

「……そうだな。
すまないな比企谷。私が悪かった。
しかし、女性に年の話をするなと教わらなかったのか？」

「す、すみませんでした…書き直しま…ん？」

「…ん？」

比企谷が言葉を遮り、平塚女史を見る。
平塚女史は顎に手を当て、良いことを思い付いたと言わんばかりの顔をしている。

「君達、ちょっと着いてきたまえ」

平塚女史はそう言うと颯爽と歩き出す。
話に着いていけず、立ち尽くす俺と比企谷に振り返り、
立ち止まって、着いてこいと顎で示す。

「はぁ…」

「ちっ…」

渋々と着いていくことにした。

"ガラッ"

「雪ノ下、入るぞ」

「平塚先生、入るときはノックをお願いした筈ですが」

「ノックをしても君は返事をした試しが無いじゃないか」

「返事をする間もなく先生が入ってくるんですよ」

嫌に広く感じる教室。

恐らく部活動に宛がわれた空き教室だと思われるが…。

不必要な机や椅子は全て後ろへと固められ、

窓が空き、そこから入る風によって揺れ動くカーテンのそばに一人

座って読書をしていた女子。
その女生徒は平塚女史に気付くなり嫌な顔で出迎えた。

「それで、そのヌボーっとした人と、犯罪者のような外見の人は？」

犯罪者のような外見。
詰まりは俺の事だろう。
顔の傷を隠すために常時ネックウォーマーを着用し目の下まで隠している。
しかしそれでは耳の上の傷は隠せないので髪も出来る限り伸ばし、今では肩辺りまであるなをうなじ辺りで束ねている。

「彼らは入部希望者だ」

そう言って平塚女史は俺達を掌で指す。

「あぁえっと…2年F組、比企谷八幡です…おい、入部って何だよ…」

「平塚女史、寝言は寝て言うから寝言であって、ソレ以外は妄言と言うんです。それじゃ…」

「まてまて！
はぁ…君達にはなめ腐ったレポートを出した罰としてこの部で奉仕活動を命じる。
異論反論抗議質問口答えは一切認めない。
と言うわけで彼らは見た目だけでなく根性も腐っている。

そのせいで何時も孤独な哀れむべき奴等だ。
なのでこの部でその腐った根性を更正させる。
それが私の以来だ」

腐った腐ったと……まるで腐敗が好きだと言っているようだ。

「お断りします。
その男の下卑た眼を見ていると危険を感じます。
そして彼は……」

「……ンだよ」

「…いえ、兎に角お断りします」

何なんだこの女は…。
初対面の人間にたいしていきなり罵倒するとは…。
しかし今の眼は……いや、気のせいだろう。

「安心したまえ。
この男のリスクリターンの事故保身と計算に関してだけは中々のものだ。
そしてこっちの男については2学年で主席なのだ。
間違いなど起きはしないよ」

「成る程…まぁ、先生からの以来であれば無下には出来ませんし。
承りました」

「そうか。なら、頼んだぞ雪ノ下」

そう言って片手を上げて退室していく平塚女史。
それ格好良いとか思っちゃってる？

そして取り残される俺と比企谷。
気まずい。果てしなく気まずい。
この学校どころか学校と言う施設内で殆どを教室とか話したことがない俺としては
この空気と空間だけは身体が拒否反応を示している。

「ガルルルル…」

「……何してンだ？」

何故かこの部活動？の主である女子を威嚇している比企谷。

「えっ、いや…、挨拶がわりに威嚇を…」

「…なぁ、何故そんなに脅えているんだ？
俺が何かしたか？」

「そ、それは…」

比企谷は口を開く。
出てきた言葉は『学園一の不良』だった。

曰く、入学早々に3年の不良をボコボコにしたとか。
「いやいや、俺入学式出てないし」

曰く、眼を合わせれば喧嘩を売られる、と。
「前髪で隠れてるのに合うも合わないもあるのか？」

曰く、何時も帰りが早いのはヤクザと関わりがあるからとか。
「バイトがあるからだ。それに何時もじゃない。俺は苦学生なんだ」

曰く、授業をまともに受けないとか。
「俺の容姿に眼をつけた教師を社会的に告発しただけだ。
因みにこのネックウォーマーは市から容認を得ている」

「……やっぱり根も葉もない噂だったってことか」

「君は…比企谷は信じてなかったのか？
それにしては怯えていたようだったが」

と言うより誰が流した…。
だからあの事件から人の目線が痛かったのか…。

「いや、おま…鳴滝の人柄を知らなかったから…」

「…別にお前とかで良いぞ。
そう呼ばれるのは嫌いじゃない」

「そ、そうか」

……しかし、比企谷は分からない。
いや、分かっているのは一つだけ。
その眼から読み取れるのは孤独…それも明かに好意的な、だ。
後は表情で見分けるしかない。
本当に…彼は今まで何を体験してきたのだろうか。

「ねぇ、そんなところに立ってないで座ったら？」

急に女性とが声をかけてきた。
その眼には気だるさ、煩わしさ、嫌悪が見られた。

比企谷は慌てて椅子を取りに行ったが俺は動かない。
その様子に疑問を感じたのか、女生徒は辛口に言葉を発した。

「聞こえなかったのかしら？
それとも、聞こえていて反応しないの？
もしかしてその事に快感を覚える人？だとしたら気持ち悪いわ」

訂正。
辛口ではなく、毒舌だった。
…まぁいい。
このような輩はスルーするに限る。
んで、時間はちょうどいいな。

「俺は帰る。
今日は用事があるからな」

「あら、反論しないのね？」

「じゃあな比企谷」

「お、おう…」

俺は明らかな挑発を無視し、比企谷に別れを告げて退室した。
比企谷は恐らく察しているだろう。
俺はこれからバイトがあるのだ。

「まて、何処へ行くんだ」

先程から扉の前で待機していた平塚女史に声をかけられる。
気づいてはいたが、大方出るに出れない空気だったのだろう。

「聞いてませんでしたか？用事があるんですよ」

「その用事とは何かね。
何もないのにその発言をしたのなら、それを容認することは出来ない」

「アンタは俺の作文の何を見たんだ？
大方流し読みをしたんだろうが…」

「……何が言いたい？」

「俺に何かを言いたいのなら、もう一度作文を読んでその内容を理解してから出直してこい。……失礼します」

俺は平塚女史の横をすり抜けるように通りすぎ昇降口へと向かった。その後ろでは悲しいような、納得のいかないような眼をした平塚女史が残された。

「……はぁ。

明日からシフトの時間をずらすか…平塚女史め…」

クッキーとは何ですか？

「はぁ……」

翌日の放課後、俺のクラスが解散を示すと同時に教室を出た。
言ってなかったが、俺は廊下側の一番後ろだ。
一番目立たず、教室全体を見渡せる良い席だ。

さて、そんな俺は何時もならば直ぐにでも帰るのだが、
昨日のこともありあの忌々しい部活動へと顔を出さなくてはならない。

「…どうも」

例の空き教室に到着し、入室。
やはりというのか、この部の部長が昨日と同じ場所で読書をしていた。

「……こんにちは」

「どうもこんにちは…」

「よく来たわね。もう来ないと思ってたわ」

「それは来てほしくなかったと取っても良いのか？」

「あら、誰もそんなことは言ってないわ。
今のは只の感想。勝手な発想で物事を決めつけないでくれるかしら」

帰りたい。
ただそれだけが俺の願いだ。

「それで、一つ聞きたいのだけれど…」

「ちーす…」

女生徒が話を切り出したところで比企谷が現れた。
やはりというか、比企谷も嫌々ながらの顔をしていた。

「…よう。
……それで、何だって？」

「…別に何でもないわ」

「そーですか」

何なんだこの女は…。

「…なぁ、何かあったのか？」

隣に座った比企谷が、小声で俺に問いかけた。

「入室早々に罵倒されたような物だ」

「…把握…」

その時、荒々しく扉が開いた音がして、
その方を見ると平塚女史が戸惑いの眼をしてたっていた。

「先生、ノックを…」

「すまない雪ノ下。
それよりも鳴滝、少し良いか？」

昨日の作文の件か？
これは所謂面を貸せって奴だろう。
この感じは久し振りだな…。

「で、何ですか？」

職員室。
そこでも敷居が敷かれ、小さな応接室の様にされた場所で

平塚女史と早退して座っている。

「君のいった通り、君の作文を何度か読み直した」

「…それで？」

「君は……親はどうしている」

「親なら居ませんよ。５歳の時には一人でしたから」

そもそもあの二人を親などと思っていたのは４歳序盤までだ。
それからなんて他人としか思えなくなっていたからな。

「では…今は一人暮らしと言うことか？」

「…何が言いたいんですか？」

「君は、虐めを受けていたのか？」

……調べたのか。

「それがなにか？」

「ならば普段からしているそのネックウォーマーは虐めの傷を隠す物と言うことか…」

「…見たいというのなら却下します。

この傷を見て感傷に浸られると気分を害します」

「…そうか。

確かに昨日、君がいった通り、私は教師の風上にも置けなかった。

教師である事を忘れ、只の人として君に八つ当たりをしていたのかもしれない。

だからこそ、私は君に歩み寄りたい。

君という人間を知りたいんだ」

……悲願と…不安…か。

同情と、自分の意思の進言ってところか。

「俺から話すことはまだありません。

俺をあの部活に放り込んだ事を利用して観察でもしたらいい」

まぁ観察したところで誰とも話したりしないから

精々分かることは常に1人と言うことくらいだろう。

「…わかった。

それと…雪ノ下を見てどう思った？」

「……誰ですか？」

「……は？

いやいや、待ちたまえ。

奉仕部の部長だよ。知らなかったのか？」

あの女か…名前初めて聞いた気がする。
（実際は何度か名前が上がっている）

「そうですね…下らない思想を抱いている下らない女ですね」

「…どう言うことか聞いても？」

「あの女は何かを追っている。
それが人であれ思い出であれ自分という者を理解していないのであれば無駄だというのに。
あの女は…そう、言ってみれば完璧を目指してるように見える」

「……そうか」

それから先は暫く無言だった。
体感的に5分程たった頃、漸く平塚女史は口を開く。

「…すまなかったな。時間をとらせた」

「…いえ、別に気にはしてません。
それではこれで」

「ああ…っと、部室に戻るんだぞ」

ちっ…帰れると思ったのに…。

「全く君は…」

額にてを当てる平塚女史だった。

「はぁ……ん？」

部室前。
そこには比企谷が待っていた。

「よぉ」

「どうした？」

「いや、鳴滝と一緒に調理室に来いって雪ノ下が…」

調理室？
何か料理でもしたいのか？
となると俺と比企谷は毒味役…？

「もしかして、誰かの頼みだったりするのか？」

俺達は歩きながら会話をする。

「あぁ、由比ヶ浜っていう女子が依頼に来た」

「由比ヶ浜……あぁ、グループぼっちの」

「グループぼっち？なんだそれ」

「グループぼっちってのはグループの中にいる筈なのに会話に参加できなかったり
着いていけない奴の事だ。
そういうやつに限って別の事を始めるのさ」

「あぁ…納得だ」

しかし、比企谷もただ会話が出来ない訳じゃ無いんだな。
要は誰とも話していないっていうだけだったわけか。

「なぁ、鳴滝」

「どした」

「聞きたいことがあるんだが…」

比企谷が立ち止まる。
俺も続いて立ち止まり、比企谷に視線を合わせる。

「ん、何が聞きたい？」

「（いいんだ……）…まず一つ、何であの時庇うような真似をしたんだ？」

あの時…庇う……いや、これはないか。

となると、作文の事だな。

「あの時言ったろ？

良い文だった。

周りに流されず、自分の思ったことを書きなぐる。

そして、自分の感性から物事を図った結論。

あれを良い作文と言わず何と言う？」

「……サンキュー…」

「……何だ、照れているのか？」

「ばっか、そんなんじゃねぇよ。

次だ、お前は友達とか親しいやつは「いない」……そうか」

何で嬉しそうなのかは聞かないことにしよう。

「じゃあ、最後…そのネックウォーマー…その……」

「…見たいのか？」

「っ！……嫌なら別に良い。
ただ、これから先絡んでいくと毎回気になると言うか…」

「そうか…なぁ比企谷、お前は虐めにあったことはあるか？」

「虐め？そりゃもう、あいまくってるね…。（主に女子に…）」

「それってどんなものか聞いても良いか？」

「え？……細菌だとか汚物だとかそんな扱いされたり…とかか」

成る程…。

「精神的な虐めか…。
俺はな、比企谷…」

そう言いながらネックウォーマーに手をかける。
そのまま顔を通して取り外し、目にかかる前髪をかきあげて横を向いた。

「っ！？…マジか…」

「肉体的な虐めにあいまくってきたのさ…。
因みにこれは中学3年の時の傷だ」

長い切り傷。

今でもハッキリと痕が残り、此を見たやつらは漏れ無くドン引きする。

「……すまないな…嫌なことさせて」

「…？引かないのか？」

俺は再びネックウォーマーを首に通して聞いてみる。

「…何で引かなきゃならないんだよ。
それを見たのなら普通同情だろ」

「お前の反応は初めてだったよ。
ありがとな、同情してくれて…」

「大方それを見たやつらはリア充街道まっしぐらなやつらだったんだろ。
ろくに虐めを受けなかった奴の反応だろうな」

成る程な。
そう言うことだったのか…。

「ところで、リア充って何だ？」

「知らないのか？リア充って言うのはだな…」

「遅い。
ここに来るまで何分かかっているの？
道草でもしていたのかしら。ヒキガエル君」

「まて、何で中学の時のアダ名をしっている」

あれから短い時間だったが比企谷と他愛のない会話をした。
調理室に到着し、会話が終わるのを残念に思った俺がいた。
あんなに充実した会話をしたのは何時振りだろうか。

「な……鳴滝…君…」

「…由比ヶ浜…だったな」

何でこう、会うやつ全員に怯えられなくてはならないのか…。
あぁ、あの噂のことか。

「由比ヶ浜、鳴滝の噂はでっち上げだ。
そこまで怯えなくて良いぞ」

「そ、そうなの！？」

「私はどちらかと言えば比企谷君に怯えたのだと思ったのだけど」

「俺のこの眼を言ってるの？
さっき由比ヶ浜が鳴滝の名前だしてたよね？」

「あら、聞こえなかったわ」

「このアマ……」

この二人は中々に会話が成り立っているな。
俺が言われたらキレるか不貞腐れるか殴るかする。
…最後は違うか……ちがうよ？

「それで、なにしてんの？」

「見てわからないかしら。
これからクッキーを作るのよ」

クッキー？

「なぁ…クッキーって何だ？」

「は？」

「え？」

「マジ…か…」

何でそんなに引くの？

クッキーって生きていく中で常識的な何かなの？

「あーそうだったな…。

いいか鳴滝。クッキーっつーのはだな……」

こうして比企谷のクッキー講座が始まった。

「出来たー……けど…」

……おかしい。

比企谷から聞いた物とは違う気がする。

あれ？いや待てよ…確か色んな物も存在するとも言っていた。

ならこれもその一つなのか？

「何故あれだけミスを重ねることが出来るのかしら…」

あれはミスだったのか？

テッキリ調理作法の一種かと思ったんだけど…。

「ホムセンで売ってる木炭見たいになってんぞ…。

最早毒だ…」

「どこが毒だし！……やっぱり毒…かな？」

「どれどれ……アム……」

「「なっ！」」「ええっ！？」

俺はネックウォーマーのしたから偲ばせるように口に入れた。

「んー…ちょっと硬い気がするけど…食べられなくは無いな」

「なん……だと！？」

「……味覚が無いのかしら…」

オイコラどう言う意味だ。

「我慢しなくていいんだよ?不味いなら不味いって…」

「とある男の話をしよう。
その男は家がなく、道行く先でごみ捨て場を発見しては食べられそうなゴミを漁り、
食べていたそうだ。
そんな生活を続けるうち、その男はちょっとした毒物なら効果のない身体となったのだ」

誤解を解こうと思ったら俺の過去暴露しちゃったよ。
でも何でだろう。皆の視線が痛い。

「…貴方の実話はこの際置いておくとして、由比ヶ浜さんはどうするの?」

「え、…もう、いいよ。ほら、才能って言うの?私には無いから…」

「解決方法は努力あるのみよ。
由比ヶ浜さん、貴女は今才能が無いって言ったわね」

「え、…うん」

「その認識を改めなさい。
最低限の努力もしない人が才能ある人を羨む資格なんてないわ。
成功できない原因は成功者が積み上げてきた努力を想像できないから成功しないのよ」

「でもさ、最近皆こういうのやらないって言うし…
やっぱりあってないんだよ…そう言うの」

カタンッ　と、粉降りの器具を強めに置いて、
雪ノ下は由比ヶ浜に睨みを聞かせる。

「その周囲に合わせようとするの、止めてくれないかしら。
酷く不愉快だわ。
自分の無様さ不器用さ愚かさの理由を他人に求めるなんて、恥ずかしくないの？」

うわぁ…容赦ないなぁ。
ほら、由比ヶ浜もうつむいてるじゃねえか。
登校拒否になったりしないだろな…。

「……カッコいい…」

「「「はぁっ！？」」」

まてまて、何処がカッコいいの？
寧ろ相手の精神バキバキに折るようなセリフばっかじゃねえか！

「建前とか…そう言うの全然言わないんだ。
何て言うか、そう言うのカッコいい！」

「は、話を聞いてたのかしら。
自分でも結構キツいこと言ったつもりだったのだけど…」

あ、自覚あったのか。
寧ろ雪ノ下の９０％は饒舌であると確信。

「確かに言葉は酷かった。
でも…本音って感じがするの…。
私…人に合わせてばっかだったから…ごめん！
次はちゃんとやる！」

次はってことは最初は手抜き？
つまりこれは失敗作だと言うことか…。

「さっきからそう言うの話の流れだったろ…。
で、雪ノ下。正しいやり方教えてやれよ」

「はぁ…私が作るからそれを見てやってみて…」

「うん！」

「ーーーーー成る程、これが本物か…」

最初よりも形が確りしているし、雪ノ下の作ったやつと比べると色合いが対照的だ。

「なぁ、これはどっちが正しいんだ？」

「いや、明らかに雪ノ下だろ…」

そうなのか…でも…ムグッ…美味いな。

「どうして上手く行かないのかしら…」

「うぅ…」

「あ、比企谷！それ最後の一個だったのに！」

「まだ由比ヶ浜のが残ってるだろ」

「俺の胃袋はお前ほど小さくないんだ！」

「ばっか、お菓子は別バラって言うだろ」

「聞いたことない…こともないな。

確かクラスの女子がそんな台詞を言っていた気が…ってああ！」

最後の一個が…おのれ比企谷ぁ…！
婆さん曰く『食い物の恨みは恐ろしい』って言う素晴らしい名言を物理的に教えてやろうか！

「なあ、何でお前ら美味いクッキー作ろうとしてんの？」

「へ？」

「……どう言うこと？
何が言いたいのかしら」

急に言葉を発した比企谷に、雪ノ下と由比ヶ浜は訝しげな視線を比企谷に送った。

「１０分後、ここに来てください。
俺が本当の手作りクッキーを見せてやりますよ」

「へぇ…大した自信ね。
由比ヶ浜さん、外へ出ましょう。
このヒキコモリ君が手本を見せてくれるそうだから」

「おい、人の名前を変な風に呼ぶな」

そんな比企谷の言葉を危機もせずに、二人は家庭科室から出ていってしまった。

「ーーーーーで、作らないのか？」

「ばっか、これでいいんだよ」

家庭科室に残った俺は何故か由比ヶ浜の作ったクッキーを綺麗に並べるだけで動かない。

「すまん、全くわからんのだが」

「まぁ、アイツ等が来たらわかるからな。それまで待っとけ」

「ふーん…」

何をしようとしてるんだ？

ーーーーー１０分後。

「これの何処が手作りクッキーなのかしら…」

「むー、あんま美味しくない」

二人が帰ってきて早々の感想がこれだ。
正直何がしたいのかさっぱりだ。

「そっか…悪い捨てるわ…」

「ま、まって！」

感想を聞いてすぐ、比企谷はクッキーを廃棄しようとする。
それを止めたのは由比ヶ浜だった。

「別に捨てるなんて…ハグッ
言うほど不味くないし」

「ま、お前の作ったクッキーなんだけどな」

「へ？」

「どう言うことかしら」

駄目だ。さっぱりわからん。

「これは俺の友達の友達の話なんだが…」

そう言って比企谷は語り出す。

ーーー何かある度に話しかけてくる女子が居たそうだ。
もうこれ絶対俺のこと好きだよ！と、おｒ…じゃなかったそいつは思った。
で、意を決して聞いてみることにしたんだ。
『好きなやつ教えてよ！頭文字（イニシャル）でいいから！』
『え、えぇーー……Ｈ……』
『Ｈ…それって、俺！？』
『は？何言ってんの…マジキモい…止めてくんない？』

「……はっ？！何だ今のは…」
又聞きの筈なのにそのシーンが想像（トレース）出来てしまった！
「ちょっと待って。貴方のその経験談から…」

「ちょっ！友達の友達だ！」

「…で、そこから何を導けばいいのかしら？」

え！？体験談だったのか！？

不運過ぎるだろ比企谷…。

「まぁあれだ。

男ってのは単純なんだよ。

話しかけられたら勘違いするし、手作りクッキーなら尚更だ。

だから美味しくなくたって良いんだよ」

ああ、そう言う事だったのか。

成る程、勉強になるな。

「…美味しくない？……うっさい！」

このっ！このっ！と、そこらにあるゴミを比企谷に投げつける由比ヶ浜。

…誰が片付けするんだよ。

「まぁ、お前が頑張ったんだって姿勢が伝わりゃ、男心が揺れるんじゃねえの？」

「そう言うものかしら…」

「…ヒッキーも揺れるの？」

「あ？あーもー超揺れるね。
て言うかヒッキーって呼ぶな」

ヒッキー…あだ名か。
思えば俺、あだ名で呼ばれたことないなぁ…。

「で、どうするの？由比ヶ浜さん」

「あ、うん。私自分のやり方でやってみるよ！
ありがとね、雪ノ下さん！」

こうして家庭科室でのクッキー作りは終わりを迎えたのだった。
因みに残ったクッキー（失敗作も含む）は俺が美味しく頂いた。

「本当に良かったのかしらね？先週の由比ヶ浜さんの依頼」

「何だよ急に」

あれから週明けの月曜。
放課後となり、俺は部活のためにこの3人の空間にいた。

静寂を破った雪ノ下はそんな疑問を口にする。

「私は、自分を高めるなら限界まで挑戦するべきだと思うの。
それが最終的には由比ヶ浜さんのためになるんじゃないかと…」

まぁ、そう言った考えも間違いではないのだろうけど。
結果的に由比ヶ浜が納得したのならそれでいいんじゃないだろうか？

「…努力は自分を裏切らない。夢を裏切ることはあるけどな」

「っ！？」

「……どうしたの？食中り（しょくあた）？」

「……何でもない」

「そう…で、どう言うことかしら」

「努力しても夢が叶うとは限らない。
むしろ叶わない方が多いだろ。
でも、頑張った事実があれば慰めにもなる」

「只の自己満足よ。甘いのね、気持ち悪い」

「自己満足で何が悪い」

「…え？」

「お前はあの時に言ったな。
『努力をしない者が才能ある人間を羨む資格はない』って」

「ええ、言ったわ」

「それさ別の言い方でも適応される。
頑張った者の努力を知らないやつに、その努力を否定する権利はない」

もしもその回答が間違っているのだとしたら、俺は生きる術を間違えてきた事になる。
だからこそ俺は努力の否定は許さない。
例え俺に言っているのではないとしても、ハッキリさせておきたい。

「…比企谷くんをかばっているのかしら？
もしかしてそう言った趣味があるの？気持ち悪い」

「…答えろ。俺の意見は間違っているか…」

雪ノ下の返答にキレ筋を浮かべ、声にドスを効かせて再度問う。

「……そうね。
私が間違っていたわ。ごめんなさい」

「……そうか」

「「「……」」」

沈黙。
どうやら空気を悪くしてしまったようだ。
頭に血がのぼって、冷静を欠いてしまった。

"ガラッ"

「やっはろー！」

「「……」」「…何か？」

空気を読まない女子が来た。
と言うか由比ヶ浜が来た。

「あれ…もしかして私、余り歓迎されてない…？
雪ノ下さん、私のこと…嫌い？」

「別に嫌いではないわ。
…ちょっと苦手かしら」

「それ女子言葉じゃ同じことだからね！？」

「で、何か用かしら」

「あ、この間のお礼っての？
クッキー作ってきたから」

そう言って由比ヶ浜はバッグをあさり、小綺麗に包装された包みを取り出す。
それを雪ノ下に手渡した。

「あの、私あまり食欲が…」

「それでさーゆきのん。
私も放課後暇だから部活手伝うね！
いやぁこれもお礼だからー！」

「あの話を…」

居たたまれない。
何故こんなにもハイテンションなのか理解できない。

俺は立ち上がり、鞄を片手に部室を出る。
どうやら比企谷も同じのようで部室を出てきた。

「ヒッキー！…と、えーっと…」

少し行ったところで後ろから由比ヶ浜が呼び止める。

え？何？名前覚えてないの？
うーわー……俺明日には遺書書いてるかも。

「あのさ、鳴滝君…ツクモンって呼んでもいーい？」

「ツクモン……？」

「おい、それだと所謂デジタルな世界の怪物になるぞ」

「な、なぁ…それってもしかして俺の…？」

「そう！あだ名！」

あだ名…あだ名だと！
ついに来た！生まれて約１７年…ついにあだ名で呼ばれる時が！

「ああ、勿論だ」

「は！？」

「やった！
じゃあヒッキー、ツクモン！これ！」

そう言って渡されたのは、先ほど雪ノ下に渡していた包みと似たようなもの。
但し、俺の場合はそれの２倍はある。

「一応お礼…二人も手伝ってくれたし」

そう言ってまた部室へ入っていった由比ヶ浜。

「…まぁ、お礼と言うのなら、ありがたく受け取っておこう」

「初めて人から食べ物貰ったぞ…。
これだけあれば夜飯は無しで大丈夫そうだ…」

「一応言っておくが、クッキーはお菓子に分類される。
間違ってもご飯ではないぞ」

「そうなのか？」

そんな放課後の一コマ。

ならば俺もクッキーを作ってみようかな、と考えたその日の出来事であった。

生態系と厨二病

イヌ科という動物には、イヌ、オオカミ、コヨーテ、ジャッカル、キツネ、タヌキと言ったものが含まれる。
イヌ科の動物の殆どは、発達した鼻や耳を持ち、獲物を確実に追跡する。
地形などの適応力も高く、基本的な物であれば何でも食べることができる。。
開けた草原に生息していることもあり、目線よりも高い位置に障害物は存在しないため、
まさに平原のハンターと言えるだろう。
しかし近来、森林伐採などの影響により、中でも一番知能のあるオオカミが少なくなっている。
オオカミは基本的に家族を一グループとして行動し、
獲物を追う際の連携も卓越している。
まさに家族の絆と言える。
古来ではオオカミが祭り上げられることもあり、
その生態は無視できないものとなっている。
つまり、オオカミは偉大なのだ。
しかもその季節に合わせて体毛を調節し、体調を整える能力をもっている。
なんと素晴らしいことか。因みに私の家には冷暖房の器具が一切存在しない。
だからこそ人間はオオカミの生態を見習うべきだと思う。
家族の繋がりや友人との会話に意味があるかは知らないが、
コミュニケーションの退化を進出する現代社会は終わっている。

もしも私が生まれ変わるのなら、神になりたい。

「君達は何か？職員室が好きなのかね？」

職員室。

毎度お馴染みの様に平塚先生にお小言を食らっている。

「比企谷は熊絶賛。鳴滝に至っては何だこれ…結論　神…もう動物じゃないだろう」

「甘いですね先生。

仏教等では神は人間が昇華した姿だと言われているんですよ？

そうなれば神もまた動物の一種。ヒト科なのです。

しかも飲まず食わず…コミュニケーションもいらない…素晴らしい」

「おお…」

「神にだって役割はあるだろう…比企谷は共感するな」

え?役割?知らんよそんなものは。
神がいなくても人は生きている。
どっかで聞いた言葉だが、いい言葉だな。

「先生って、現国の教師じゃ…」

「私は生活指導だ…故に生物の先生に丸投げされたんだ。
それで、これらの何処が野性動物の生態なんだ?」

「野性動物の群れ社会に対する強烈なアンチテーゼです」

「動物社会のコミュニケーション能力退化の俺なりに考えた解決方法です」

「お前たちは…」

神って良いよね。
誰かの願いを叶える存在として知られてるけど実際仕事をしない空想的な存在。
て言うか神っているの?

「君達は群れることが罪悪だと思っているのか」

「先生だって個体って言うか独身っ」

「ふっ!」

"パシィッ！"

「……ちっ」

「た、助かったのか…」

全くこの暴力教師は…。

「…時に、この前の依頼者はうまく行ったのか？」

「はぁ、まぁ本人は納得したみたいなんで。
そう言えばこの前の勝負はどうなったんですか？」

勝負？殴り合いか？

「ああ、安心したまえ。
勝負の採点は私の独断と偏見で決めてある。
ここんとこにしまってあるさ」

「っ……」

ポンッとムネヲ叩く平塚先生に比企谷が若干の反応をして目をそらす。

「比企谷は大きい方が好きなのか？」

「なっ！ばっかお前！生き遅れの胸がはぁあっ！？」

ああ、今のは比企谷が悪いな…。

「……腹減ったなぁ」

諸君、雨だ。
本来ならこの昼休み、屋上の排水タンクの上で風を受けながら食べているのだが。
生憎の雨なわけで、屋上に出ることが出来ない。
更に食事を取ると言うことはネックウォーマーを外すと言うことであり、
それは教室の人間にみられる可能性があると言うことでもある。

「……はぁ…」

どうするか。

久しぶりに便所飯でもするか？

……聞いてみるか。

「なぁ、比企谷」

「んをっ」

「……どうした？」

何故か話しかけただけで驚いた比企谷。

「いや、教室で話しかけられたこと無かったからな。

少し驚いただけだ」

「そうか。

それで、誰も来ない昼飯場所ってないか？」

「は？…ああ、そう言うことか。

そうだなぁ…普段なら俺もベストプレイスで食ってる筈なんだけどな。

悪い、知らねぇわ」

「……そうか」

さて困った。
このままでは空腹状態で五時間目を受けなくてはならなくなる。
その場合、授業中に腹がなったりしてとてつもなく惨めな思いをするだろう。

「それじゃ分かんないから、ちゃんといってよ！」

「ん？何だ？」

「…あれは、由比ヶ浜とその仲間達だな」

何やら険悪なご様子。
見るとクラス全体が注視し、気まずい空間が場をしはいしている。

「どうすんだ？」

「俺には関係がない。
精々身内で潰しあえ…」

「ふむ……」

「まぁ、別に助けようなんて気はこれっぽっちもないが。
知ってる女の子が泣きそうになってるのを見てると胃がキュルキュルなって飯が不味くなるんだよ」

「……分からないこともないな。
今時分飯が食えない状況だが…」

「それにああやって攻撃されるポジションは俺の物であって、
そう易々と譲ってやるつもりはない」

「いや、俺もそのポジションにいるんだがな。
兎も角腹がへった」

そう言うと比企谷は立ち上がる。
件のグループに向いて一言物申すと…

「おい、その辺で……」

「うっさい！」

「そ、その辺でジュース「コラコラ、逃げるな」いや、俺にはジュースを買うという指名が…」

俺は逃げようとした比企谷を掴んで座らせる。
しかしこうなってしまってはどうにもならない。
ならば俺は、例の噂を利用させて貰うとしよう。

「…お前ら、喧嘩なら他所でやれや」

「はぁ？って…鳴滝…これあーしらの問題だから、口出さないでくんない？」

「その問題も、今はクラス全体の問題と化している」

「はぁ？意味わかんないし」

「成る程、カーストの央にいるやつでも、状況の理解能力は底辺と見える」

お、おい、喧嘩なら他所でな？

と、比企谷が裾を引っ張るが、今は無視。

「ま、まぁまぁ…二人「テメェは黙ってろや！」……え？」

仲裁に入ってきた葉山に反射的に怒鳴った。

「カーストのトップの癖にこう言った状況の仲裁が糞ほど遅ぇんだよ！

お陰でクラス全体が飯マズ状態じゃねぇか！ああ！？」

俺はまだ食べてないけどね。

「…俺は」

「何なら昔みたいに仲間率いて団結させてみろや！

出来るだろ！毎日のように馬鹿騒ぎするくらいだからなぁ！」

全員沈黙。

反論者無し。

「仲直りならば今すぐしろ。
喧嘩するなら他所へ行け。
あと葉山死ね」

そう言って俺は自分の席へ座る。
無言で弁当（自作）を取りだし、食べる準備をする。

これでいい。
この状況ならば、クラスの大半が空気に居たたまれなくなって出ていくことは必至。
そして俺は飯が食える。
まさに一石二鳥。

「お、おれ、購買行ってこよ」

「あ、俺も！」

「あ、私はお手洗いに…」

思惑通り、クラスからゾロゾロと出ていく。
残っているのは俺、金髪、由比ヶ浜、糞な葉山グループだけ。
さぁ、飯だ。

「…ごめんね。
私さ、人に合わせないと不安って言うか…。
つい空気読んじゃうって言うか…。
いやー、もう昔からそうなんだよね。

おままごとでホントはママ役やりたいんだけど、他にやりたい子がいるからってポチ役やってたり。
団地育ちのせいかもだけど…」

「何が言いたいのか全然分かんないんだけど」

ふむ、どうやら仲直りを選んだようだな。
だが由比ヶ浜。俺にも理解できないぞ。

「だよね、私もよく分かんないんだけどさ…。
でもね、ヒッキーやユキノン、ツクモン見てて思ったんだ。
お互いに本音で言い合って、空気読んで、無理に合わせてないで…
…楽しそうで…」

俺としては真面目に話していたつもりだったんだが。
そうか、面白く見えたか。

「何か私、今まで必死になって人に合わせてきて…それって間違ってたのかなって思うようになってきて…。
だってヒッキーとかマジヒッキーじゃん。
休み時間とか寝たふりしてたり、本読んで笑ってたりしてキモいし」

『ヌグッ』

ん？比企谷の声か？
もしかして廊下にいる？

「あの…そう言うわけで…別に由美子の事が嫌だって事じゃないから。
これからも仲良く出来るかな…？」

「ふーん。ま、いいんじゃない？」

「ごめん。ありがと、由美子」

そう言って扉へ向かっていく由比ヶ浜。
俺も丁度弁当を食べ終わる。

「ええ！何でヒッキーがここにいるの！？
もしかして聞いてた！？」

そして急に廊下の方から由比ヶ浜の声が聞こえてくる。

「な、何をでしょう」

「聞いてたんだ！盗み聞きだ！
変態！ストーカー！えとあと、いやもうホントマジキモすぎだから…」

「少しは遠慮しろよ…」

「はぁ？今さら遠慮なんてするわけ無いじゃん！
誰のせいだと思ってんの？バカ」

何なのこの二人。
急にラブコメ開始しましたよ。
もうお前ら付き合っちゃえよ。

「…誰のせいって、そりゃあ…雪ノ下だよな…」

「俺的にはお前のせいだと思いたい」

「うお！？急に現れるな！ビックリしちゃっただろ」

「何なの？俺って怪人か何かなの？
ヒーローによって爆発させられる存在なの？」

「いや、そんなこと言ってねえけど…」

「…慰められたとき、どんな顔をすれば良いのか知らないんだ……」

「…笑えよ」

「（ニコォ…」

「ちょ、こわ、怖いよ…目だけしか見えないぶん怖さ増してるよ…
あと怖い」

「お前、そこまで言うか…」

そんな昼休みの出来事だった。

さぁ放課後だ。

今までは直ぐに帰ってバイトへ行くのだが、

今ではもう部室へ行くのが日常化している自分が惨めでかわいそうだ。

はぁ……どっかに百万円落ちてないかな…。

「…ん？何だ？」

「…どした」

「いや、部室前で女子二人が…」

俺が指を指すと比企谷はすたすたと歩いていき、

「……何してんの」

と、声を掛けた。

「「ひゃっ！」」

突飛な声をあげて驚く女子二人。
と言うか雪ノ下と由比ヶ浜。

「いきなり声をかけないでくれるかしら！」

「悪かったよ…で、何してんの？」

「……部室に不振人物が居るの…」

「はぁ？」

不振人物？
俺…じゃないよな。
だって俺廊下にいるし。

「よし、鳴滝、ゴー」

「いや待て、行くのは構わんが何故俺が抜擢されたかを問いたい」

「ほら、昼の教室でやったようにさ」

「あの時のツクモン、何かいつも以上に怖かったし…」

待て、それは普段から怖いと言っているのか？
やはり笑った方が良いのか？…ダメか。

「分かった。分かったから。
そんな『お前なら出来る！』見たいな目線は止めろ雪ノ下」

「そんなつもりは無かったのだけど」

嘘を言うな。

"ガラッ"

「ちーっす。お前誰だ？」

俺は扉を開けて早々になかにいる男に問いかけた。
男は太った体型にメガネを掛け、茶色のロングコートを羽織っていり。
髪型は特に整えていないようで色は白。
確かに見てみれば不振な男だ。

「ふっふっふっふ…。
まさかこんなところで出会うとは…待ちわびたぞ！比企谷八ま…ヒィィィィ！？
鳴滝九十九！何故此処にぃ！？」

何で会うやつ全員こんなに怯えるの？

俺ってそんなに怖い？

「比企谷くん。
彼は貴方の名前を呼んだようだけど、知り合い？」

「あんなやつは知らない。
知っていても知らない」

「ま、まさかこの相棒の顔を忘れたと申すか！？
見下げ果てたぞ八エモン！」

「誰が八エモンだ！
…何のようだ材木座」

「その通り！我が名は七代目剣豪将軍、材木座義輝だ！」

テンションの移り変わりが激しいやつだな。

「…そのお友だち、貴方に用があるんじゃないの？」

「友達じゃねぇっつの…」

まぁ、この男…材木座くん？との友達関係は疲れるだろうな。
主に精神的に。

「さよう！我に友達など居らぬ！ホント……マジで、独り……とぅあ！

時に八幡よ、奉仕部とはここでいいのだな？」

そうか、彼もまた友達居ないんだ。
次からは優しく接してやろう。

「ええ、ここが奉仕部よ」

「……やはりそうか！
平塚教諭から助言いただいた通りなら八幡。
貴様には我の願いを叶える義務があるわけだな」

まて、何故雪ノ下から目をそらした。
そんなに怖いのか雪ノ下は。
……怖い？かもしれないなぁ。

「別に奉仕部は貴方の願いを叶えるわけではないの。
ただ、お手伝いをするだけよ」

「……ふ、ふむ！ならば八幡よ！我に手を貸せ！」

あ、また反らした。
…もしかしてコミュ症ってやつか？

「コラムコラムッ！
我とお主の関係にそんな粗末なものは必要な…い……」

雪ノ下をみて固まる材木座くん？もう呼び捨てでいいや。

っておいおい！汗だらだらじゃねえか！

「雪ノ下、睨んでやるなよ。
彼を見ろ。まるで蛇に睨まれたカエルじゃねぇか」

「別にそんなつもりは無いのだけど、比企谷くん、ちょっと…」

そう言って比企谷を引っ張ってこそこそと話を始める奉仕部部員（俺を除く）。

「取り敢えず材木座と呼ばせてもらうぞ」

「う、うむ。苦しゅうないぞ」

まだ怯えてんな。
まぁ良いけど。

「それで、君の依頼はどんなもの何だ？
それによって（雪ノ下の）対応が変わってくるんだが」

「う、うむ。実は我は今度、素人小説の新人賞に応募しようとしているのだが…。
友達がいないので良いのか悪いのか分からん。
そこで、諸君に感想が聞きたい。読んでくれ」

「小説？あ、これか」

俺は床に散らばった紙を広い集める。
内容は……ファンタジーか。

「……」

「……い、おい、鳴滝！」

「ん？どうした比企谷」

「材木座から聞いたから分かったが、小説の感想なんだってな。その原稿、コピーするから渡してくれ」

「ん、了解」

どうやら読みふけっていたようだ。
俺は比企谷に原稿を渡す。

「……因みに聞くが、どこまで読んだ？」

「へ？あと一枚って所だが」

「早ッ！」

「流し読みでもしたのか？」

「いや、速読だが」

「貴方って色々飛び抜けてるのね」

今までやることなかったしなぁ。
暇潰しで本読んでたらいつの間にか身に付いたスキルだ。

「どーも。
一応感想言おうか？」

「いや、後日、全員一緒に聞きたい」

「そうか？別にいいが…死ぬなよ」

「えっ！？どういう意味？」

雪ノ下辺りは毒舌吐きそうだなぁ。
うっかり自殺に追い込むくらいの勢いで言いそうだ。

翌日の放課後。

雪ノ下の寝顔をみて比企谷が危ない橋を渡ろうとしたことはさておいて。

「さて！では感想を聞かせてもらうとするか！」

材木座がドカリと椅子に座って腕をくむ。

そう言えばあれ、厨二病って言うんだってね。

俺、はじめて知ったよ。

「ごめんなさい。私こう言うの良く分からないのだけど」

「構わん！盆属の意見も聞きたかったところでな。好きにいってくれたまへ！」

あ、終わった。

「そう、詰まらなかった。読むのが苦痛ですらあったわ。想像を絶する詰まらなさ」

「ゲッフゥ！？さ、参考なまでに…どの辺が詰まらなかったのか…御教授願えるかな…？」

「そうね、まず文面が滅茶苦茶ね。何故いつも倒置法なの？てにをはの使い方しってる？小学校で習わなかった？」

「ぬぐぅぉはぁ…それは平易な文体で読者に親しみを…」

「それは最低限まともな日本語が書けるようになってからではないの？
それにルビだけど、誤用が多すぎるわ。
能力にチカラなんて読み方は無いのだけど。
聞くのだけど、この『幻紅刃閃（ブラッディ・ヌアシャー）』はどこから来ているの？」

「ち、違うのだ！最近の小説はルビに特徴を…」

「ここでヒロインが服を脱いだのは何故？
必要性が皆無よね。白けるわ。」

「ヒギィィィ！そー言う要素が無いと…」

「完結していない作品を読ませないでくれるかしら。
文才の前に常識を身に付けた方が良いわね」

「ひぎぁぁぐはぁぁ！？……ガク…」

うわぁ…容赦ねぇ…。
比企谷、フォローしてやれよ。
このままだとホントに自殺しそうだぞ…。

「その辺でいいんじゃないか？
余り一編に言ってもあれだし…」

「まだ言い足りないのだけど、まぁ良いわ。
それじゃあ次は由比ヶ浜さん」

「ふぇ！？……あー…えっと、難しい漢字、沢山しってるね！」

「ぐぼぅ！？」

「ひっ！じゃあヒッキー！」

もう材木座は自殺一歩手前だぞ。

…比企谷。お前が心をケアしてやるんだ！

「八幡…お前なら分かってくれるよな…？」

材木座は半泣きで比企谷をみる。

それに答えるかの様に比企谷はうっすらと笑って見せた。

「で、あれって何のパクリ？」

「ぐぶろばっ！？」

「とどめ指してどうすんだ！」

「いや、お前のアイコンタクトは止めを指せと訴えてるように見えたから」

材木座は余りの感想に床を転がりだし、軈て壁に激突した。

「あー、取り敢えず俺の意見は要らないよな？」

「う、ぐぅ…まだだ。まだ終わっていない！」

苦しそうに胸に手を当てて立ち上がる材木座。

その表情には罵倒による恐怖が刻み込まれているようだった。

「さあ！聞かせてくれ！」

「まぁ、感想事態は3人が言ったから。
アドバイスでも出そうかな。
取り敢えず、この小説は何を思って書いた？」

「わ、我の想像のままに…」

「それじゃあダメだ。
材木座、君はさっき『読者に親しみを』って言ったけど、
この小説の内容からして君の趣味に走りすぎている。
詰まり、読者側からすれば自分だけが楽しめればそれで良いって感
じ取れるんだ」

「そ、そんなつもりは…」

「それが作者と読者の違いだよ。
読者の嗜好は千差万別。それこそ億にだって昇る。
時代の流れに添う様にとは言わないけど、それでも読む側の事も考
えなくちゃいけない」

「……」

「だからこれはボツ。
けど、この作品の構成は間違いじゃない。
見直しをすれば悪い点が見つかるように、何度も繰り返し読み返す

ことで
より良質な作品になっていくんだ」

「すげ…」

「ほぇ～…」

「……」

「だから、手本となる小説とか、教材を見て学ぶのも1つの手として頑張ってみてよ」

「…ありがとう。
我はどうやら誤解していたようだ。
鳴滝九十九に出会ったら逃げろと言う噂は偽り。
真の鳴滝は素晴らしい男だったのだな！」

もしかして俺の噂は学校中に広まっているのでは無かろうか。

「それで…その。
新作が書けたら…また読んでくれるか？」

「…ドMなの？」

「あんだけ言われてまだやるのかよ…」

「無論だ。

ここに来れば作品の悪いところが沢山わかる。
自分が書いたものに感想を言ってもらえるのは良いものだ…。
それに素晴らしいアドバイザーが居るからな！」

最早罵倒されにくる事が目的に聞こえるが。

「わかった。また読むよ」

「間違っても自殺はダメだからな」

「お前、まだ引っ張るのかよ…」

「ハハハハ！去らばだ！」

バッとコートを翻して退室していった材木座。
更なる技術向上を祈るとしよう。

こうして、長いようで短かった一日は、依頼終了と共に終わりを迎えるのだった。

「…ところで、何であんなに詳しいんだ？」

「そりゃ、俺が小説書いてるからだよ。
ちゃんと店舗に並んでるぞ？」

「「はぁっ！？」」

「いや、将来的に人と余り関わらなくて済む職場探してたらいつの間にか…」

「あー、傷…か」

「……」

「ネックウォーマーの下ってどうなってるの？」

「残念なことに企業秘密だ。
おいそれと見せるわけにはいかんな」

「ぶー、ケチー」

体育とは、運動に対しての経験を積む物である。
全ての学生が生涯にわたり運動やスポーツに親しむのに必要な素養と、
健康・安全に生きていくのに必要だとされるものだ。
それは身体能力や知識など、成長と共に身に付ける重要な要素と言える。
しかし近来の学生体育において、『体育は遊びの時間である』と言う学生間の認識が強まっている。
確かにそれで成長していく事は間違いではないが、その心情が本来の授業目的の妨げになっていることは否めない。
授業とは本来、学生が未来に必要となる知識を取り入れる場所であって、遊ぶ場所出はないのだ。
並ば放課、又は放課後等はどうなのだろうか。
少ない放課時間を使って勉学に勤しむ者が居ても、周りは気にせず、酷いときには邪魔をする始末。
放課後でさえも、宿題や自習、復習が在るにも関わらず、やはり解放されたと遊びに使う始末である。
そんな彼らが意味嫌うテスト習慣になれば、勉強が出来る者へすがり付き、
醜い醜態を晒すことは毎年恒例と言っても過言ではない。
しかし、彼らはその事を理解しないだろう。
義務教育期間は中学で終わっているのだ。
要約すれば彼らは未来を舐めている。
結論を言おう。

勉強をする気がないのであれば、今すぐ退学しろ。

「よぉしお前ら！二人組作れ！」

さて、体育の時間だ。
高校2年ともなれば体育に選択の科目が追加される。
この学校ではサッカーとテニスだ。
個人的にはドッヂボールがやりたかった。
嫌いなやつにだけぶち当てるのって気分良いよね。

「先生、チームの人数が合わないので俺、彼処でリフティングしてて良いですか？
見ているだけではボールを蹴ると言う経験は積めないと思うので」

「流石だな鳴滝。良いぞ。頑張れよ」

この学校の先生は、その殆どが俺の見方をしてくれている。
どうやら学校中に広まった噂を確かめるべく、教師数人で俺の行動

を監視したようだ。（まぁ、一時期バイトがダメになりそうだったが）

そして普段の生活態度、成績、家庭問題等を考慮され教師たちは、俺を贔屓にならない程度に支援する事を決定したそうだ。

だから俺の顔を見ても怯えないし驚かない。

なんと嬉しいことだろうか。

「……」

1、2、3、4、5、6、7、8、9……。

「おお！凄いじゃないか鳴滝よ！」

「っと…材木座か。どうした？」

リフティングを続けていると材木座が話しかけてきた。

「なに、やけに上手いと思ってな。

サッカーをやっていたのか？」

「残念だが、生まれてこの方奉仕部以外の部活に入ったこともなかったよ」

「そうか。

並ば我にも教えてくれんか？

上手くなり、奴らを見返す手札が増える！」

授業意欲が高いな。
動機は分からないこともないが、努力しようとしているのは分かる。

「わかった、付き合おう」

そして今日の授業は材木座とリフティングの練習をすることになった。

放課後である。

「無理ね」

「いや、無理って…お前さ…」

部室にて、比企谷が来たと思ったら真っ先に雪ノ下の方へと向かい、
『テニス部に所属したい』と言い出した。

何でも戸塚彩夏（とつかさいか）なる者の実力と、テニス部の戦力向上に貢献したいとのことだ。

「無理なものは無理よ」

「いや、要は俺がテニス部のカンフル剤になれば良いわけで…」

「貴方に集団活動が出来ると思っているの？」

…もっともである。

まぁ、実際比企谷がここまで言っているのだからやらせても良いのではないかと思うのだが、

その反面、普段の比企谷からして何かしら別の目的がありそうなのだ。

何時もは相手の目を見て判断するのだが、比企谷の場合は濁っていて読み取ることができない。

「貴方みたいな生き物、受け入れてもらえる筈がないでしょう」

いや、それは言いすぎだと思うんだが。

「もっとも、貴方と言う共通の敵を得て、部員が一致団結することはありかもしれないわね。

けれど、はその努力は排除に向けられるだけで自信の向上に向けられることはないの。

問題の解決にはならないわ。ソースは私」

「成る程なぁ…え？ソース？」

「私、帰国子女なの。
中学の時に編入したのだけど、学校中の女子は私を排除しようと躍起になったわ。
だけど、私に負けないように自分を高めようとする人間は居なかった…。
あの低脳ども…」

うわ、何されたんだ？
俺みたいに肉体的ダメージじゃないだろな…。
靴とか隠すとか？
でも最近の女子は過激なところがあるからなぁ…。

「うへぇ……戸塚の為にも何とかならん物かねぇ…」

「誰かの心配をするような人だったかしら？」

「いや、誰かに相談されたの初めてだったもんで、ついな…」

「何でもかんでも聞いて、力を貸すばかりが良いとは限らないわ」

「なら、お前ならどうする？」

「…そうね、全員死ぬまで走らせて、死ぬまで素振り、死ぬまで練習…かしら」

鬼ですか。
それ確実にリタイアする奴出てくるぞ。

"ガラッ"

「やっはろー!今日は依頼人を連れてきたよー!」

由比ヶ浜か。
となるとその後ろにいるのが依頼人か。
……誰だ?

「あ、比企谷君」

「戸塚…」

「比企谷、どうしてここに?」

「いや、俺は部活だけど…お前はなんで」

成る程。彼女……いや、彼が戸塚彩夏で合っているようだ。
と言うか比企谷は随分親しげだな。何があった?

「いやーほら、何てーの?私も奉仕部の一員じゃん?
だからちょっとは働こうと思って!
そしたら彩ちゃんが困ってる風だったからつれてきたー!」

「由比ヶ浜さん」

「あ、ユキノン！別にお礼とか良いから！
部員として当然の事をしただけだし！」

「由比ヶ浜さん。
貴方は奉仕部の部員ではないのだけれど」

「…違うんだぁ！？」

あ、違うんだ。
てっきり黙認承諾だと思ってたよ。

「ええ、入部届けを貰ってないし、顧問の承諾もないから部員ではないわね」

「書くよ！入部届けぐらい何枚でも書くよ！うえええん！」

俺、書いたこと無いんだけど。

「で、戸塚彩夏くんだったかしら…」

「あ、うん」

「良いでしょう。貴方の技術向上を助ければ良いのよね」

「は、はい。僕がうまくなれば部員のみんなも頑張ってくれる…と思う」

ふむ、依頼内容はテニスの実力向上か。

だが実力ってのは1日やっただけで身に付くほど簡単ではないとコイツらは分かっているのだろうか？

「んで？どうやんだよ」

「あら、さっき言ったじゃない。覚えてないの？」

「おい…まさかあれ本気で…」

「今日から鬼教官と呼んでやろう」

「不名誉な言い方は止めてくれるかしら。不愉快だわ」

「そーですか」

んー、未だに雪ノ下との仲はうまくいっていない。

まぁ出会いが出会いだったからしょうがないとは思うのだが。

何とかならん物かねぇ…？

「うぁっ」

練習を初めてから１０分ほどたった。

走り込み、腕立て伏せ、腹筋に素振り。

流石に死ぬまではやってはいないが、結構疲れるペースである。

そして今、横振りの打ち返しを練習している際、戸塚が転んだ。

「彩ちゃん、大丈夫！？」

「うん、大丈夫だから…続けて」

何かもう自暴自棄になっている気がするのは気のせいなのだろうか？

「まだ、やるつもりなの？」

「うん…皆付き合ってくれるから、もう少し頑張りたい」

「…そう。由比ヶ浜さん、あとお願いね」

「えっ、うん」

そう言い残してコートを出ていく雪ノ下。

「素直じゃねぇー…」

「僕が上手くないから、呆れられちゃったかな」

「いや、雪ノ下は喜んでたぞ。あと心配。
大方、緩んだ顔が見られたくないから…多分救急箱でも取りに行ったんだろ」

「そ、そうだといいな…」

そう、雪ノ下が出ていく際に見えた目には『嬉々』『心配』が浮かんでいた。

顔に出てないだけでここまで遠回しになるのはなんと言うか…。

「そうだよ！
私の時だって、お菓子作り手伝ってもらったし！」

「まぁ、頼ってきた人間を見捨てないってのは分かるな。
お前の料理に付き合うくらいだし」

「むぅ！どー言う意味だ！」

「あはは…」

「あぁー、テニスじゃん」

ふと、コートの外からそんな声が聞こえた。
振り替えれば真っ先に目がいく憎き男の姿。

「ねぇ、あーしらもここで遊んでいい？」

「三浦さん、僕達は遊んでいるわけじゃなくて」

「はぁ？何？聞こえないんですけどー」

「その年で難聴かよ。耳鼻科行け」

「……っ！鳴滝…！」

俺をみるや、顔をしかめる金髪。
どうやら先日の教室での一件を根に持っているようだ。

「あー、ここは戸塚が許可とって使ってるものだから。
他の人は無理なんだ」

「は?あんたも使ってんじゃん」

「いや、俺は練習に付き合ってて、業務委託っつーか、アウトソーシングなんだよ」

「はぁ?何意味わかんない事言ってんの?キモいんだけど」

「意味がわからないのであれば調べてこい低脳。
お前らと話すだけで練習時間の無駄だ」

「ま、まぁまぁ、喧嘩腰になるなって。
皆でやった方が楽しいしさ」

「「…皆…?」」

「皆だと?
あぁ、確かに皆だよな。
人を傷つけて陥れて。一人を犠牲に皆は楽しめる。
お前みたいな奴が考えそうな意見だよ。
お前ら申請書の内容知らないのか?
このコートの使用目的、使用人数、責任者。

これらに該当する事項を書いて初めて使用できる。
低脳にも程があるだろ」

「いや、別にそう言うつもりでいったわけじゃ無いんだ。
何かごめんな？何か悩みがあるなら相談に乗るからさ」

ふざけた奴だな。
未だに俺が誰なのか気づきもしない。
それほどに興味がないのか、照らし合わすことに遺憾があるのか。

「葉山。お前の優しさは嬉しい。
性格がいいのもよくわかった。
サッカー部のエースでお顔まで宜しいじゃないですか。
さぞかし御モテになるんでしょうなぁ…」

「な、何を言って…」

「そんな色々持ってるお前が、何も持っていない俺からテニスコートまで奪う気なの？
人として恥ずかしくないの？」

「その通りだ！葉山ナリガシ！
貴様のやっていることは、人輪にも劣る最低の行動だっ！」

材木座。
お前は黙っていなさい。
ややこしくなるから。

"パコンッ""バシュッ"

不意に、葉山側からボールが飛んできて、俺達の近くにあるネットに当たる。
所謂コードボールだ。

「ねぇ隼人、あーしいい加減テニスしたいんだけど」

コイツ…!

「…じゃあこうしよう。
部外者同士、俺とそっちの誰かが勝負する。
勝ったら今後の昼休み、ここを好きに使えるってことで…」

「話を聞かない奴の典型だなお前は。
この世全ての申請書に土下座してこいや」

「…確かに申請書は必要だ。
だけど、俺達はここの生徒なんだ。
使ってはいけない道理はないはずだよ」

「道理と嘩ずるか…(殺す…!)
比企谷、俺が殺る。間違えた、殺る。
あれ?直らないな、殺る殺る……もういいか」

「お、おう。頼んだ」

さて、ここで少し話をしよう。
俺が虐められてきたことはご存じの通りだ。
そんな俺はある日を境に虐めてきた奴らを返り討ち、もしくは復讐を遂げてきた。
しかしだ、そんないじめっ子達の内の一人だけ、復讐できなかった奴がいる。
それがコイツ、葉山隼人だ。
俺が高校2年になり、同じクラスになったことで認識し、
今日と言う日を待ち望んでいたのだ。
高校ともなると退学とかあるからさ…中学とは勝手が違うんだよね。

「何それ！超面白そう！
ならいっそ混合ダブルスにすりゃいいじゃん！
あーし頭良い！」

「成る程、これが脳筋と言うやつか。
うざさゲージを振り切る心境だ」

「それでいいかな？」

「良いんじゃないの？
俺は一人で殺るけどな…また間違えた」

「……わかった」

「おい、大丈夫なのかよ」

比企谷が駆け寄り、声をかけてきてくれる。

「あ、私でようか？
これでも部員だしさ…」

「そうなるとお前一人が集中砲火を受けることになるぞ。
それはこのゲームだけの話ではない。
今後の学生生活においての話だ」

「えっ……う…」

「別にお前は間違ってはいない。
それに、これは俺がしたいからするんだ。
だから大丈夫だ」

「……頑張ってね！」「頑張れよ」

「おうとも」

そして俺はコートに入る。

退治するのはやはりと言うか葉山と金髪。

「あーし経験者なんだけど、手加減とか出来ないから」

「手加減出来ないほどの技術不足か。

経験者（笑）」

「くっ！戸塚！合図して！」

「え、はい。０－０、ゲーム！」

さて、挑発で相手は御冠。

俺は水面のごとく冷静。

でも知ってるか？水面は静かでも、水中では荒ぶってんだぜ？

「はぁっ！」

金髪からのサービス。

遅い、遅すぎる。

「笑わせんなぁ！」

"ズバンッ！"

俺は金髪の足元を狙って打ち返す。

金髪は反応できず、ボールは左足を掠めてフェンスに当たる。

「０－１５」

「これで経験者？話にならんな」

「あり得ないし…」

「由美子、ドンマイ」

「鬱陶しいラブコメ繰り広げてないでさっさとしろや。
時間すくねぇんだよ」

「…次から本気で行くから」

そう言って金髪はボールを上に投げる。

「ふっ！」

パコンッ！と言う音と共に、先ほど全く変わらない勢いのボールが飛んできた。

「変わんねぇよボケがぁ！」

再び金髪の足元へ打ち返す、と言うことはせず、
今度は逆サイドのライン上に打ち返した。
当然とれるはずもなく、誰一人動けないままフェンスに当たった。

「０－３０」

「ウソ…」

絶望した面持ちの金髪はその場に座り込んでしまった。
早すぎだろ。

「由美子！……ここからは俺が一人でやる。良いよね」

「どーぞごじゆーに」

２対１でも勝てない相手に一人で挑むとか、
心が繋がっているとか言う最近のアットノベルスのノリなのかねぇ？

「はぁっ！」

再び再開して葉山のサーブ。
呆れるほどに直線で、なんの捻りもないノーマルサーブ。

「ほい」

俺は空高くに打ち上げる。

空には太陽。それが意味することは…

「なっ！眩……」

目潰し。俗に言う太陽拳だ。

葉山はボールの位置を見誤り、空振り。

「０－４５」

「おいおい、今んとこ全部リターンエースなんだが。
やる気あんの？」

「くっ……卑怯な手を…！」

「は？卑怯？何を根拠にそんなことを言うのか。
もしかして負けたときの言い訳か？
無様だな。仮にそうでないとしても決めつけは総計だと思うがな」

「…君はこんなプレーで楽しいのか！」

「楽しい？何勘違いしてやがる。
お前、俺らが楽しんでテニスしてたとでも思ってんの？
戸塚の膝を見ろよ。盛大に転んで怪我をした。
それほどまでに真剣だったんだよ。
それをお前らと来たら…まるで自分が正しいかのように言いやがって」

「だが練習だって皆が居れば…」

「皆、皆、皆…お前はウサギか？
一人だと死ぬのかよ。
お前はテニスをするのに必要な人数知ってるか？」

「…4人だろ」

「違う、5～8人だ。
審判2人、プレイヤーが2～4人、判定に2人。
それだけ居ればゲームは成り立つ。
だがな、戸塚の場合は一人なんだよ。
それを皆とやらの複数人で引っ張り凧に練習？
殺す気かよ。むしろお前が死ね」

「あ……」

「そしてお前ら。
今日の2時間目の放課中、サッカー部は国立を目指していると、
そう言っていたな。
西高のサッカー部は同じように国立を目指し、
昼休みも返上して練習に勤しんでいる。
それをどうだお前らは？
人の練習邪魔して？部外者だのキモいだの罵倒して？
挙げ句の果てには皆で仲良く？
できるわけねぇだろ」

…長く喋りすぎた。
昼休みは後１２分…か。

「さっさとサーブ打てよ。
お前らのせいで戸塚の練習時間が無くなる」

「……止めとくよ」

トボトボとラケットをもとあった場所へと戻し、
テニスコートを出ていった葉山。
ギャラリー達も、それに続いて撤退していく。

「戸塚、時間は少ないが、少しだけでも練習しよう」

「あ、うん！」

俺は戸塚に提案し、ラケットを手渡した。

「お前、良かったのか？」

「何が？」

「いや、あんなことしたらまた虐めに合うんじゃ…」

「比企谷。
俺は今まで虐めてきた奴らを返り討ちや逆襲で方をつけてきた。
そして今日、長年の復讐も遂げることができたんだよ。

少々物足りなかったけど」

「それって…まさか」

「おう、葉山隼人は俺の中学時代の虐めっ子だ」

その時、優しい風が吹いた気がした。

憎しみの感情は人が必ず持つものである。
その感情を持つときこそ、自分が不愉快だと感じたときに起こる物だと思う。
それが人生の大半を閉めているのならば尚更だ。
そんな人間の原動力は憎しみであること間違いない。
だが人間はその感情を表に出そうとはしない。
何故ならそれが当たり前であり、普通だからだ。
なら表に出してしまう人間は何なのか。
答えは簡単。我慢できないほどに心が弱いのか、
若しくは我慢の限界であるかのどちらかだ。
自分は後者であると即答するだろう。
当たり前だ。私は中学時代の全てを棒に降るが如く我慢したのだから。
ならば俺はその現況を一生を賭けて許さないだろう。
何故ならそれが私と言う生き方なのだから。

俺、鳴滝　九十九は一人暮らしだ。
毎朝3時に起床し、朝食を軽く作る。
その後、新聞配達のバイトへ出かけ、終了と同時に一時帰宅。
制服に着替え、弁当に昼食用の具材を詰め込んで学校へと登校する。
それが俺の日課であり、一日の始まりとも言える。
そんな俺だが、一度だけ、バイトを中断せざるをえない状況を作り出してしまった。
配達中に事故に遭ったのだ。
偶然見かけた同い年位の少年が、路上に飛び出した犬を助けようと飛び出し、
そこに接近する車に跳ねられそうになるところ。
そこへ俺が庇おうと、少年をはねのけ、俺は撥ね飛ばされた。
結果だけを見るのなら、全員無事。
しかし、行程を見るのなら、助けた少年は右足を車に強く打ち付けて骨折。
俺は撥ね飛ばされた先にあった木に体を打ち付けて、軽い脳震盪と両手首捻挫をした。
割って入ったにも関わらず、自分だけ助かったような結果に罪悪感を覚え、
少年に謝りに行こうとするも、病室が分からず、
更には人にも聞けずに諦める他なかった。

今ではその事だけが気掛かりで、毎朝配達をしながらあの時の少年を探すのが日課の一部に加わっているのだ。

「…はぁ」

恐らくながら、彼は俺を恨んでいるだろう。

少なくとも彼の骨折は俺のせいなのだから。

もしも彼が望むのなら、金なり謝罪なりを精一杯させてもらう所存だ。

とは言え、会えていないのもまた事実。

いつか会えると信じた矢先のこの部活でまさかの再開である。

しかし彼は知らない、または覚えていないのか、俺の事は不良だと言うことしか知らないらしい。

実際は違うのだが。

だからこそ言うことが出来ないでいた。

罪悪感は勿論ある。

しかし、それ以上に恐怖が閉めているのだ。

何が怖いのかは察してほしい。

例を挙げるのなら『どの面下げて』と言うやつだ。

何分初めての事項で、どう対処すればいいのか分からない。

普通慣れていることでも無いのだが。

最近は彼に会うたびにその話題を挙げようとする。

しかし、喉の手前で止まる。

やはり俺にはまともな人生は歩めないのだと再認識したその日の出来事だった。

"ガラッ"

「おう比企谷、お疲れさん」

「…よう」

奉仕部部室。

毎度のように無言で入室する比企谷にそれまた毎度のように挨拶をする俺。

最近、俺は比企谷のフォロー役となっている気がするのが否めない。

「…会わなかったの？」

「誰とだよ」

雪ノ下が比企谷に問いかける。

"ガラッ"

「あー！いたー！」

「な、何だよ」

突然扉を開けて入ってきた由比ヶ浜に驚きながら、
比企谷は返答を返した。

「お前が中々ここに来なかったらな」

「探しにいっていたのよ。由比ヶ浜さんが」

「その倒置法で自分は違いますからアピール要らねぇから。知ってるから」

「俺はそんなつもりないからな。因みに俺はついさっき来たばかりだ」

そう。
俺は職員室に呼び出されており、部室に来るのが遅れている。

「わざわざ聞いて歩いたんだからね！
そしたら皆『比企谷？誰？』って言うし…超大変だったんだからね！」

因みに俺も探されていた。
俺の場合、由比ヶ浜は真っ先に心配されたらしい。
主に暴行を受けないかとかで…。

「わ、悪かったよ」

「べ、別に…いいんだけどさ…。
だから…その…携帯教えて！
ほ、ほら！わざわざ聞いて回るのおかしいし！恥ずかしいし！
…どんな関係って聞かれるとか……あり得ないし…」

「別に良いけどよ…ほれ」

そう言って何やら薄い機械?を手渡す比企谷。

「あれ?確か携帯ってこう…開くやつじゃ無いのか?
ほら、ボタンがあって、文字が打てる小さい受話器みたいなやつ」

「お前は昭和のじいさんかよ…。
これはスマートフォンっつってだな…。
お前の言っている形の最新型みたいなもんだ」

「へぇ…難しそうだな」

「そうでもねぇよ……つーか今の会話からしてお前、携帯持ってないのか?」

「ふっ。俺はそんな電子機器に金銭を巻き上げられる失態は犯さない。
俺は知っているぞ比企谷。
それは俗に言う裕福な家庭を持つ者が持つ、言わば排水溝の延長線上の物だと言うことはな！」

そんな大切なお金を通話した瞬間に何千円と消費するドブを好んで使うなど愚の骨頂。
俺はそうやって騙された人を知っている。
婆さんがそうだったし…。
あの時は大変だったなぁ…。

「いやいやお前。それ大分前の話だろうが。
今は契約したときにコースとか選んで設定とか出来るんだぞ。
ふざけたことをしなければ月に払うかねなんて五千円以下だ。
因みに俺は月々２８００円位だ」

「馬鹿なことを言うな！
婆さんは１０万程をかっ拐われる事件を起こしたんだぞ！
あの時はどれだけ大変だったか！」

「だから時代がかわってんだよ！
今じゃそんなこと全くないからな！」

「なん……だと！」

ならあの時の苦労は一体何だったんだ…。
1ヶ月間ご飯と味噌汁しかない生活を送ったあの頃の苦しさは…。

「はいヒッキー。一応登録しといた」

「おう……うわ…（何これ？登録名が出会い系のスパムメール見たいになってんぞ…）」

何故だかは知らないが、由比ヶ浜から返された携帯を見て比企谷は軽く引いているように見えた。

「あ……うわ…」

「どうかしたの？」

携帯を開いた由比ヶ浜が、急に暗い顔をしだす。
どうやら何かしらの嫌なことがあったと推測する。

「ううん。ちょっと変なメールが来ただけ」

確信。嫌なことだった。

「比企谷くん。
裁判沙汰になりたくなければ今後そう言う卑猥な行為は止めておきなさい」

「真っ先に比企谷を疑いにかける雪ノ下は本当に鬼畜だな」

「内容がセクハラ前提で、しかも犯人扱い…。
証拠を出せ証拠を」

「その言葉が証拠と言っても良いわね」

「っ！？」

まて、その表情は何故分かったっていう顔だぞ。
比企谷…お前…。

「犯人の台詞なんて決まっているのよ。
『証拠はどこにあるんだ』『大した推理だ。君は小説家になったほうがいいんじゃないか』
『殺人鬼と一緒の部屋になんか居られるか』…」

「最後、寧ろ被害者の台詞だろ。死亡フラグも良いところだ」

「そうだったかしら…」

よくあるよね、こう言う罪を認めさせるような言い回し。
そう言うときに決まって犯人扱いされたやつは実は違いました～なんてオチに繋がるんだよな。

「いやぁ、ヒッキーは犯人じゃないと思うよ」

「…証拠は？」

おい、お前も言ってるぞ。

「んー、なんちゅーかさ、内容がうちのクラスの事なんだよね。だからヒッキーは無関係と言うか！」

「おい、俺も同じクラスなんだけど…」

比企谷、哀れ…。

「成る程。じゃあ比企谷くんは犯人じゃないわね」

「証拠能力認めちゃったしよぉ…」

「なら鳴滝くん……は違ったわね」

「分かってて言い欠けるの辞めてくれる？ちょっとドキッとしちゃったじゃん」

「あら、思い当たる節でもあるのかしら」

「ふざけんな。俺にだって理想の女性像ってのがあるんだよ！間違っても由比ヶ浜には該当しない！」

家庭的で？料理が俺並みかそれ以上？口煩くなくて？親切で清楚で？

あとあと…美人とか？

「敢えて貴方の理想は聴かないことにするわ」

「そうしてくれ」

「だが俺は聞く。
鳴滝、どんな人？」

おっと比企谷くん。
なかなか突っ込んでくるねぇ。

「家庭的で料理は俺並みかそれ以上。
親切で清楚で口煩くなくて…あと美人だと良い」

「理想高すぎだろ…」

「まぁ理想と現実は大分違うって遥か昔から分かりきっている。
だが理想を持つだけならただだからな」

「まぁそうだが」

まぁそんな女性は殆どいない。
いたら逆にビビる。

「と、兎に角。こう言うのたまにあるからさ。
もう気にしないようにするよ」

＂コンコン＂　＂ガララッ＂

由比ヶ浜が言い終わった直後に扉がノックされ、一人の男子生徒が入ってきた。

「……まるでタイミングを読んだかの登場だなクソッタレ」

入ってきたのは葉山隼人。

俺が小声だったのか、聞こえていなかったようでマイペースに接近してくる。

「奉仕部ってここで良いんだよね？」

「えぇ…ハハハ…」

葉山のスマイルに釣られるように笑う比企谷。

恥じることはない。

ソイツと話すやつの大半が釣られて笑うのだ。

忌々しいことこの上ない。

「平塚先生から悩みを相談するならここだって教えてもらったんだけど、

いやー、中々部活を抜けられなくって…」

「あーもうウザイカスいキツイ臭い。

さっさと用件言って消えてなくなれ」

「…悪かったよ。
えっと…これなんだけどさ…」

そう言って携帯を取り出し、由比ヶ浜に見せる葉山。

「あ…変なメール……」

俺達を代表するかのように、雪ノ下がそのメールを読み上げる。

「『戸部は稲毛のヤンキー。西高でヤンキー狩り』
『大和は3股。最低の屑野郎』
『大岡はラフプレーで相手選手のエース潰し』
チェーンメールね」

「これが出回ってからクラスの雰囲気が悪くってさ。
それに友達の事を悪く書かれていれば腹も立つし…あぁ、でも犯人探しがしたいんじゃないんだ。
丸く納める方法を知りたい。頼めるかな？」

言い終わるが早いか、ニッコリ笑う葉山。

「腹が立つとか言った側からニコニコ笑ってんじゃねえぞ」

「でた…必殺技、ザ・ゾーン…」

ザ・ゾーン？

小声で言ったその言葉は比企谷から発せられた。
聞こえたのは俺だけの様で、葉山は俺の言葉に顔をしかめている。

「（比企谷、ザ・ゾーンって何だ？」

「（説明しよう。
ザ・ゾーンとは、真にリアルが充実した者のみが持ちうる固有スキルで、
その最大の特徴は場を整えることにある。
彼らはリアルが充実しているために見下されがちな者にも優しい、
カリスマ性を有する良い人が持つ独特の空気間なんだ」

「（成る程、だが比企谷。
お前、二次小説とか知ってるか？」

「（ああ、ネットにある素人投稿のあれだろ？」

「（そこにさ、ニコポって用語があるだろ？」

「（ニコポ……っ！まさか！」

「（ああ。アイツは男女構わずにあの笑顔を振り撒く。
もしかしたら…いや、もしかしなくてもそう言う趣味や嗜好があるかもしれない…」

「「（…掘られる！」」

俺と比企谷は二人して尻を押さえる。
結論…葉山隼人はホモ、若しくは両刀。

「…詰まり、事態の収集を図れば良いのね？」

「う、うん。そう言うことだね」

「なら、犯人を探すしか無いわね」

「うん！よろし……え？何でそうなるの？」

「チェーンメール。
あれは人の尊厳を踏みにじる最低の行為よ。
自分の顔や名前を出さず、ただ人を傷つけるために誹謗中傷の限りを尽くす。
止めるならその大本の根元を根絶やしにするしか効果はないわ。
ソースは私」

「実体験かよ…」

「根絶やしにしたんだ…」

雪ノ下も雪ノ下でそう言った虐めにあってきたようだ。
今度からもう少し当たりを弱くしてやろう。

「兎に角、そんな人間は確実に滅ぼすべきだわ。

それが私の流儀。
私は犯人を探すわ。一言言うだけでパッタリ終わると思うわ。
その後どうするかは貴方の最良に任せる…それで構わないかしら？」

「あ、あぁ…それで良いよ…」

妥協したのか？
て言うかやっぱ心のそこから心配している訳じゃないな。
そうでないのなら食い付く筈だし。

「メールが送られ始めたのは何時から？」

「…確か先週末からだよな？」

「うん…」

「先週末…あぁ、そう言うことか」

「え？分かったの？」

「何お前、探偵？」

比企谷が俺の言葉に何故か引いた感をだす。

「大体のグループでは仲良くがモットーになっている節がある。
ではそこにそのグループ以下の人数でグループを作る場合、確実に
誰かが溢れることは自明の理。

もしもそこに『自分以外の誰かが』なんて考えが浮き出たとするのなら？」

「……グループ……班？…職場見学か！」

「正解だ。
まあそんなちんけな班決めで内輪揉めを起こすのなら、
程度の浅いグループだったって事だろ。
何とも浅い友情なのかねぇ？」

「…確かにこう言うイベント事のグループ分けは今後の関係性に関わるからね…。
ナイーブになる人もいるんだよ…」

「職場見学のグループは三人一組。
四人から三人選ぶんだから、一人は必ずハブになる。
当然誰かを蹴落とすよな」

「じゃあ、その三人の中に犯人がいると見て間違いないわね」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！」

今度は何だよ。
また話の腰を折るような発言か？
いい加減にしとけよ腐れ外道…。

「俺はアイツ等の中に犯人が居るなんて思いたくない。

三人の事を悪くいうメールなんだぜ？
アイツ等は違うんじゃないか？」

お前の脳内は花畑か。

「馬鹿かお前は…。
そんなの自分に疑いが掛からないようにするために決まってるだろうが。
もっとも、俺なら敢えて一人だけ何も言わないでそいつに罪を被せるけどな」

「ヒッキー、すこぶる最低だ…」

「知能犯と呼べ」

「俺なら誰か一人を精神的に追い詰めて当日出席出来ないようにするな」

「鳴滝…その手もあったか…」

「二人して最低だ…」

まぁ、冗談なんだが。
しかし、小学生辺りが考えそうな幼稚な手だな。
看破なんて割りと簡単だろうに。

「…取り敢えず、その三人の事を教えてもらえるかしら？」

「うん…戸部は見た目悪そうに見えるけど、一番ノリの良いムードメーカーだな。
イベント事にも積極的に動いてくれる。良いやつだよ」

「騒ぐだけしか脳がないお調子者…と言うことね」

葉山の説明に饒舌なメモを取る雪ノ下。
あの変なしゃべり方のヤツか…。
アイツ騒ぐだけで人の迷惑考えないから嫌いなんだよね。

「…どうしたの？続けて」

「や、大和は冷静で人の話をよく聞いてくれる。
ゆっくりマイペースで安心させてくれるって言うのかな…良いやつだよ」

「反応が鈍い上に優柔不断…と」

あの体格の大きいヤツか？
何か騒ぎの助長してるようにしか思えない奴だよな。

「大岡は人懐っこくて、いつも誰かの見方をしてくれる。
気の良い性格だ。良いや「人の顔色を伺う風見鶏…ね」…だ…よ…」

「最早誰でもやりそうな回答である。

て言うか庇い過ぎだろ…やっぱりホモなのか？」

「葉山くん、人の趣味はそれぞれだけどその趣味はどうかと思うわ」

「ち、違う！俺にそんな趣味はないよ！
俺は普通に女の子が好きだ！」

「今度はプレイボーイな発言。
最早救いようがない」

「そんな……由美子かわいそう…」

「いや、そう言うことじゃなくて…」

何だか話が脱線してきたぞ。
このまま依頼は無しの方向に向かないだろうか？

「取り敢えず葉山くんの説明だけじゃ分からないわね。
由比ヶ浜さん、情報集めをお願いできないかしら？」

「え？うん…出来るかな？」

あ、やっぱりやるんだ。
て言うか俺その三人の事知らないんだけど。
精々放課で騒いでる程度にしか認識がないな。

「こいつが何かの用事を作って当欠するのが良いと思う」

「それだと本末転倒よ。
根本的な解決にはならないわ」

「ならこいつが怪我をしてグループ全員が当欠」

「却下」

「こいつがクラスで嫌われものになる」

「無理だな」

悉く却下を示される俺の意見は、言う旅に葉山の顔をしかめさせた。

「いや、出来るだろ。
例えば…全員の前で女子のスカート捲るとか？」

「そんなことできるはずないだろ！」

「いや、さすがに冗談だから」

何でそんなにむきになるの？
まぁやってくれるなら確実に変態のレッテルを張られることになるけどさ。

「……」

2年F組教室。

あの後、雪ノ下から件の3人を知るために情報を集めろと指示を受けた。

俺としては、情報集め事態はやることに遺憾はない。

だが葉山の依頼のためと言われるとやる気が上がるどころか落下する勢いだ。

「あいも変わらず喧しい…」

葉山のグループはいつも通り騒ぎ、後列の空間を目立たせている。

やれ葉山が将来を見据えている。

やれこれからは真面目系だ。

やれ少年の心を忘れたらヤバい。

あの野郎に限っては、何処へ行こうとも親の仕事を継ぐだろうことが目に見えている。

そして真面目系だと発言をするのなら、今すぐにでも勉強しやがれと言ってやりたい。
あと少年の心以前に落ち着きをもて馬鹿野郎。

「…はぁ」

その日の昼休み。
俺はこれと言った情報を集めることができなかった。

「で、何かわかったのかしら」

放課後、部室にて比企谷が「謎はすべて解けた」と豪語し、今回の件に関わっている5人が部室へと集まった。

「犯人については分からん。だが一つ分かったことがある。あのグループは葉山のグループってことだ」

「…あぁ、そゆこと…」

「はぁ?今更なに言ってんの?」

「えっと…どういう意味？」

まぁ理解できないのは分かってた。

「言い方が悪かった。
つまり、葉山の為のモノって意味だ」

「別に…そんなことないと思うけど」

「葉山、お前はお前が居ないときの３人を見たことがあるか？」

「あ、いや…無い…けど」

「アイツ等は三人だけの時は全然仲良くない。
分かりやすく言えば、アイツらにとって葉山は『友達』で、
それ以外の奴は『友達の友達』なんだよ」

「あっさ。関係浅」

「それ凄い分かる。
会話を回してる中心の人が居ないと気まずくなって携帯弄っちゃう」

「仮に貴方の言うことが本当だったとして、
３人の犯行動機の補強にしかならないわ。
犯人を突き止めない限り、事態は終息しないと思うのだけど」

どんだけ犯人突き止めたいんだよ。
拷問とか尋問とかしたくてたまらない人？
普段の饒舌ってこう言う場で生かされるんだなぁ…。

「葉山、お前が望むのなら穏便に解決することが出来るぞ。
犯人を探す必要もなく、これ以上揉めることもなく、
あの三人が仲良くなれるかもしれない方法が」

「……なぁ比企谷。
それってコレを班決めから外す方法か？」

「ぐ、やるな鳴滝。
その通りだ」

何でダメージ受けてんの？
俺何もしてないよね？

「そう言う鳴滝君は何か別の案があるのかしら？
と言うか、貴方は何か情報があるのかしら？」

「何でそんなに喧嘩腰なの？
…まぁ強いて言うなら五月蝿かった。喧しかった。
教室に居るのがいつも以上に苦痛だった」

「そんなに五月蝿かったんだ…」

「まぁ方法と言うなら…比企谷の意見と近い。

コレが全員＋αで行く」

「…頭大丈夫？」

雪ノ下が俺の頭を心配…してないな。
どうやら感にさわった様だが、最後まで聞かないうちから罵倒するのは如何なものか？

「お前こそ大丈夫かよ。
そんなに犯人撲滅したいの？」

「あら、そんなことは言ってないわ。
私は犯人を探すしか無いと言っているだけよ」

その後どうするのか言わない時点でもう予想が出来るんだが…。

「そもそも班決めの人数は３人一組。
そしてコレのグループの人数は見積もって４人。
なら二班に各々で入り、グループ外の奴を誘って同じ場所へいけば問題はないはずだ」

「ああ！そっか！その手があったんだ！」

「だがその場合、葉山のグループに強制参加させられるんじゃないのか？
俺は正直御免だな」

「俺だって御免だ。
だが、こう言った方法もあるのだと、頭の片隅の奥の奥に置いとけば良い」

「それ遠回しに忘れろって言ってない？」

「どうだろうな？」

俺としてはこいつに俺の意見が採用されるのが嫌なだけだ。

「……わかった。参考にしてみるよ」

「参考にするなら丸パクリは止めてくれよ」

「……ヒキタニ君の意見でやらせてもらうよ」

「あっそ」

「「「……」」」

そんな経緯があって、葉山の依頼は終了した。
後日、葉山は件の3人に「一緒にいかない」と断りを伝え、
最終的にあの3人が仲良くなると言う結果となった。

「なぁ、鳴滝」

「ん？どした」

窓際で外をぼーっと眺めていると、比企谷が話しかけてきた。

「お前はどこに行くのか決めたのか？」

「俺は当欠するから関係ないぞ」

「へ？何かあるのか？」

「んー……まぁな」

「っ…そうか」

…どうやら比企谷は俺の考えていることを察したようだ。
流石は人間観察がうまいだけのことはある。

「まぁ、確り行ってこいよ」

「おう」

それっきり俺達は会話をせず、チャイムがなるまで二人して外を見てぼーっとするのだった。

生き方の否定

人が持つ感性や価値観は、己が見付けるものである。
ある人は些細な切っ掛けから重力に気づいた。
感性とは、一人一人違いが出るものである。価値観もまた然り。
『～が凄いよね』『～なんだけど、どう？』のように、最近でもなく自分の感性を他人に押し付けようとするケースが多々見られる。
そうした中で自分と反の合わない輩は直ぐ様コミュニティーから外されることだろう。
何故ならそれが動物社会の原則とも言える行動なのだから。
『長いものには巻かれろ』　この諺は、この例にピッタリだろう。
自分より格上だと判断してしまった人物にはへこへこと頭を下げる。
今ではそれが当たり前であると、社会通念が出来上がっている。
この様な風習紛いな事を平気で行う者ほど、回りに人は居なくなるのだと私は思う。
だからこそ私は抗おう。
それがお互いのためになるのだと信じて。

「鳴滝、今日はどうして遅刻をした？
弁解があるのなら聞いてやろう」

職員室。
その教員席の一枠で、平塚先生に説教を食らっている。

「まるで俺が意味もなくサボった見たいに言うんですね。
目撃証言でもあるんですか？
まぁ、朝はバイトと畑の世話で遅れたわけですけど」

そう、俺は今日、遅刻した。
詳しく言えば3時間目位に登校したのだ。
理由は今話した通り、新聞配達のバイトと畑の世話で遅れたのだ。

「はぁ…馬鹿を言うな。
バイトは知っているが、畑の世話など…はじめて聞いたぞ」

「仮にも生徒を疑いにかかるのは戴けませんよ。
それに嘘じゃないですし」

「ほう、ならば証拠を見せたまえ」

何か最近この言葉を聞きすぎている気がするのは気のせいだろうか？

「…もう良いです。
それで？何かペナルティは何ですか」

「なんだ、嘘だったのか？」

「疑いを張らすのが面倒になりました。
さっさとしてくれます？一応次の授業があるんで」

「…わかった。
では、放課後に職員室「無理です。今日は早く帰らなくてはならない予定があります」……ならば昼休みだ」

「わかりました」

やれやれ、俺が何したって言うんだ。
遅刻しても授業に遅れなければ問題はないだろうに。
そうして俺は自分の席へと向かうのだった。

「ぐほぅ！？」

昼休み。

何故か遅刻をした比企谷が平塚先生に殴り倒されていた。

「お前何したんだ？」

「ふぐぉ……遅刻が悪であると言う事への逆説を唱えただけだ…」

「つまり先生の怒りに触れた…と」

最近よく殴られてるけど、もしかして殴られたい人？

確かMって言うんだったか。

「ん？…全く。このクラスは問題児が多くてたまらんな。

川崎沙紀、君も重役出勤かね？」

「……（ペコ」

「最近多いが…気を付けたまえよ？」

見た感想を言うのなら銀。

腰にブレザーを巻き付け、赤色の髪止めが銀色の髪と合わさり、際立っている。

そんな女生徒は無言で頭を下げ、自分の席であろう場所へ向かい、椅子を引いて座った。

「黒の…レース」

「バカじゃないの？」

どうやら比企谷は彼女のスカートを覗いたようだ。

「お前、その内大変な目に愛想だよな」

「…ほっとけ」

比企谷は立ち上がり、尻をはらって教室を出ていった。

「鳴滝、今日は御咎め無しとする。
以後気をつけたまえ」

「素直に時間がないとは言えないんですか？
そう言う遠回しなことしているから、婚期だの恋愛だのから逃げられるんじゃないですか？」

「そ、そうなのか！？」

急に俺の肩を掴み、息を荒げて問い詰めてくる平塚先生。
うん。正直怖い。

「ま、まぁ俺の解釈ですから参考に成れば…みたいな？」

「うむ…素直か…そうかそうか…」

何かぶつぶつと呟き、顎にてを添えながら教室を出ていく平塚先生。

「ああいう所も逃す理由の一つなのかねぇ？」

俺はその場に立ち尽くし、平塚先生が出ていった先を見つめるのだった。

放課後。

俺はいち速く自宅へ戻ろうと走った。

今日は近所の人達と今朝に取った野菜を分けあって、お疲れ様と言う会をすることになっている。

「……」

――――が、どうやら腰痛を拵えたようで、

会の取締役のお爺さんがダウンし病院へ直行。

後に残された俺達は、会を開く雰囲気ではないと感じとり、

各々解散となった。

「晩飯……どうしよ」

夕飯は会の席で食べることにしていたので、用意などされていたない。

「はぁ……外食か…」

余計な出費にはなるが致し方ないと踏み、近くにあるファミレスへと向かうのだった。

「…で、何が起きた」

ファミレスに到着し、中に入ったのは良かったのだが、そこで問題発生。

家族席に座っている何時ものメンバー＋二人に戸塚。

その内の中学生の男子に威嚇を放つ比企谷に何故か呆れを見せる中学生の女子。

そしてその様子を理解できない様子の由比ヶ浜とこれまた呆れている雪ノ下。

「あ、ツクモン、やっはろー」

「おう…で、何があった」

「あー！貴方は！」

再度聞き直そうと問いかけた所、帰ってきたのは驚きの声だった。
見ると中学生の女子の方が俺を指差して驚いている。

「お兄ちゃんこの人だよ！ちょっと前に助けてくれた人！」

「何！？」

いきなり叫び出す中学生の女子。

「…話が読めん」

「彼女は比企谷君の妹さんだそうよ」

「比企谷小町です！あの時はありがとうございましたー！」

声でかい。テンション高い。元気すぎ。

「すまないが、人違いだと思われる。
俺には記憶がない。君のことも初めて見る…筈だ」

「ええ！？ほ、ほら、商店街で小町がぶつかっちゃって…
怖い人に怒られてるところ助けてくれたじゃないですかー」

商店街…怖い人……ダメだ思い出せん。

「すまん、思いｄ「鳴滝、覚えてるよな？」…比企谷？」

「ほら、このプリティフェイスだ。
忘れることなんてある筈の無いくらいのプリティフェイスだ」

鬼気迫る顔で詰め寄る比企谷。
こいつに一体何が起こっている！？

「あ、ああ…思い出した。たった今！しっかり思い出したよ！」

「何だとお前！家の妹をたぶらかすきか！」

「お前めんどくせぇな！」

俺は少し強めに比企谷を席へと押し戻す。

「それで、何の集まりだ」

「大司君の悩み相談を聞いていたのよ」

「大志君？あぁ、君か」

「は、はい…川崎大志です…その……」

おい、何故怯えている。

そんなに俺が怖いのか？このネックウォーマーが悪いのか！
それとも目付きか！

「ちょ、ツクモン怖い。目が怖いよ」

「まるで獲物を刈る動物の目ね」

「ちょっと待てコラ。
睨んだつもりは毛頭無いぞ」

何故そこまで言われなくてはならないのだろうか。
これはもう偏見だろう。

「人は見た目で判断してはならない。
それが人付き合いの秘訣出もあるんだぞ。
近所の人もみんな良くしてくれている。
俺は悪いやつなんかじゃないぞ」

「だそうよ大志君。
彼の事は気にしないで悩みを聞かせてくれるかしら」

おのれ雪ノ下め…フォローくらいしてくれてもいいだろうが！

「は、はい。実は最近俺の姉ちゃん…川崎沙紀っていうんすけど、
不良化してきたって言うか…」

「ああ、今日見たな。綺麗な女生徒だった」

「川崎さんでしょ?ちょっと怖い系って言うか…」

「お前友達じゃねぇの?」

「まぁ話したことくらいはあるけど…て言うか女の子にそう言うの聞かないでよ!
答えずらいし…」

怖い?あの女生徒が?
俺の見解ではストレス溜まってて顔に出てるだけに思うが…。

「でも、川崎さんが誰かと仲良くしてるところ見たことないかな…」

「それでね、最近帰りが遅いお姉さんがどうしたら戻ってくれるかって相談受けてたんだよ」

遅いって…俺じゃあるまいし。

「そうなったのはいつ頃かしら」

「最近です。
総武校行くぐらいだから…中学の時は真面目だったし、優しかったっす」

「詰まり、比企谷君と鳴滝君と同じクラスになってから変わったってことね」

「ねぇ何で俺が原因見た言い方するの？俺は病原菌なの？」

「そんなこと言ってないわ。
被害妄想が過ぎるんじゃないの？比企谷菌」

「言ってるから！菌って超言ってるから！」

「噛んだだけよ」

「…くっ、おい鳴滝。お前も何か言い返せよ」

「いや、強ち否定出来ないなぁってな」

「んな！お前も俺をディスるのか！」

ディス……何？

「いや、お前の事じゃなくてな。
ほれ、俺ってこんな容姿だし？過剰な噂立ってるし？
初見の人には怖がられるし？俺学校辞めようかな……」

「いや！分かった！もういい！大丈夫だから！」

「で、でもさ！帰りが遅いって何時くらいなの？」

露骨に話を剃らそうとする由比ヶ浜。

こんなところで空気を読むスキルを発動するな。
惨めになっちゃうだろ…。

「えっ？あ、最近だと5時過ぎとかなんです…」

「寧ろ朝じゃねぇかそれ…」

「ご両親は何も言わないのかな？」

「親は共働きなんで…それにしたに弟と妹がいるんであんま姉ちゃんには五月蝿く言わないんす」

両親はいないも同然…家には弟達…帰りが遅い…ねぇ？

「なぁ少年。
君の姉は本当に不良になったのか？」

「…どういうことですか？」

「君の話を聞く限り、生活態度が俺と余り変わらんのさ」

「…詰まり鳴滝さんも不良だったと？」

「どうしてそうなる。
少年、君の姉は中学までは優しかったと言ったな？」

「ええ」

「詰まり中学までの期間は優しかった訳だ」

「鳴滝君。簡潔に述べて貰えるかしら」

「黙って聞いてろアホんだら。
長年掛けた優しさってのは早々に無くならないものだ。
そして高校の一般的な解釈は『大人へと変わる場所』だ。
君の姉は高校…それも2年に上がった時からそうなり始めた。
ここまでは良いな？」

「えっと……はい」

…これは分かってない反応だな。

「高校2年ともなれば進路を決めていく時期でもある。
そこで両親の共働きと言う問題が出てくる。
共働きをすると言うことは裕福ではなく、生活に困っている家庭に良く見られる。
それ以外なんて少数だ。
そこまでに金を稼ぐと言うことは生活面、強いては子供のためと言うのが大きい。
そこでだ。子供のために使う金で最も巨額な物って何だと思う？」

「……生活費？」

「違う」

そんなものは節約していけばどうとでもなる。

「学校……通学資金か！」

「その通りだ比企谷。

学校に通うには学費が必要になってくる。

入学手数料、授業料、教材費、健康診断や怪我をしてしまった際の資金。

他にもあるだろうが一人通うだけで結構な額が飛ぶ」

「でもさ、それが川崎さんとなんの関係があるの？」

「ならばここで話を戻す。

少年。君の姉は今日、遅刻しながらも学校へと来ていたぞ。

更に、『最近多いが…』とも言われていた。

これは詰まり、遅刻はしても欠席は少ないと言うことに他ならない。

少年、君は不良がわざわざ遅刻してまでも授業を受けに来ると思うのか？」

「え……あ…」

「そこでまた進路の話が出てくる。

そこに俺と変わらない生活態度をスパイスにして見ると…」

「っ！？…川崎も何かのバイトをしている…？」

「またまた正解だ比企谷。
そしてその理由は恐らく学費を稼ぐため」

「で、でも！高校のお金は家の親が払ってる筈だし…」

「言ったろ？高校2年は進路を決めていく時期だと。
金が必要になる進路なんて進学以外にあり得ない。
ましてや優しかった人間が、今さら弟妹を置いて海外留学するはずもないからな」

まぁ、これで留学します何てことになるのなら人格疑うのだが。

「姉ちゃん……」

「勘違いすんなよ？
行程がどうであれ、結果を見ればお前たち兄弟のためなんだからな」

「そうだな。
大学とかに行くのであれば更に金がかかる。
これ以上親に甘えたくないって考えるのが妥当なとこだろ」

嘗ての婆さんがそうだったように。
人の優しさに触れて初めて気づくときだってあるんだ。
俺よりも遅かろうが川崎沙紀さんはそれに気づいた。
その優しさを弟たちに向けるようにと自ら導きだした選択なのだ。

「…でも…やっぱり心配で」

「……なら川崎さんを元に戻した方が良いわね」

「金持ちの意見は今回ばかり参考に出来ん。
庶民の意見に耳を貸さない辺り、それが浮き出ている」

「…っ！なら、貴方がどうにか出来ると？」

「へっ！余裕だね。
ついでに今のはさっきの仕返しだ」

「……なら貴方に任せるわ。
それで駄目なら笑い者にしてあげる」

……上等だ。
他人の選択を粉々にするような方法なんぞ取らせるか。

「……しまった。話しかけられない」

問題発生。エマージェンシーエマージェンシー！

コミュ症スキルが発動しました。

対象である川崎沙紀さんに話しかけることが出来ません。

「…何してんの？」

「うわっ！？」

何てことだ。

普段なら気付く距離に気づけないなんて…。

だが好都合。そちらから話しかけたのなら俺にも対応できるのだよ！

「あ、えっと…これから少し、話が出来ないか？」

「…少しならね」

イエス！掴みはＯＫ。

後は聞くだけ聞く！

「バイトしてるって聞いたんだけど、本当か？」

「だったら何？揺すりでもかけるの？」

「かけるか！…じゃなくて…そこって時給幾らくらい？俺も働きたいんだけど…」

「――――――――――――――――――――。」

「そ、そうか、ありがと！」

そう言い残して駆け出す。

嘘？！はぁ！？安！何それ！

俺の夕方バイトの方が高いぞ！

値切られてんじゃないの！？

「と、兎に角第一段階は終了。

後は彼女を尾行してバイト先を突き止めるだけだ」

ストーカーじゃないよな？

ほら、俺のやってることって結果的に彼女のためになることでもあるんだし？

私情全開の変態共とは違うしさ？

「……ここ、か」

立派なビルであります。
しかし、またもや問題発生。

「……何故いるのか聞いてやるよ」

いざ入ろうとしたところで奉仕部メンバーが揃って出てきた。

「別に、私達でも動こうと思っただけよ」

「…お前の目からは『擬態』と『不快』、『対抗』が見られる。
大方、俺に言われたのが悔しくて自分達で先に解決してしまおうって魂胆だろ」

「おお、すげぇ」

正解、か。
この女はホントに哀れだな。

「この際はっきり言っておく。
人の生き方の否定は止めろ。見ていて不愉快極まりない」

「ならその否定することも私の生き方の1つなのだけど？」

「とんちなこと言ってんじゃねえよ。
……もういい、じゃあな」

あの女は救いようがない。
元々救おうなどと考えてはいないが。

俺はそのままビルへと入り、川崎沙紀さんがバイトしている店へと入っていった。

「あんたもアイツ等のお仲間？
正直うんざりなんだけど、いい加減にしてくんない？」

カウンターに座って早々、川崎さんからお小言をもらった。

「仲間であることは否定しない。
取り敢えず『黒霧』ってあるか？」

「…あんた酒飲むの？」

「別に問題ないよ。あぁ、ロックでね」

無言で作業に取りかかる川崎さん。

……やっぱ綺麗だな…」

「は？な、何言ってんの？」

へ？声に出てたのか！？うわ！はずかし！

「す、すまん！

いや！そう思ったことは否定しないが、声に出したことに謝罪する！」

「べ、別にいいけど…気にしないし」

「重ねてすまん…」

俺の目の前にコトンとグラスが置かれ、芋焼酎『黒霧』が注がれる。

「あの…さ」

「あんたもバイト止めろとか言うの？」

……やっぱり否定したのかあの女。

「…何を言われたのか聞いても良いか？」

「別に…」

さて、聞いたことをまとめるとこうだ。

件の三人が入店。

↓

最初はシンデレラと人魚姫の遠回しな口論。

↓

バイト止めろと雪ノ下が発言。

↓

なら川崎さんの必要な金を肩代わりできるのかと聞く。

↓

更に追い討ちで雪ノ下の親が県議会議員だのと挑発。

↓

雪ノ下がキレる。

↓

三人が退店。帰り際に比企谷に明日の朝５時半に呼び出しをくらう。

↓

暫くして俺が入店。

「成る程ねぇ…比企谷から呼び出しか」

「それで、アンタもバイト止めろって言うの？」

「俺はあの女の様に人の生き方の否定はしない。
そもそも、誰にもそんな権利はないんだ」

「じゃあ何しに来たの？」

「ここで酒飲んでるのが理由……いや、嘘です睨まないで」

「…はぁ。つーかさ、今アンタの他に客いないし、そのおかしな飲み方止めなよ」

おかしいって言われた…。
まぁ、ネックウォーマーの下を引っ張って飲むようなやり方は変だよな。

「引くなよ」

そういってネックウォーマーを外し、ポケットに入れる。

「……喧嘩？」

「苛めだよ」

「……そう」

川崎さんは俺の顔の傷を見てそういった。

空かさず返した俺は信じられないと言う目を見た。

「……ングッ。はぁ。まぁ、強いて言うなら引き抜きだ」

「…は？引き抜きって…どういうこと？」

「君の弟から話を聞いて、その内容を纏めれば1つだけ取り上げられる箇所があった。

最近帰りが遅い。弟と妹がいる。心配。

そしてこの三点の問題を無くすとしたら、原因であるバイトを辞めるかなるべく早く帰ることの出来るバイトに変えるかのどちらかになる。

そして俺は人の導きだした選択をへし折るような事はしないししたくもない。

俺自身がそう言う生き方しか出来ないからな」

「…私としては、なるべく早く帰ろうと思ってる。

でもこのバイトが終わるのは何時も遅いから」

「分かってる。

俺も普段は遅いから。

具体的に言うなら朝の5時。これも川崎さんと変わらない」

「…アンタもバイトしてるんだ？」

「結果を見ればな。
行程を見れば掛け持ちなんだよ俺」

朝の新聞配達だろ？夕方のレストランで調理のバイトだろ？
夜間の工事現場…。これ普通の奴がやったら3日も持たないな。

「その掛け持ちの1つに抜擢しようと思った。
そこはここよりも早く帰れるし、おまけに給料がここよりも高い。
やることなんて簡単だし、店長も爽快だ（二重の意味で）」

店長笑顔でスキンヘッドだしね。

「……そう言うこと。
何でアンタがそこまですんの？関係ないじゃん」

「気になった……んー違うな…やっぱりあれだ。
家族の有り難みに気付いたからだな」

「は？」

「いや、俺がじゃなくて川崎さんがだよ。
俺がさっき、心配の言葉を発したとき、一瞬だけ苦い顔しただろ？
それで確信した。だからさ、俺の所に来いよ」

「……それ、プロポーズ？」

プロポーズ……？

『俺の所に来いよ』……／／／／／／／！？

「ち、違っ！そうじゃなくて！

俺が働いてる店にって意味で！」

「ふふっ。良いよ分かった。

取り敢えず今日は最後までやるから」

お、おお。分かってくれた。

その代わりに何か恥をかいた気がするが…。

「顔赤いよ？」

「こ！これは！酒のせいだ！そうだそうに違いない！」

「そう言うことにしとく」

くっ！この先からかわれ続けるのか俺は！

何て日だ！

後日、川崎さんはバイトをやめた。
その後、夕方のバイト先に川崎さんを連れていき、店長と顔を会わせた瞬間に即採用をもらった。
その店長のテンションの高さに川崎さんが苦笑いだったことを記しておく。
雪ノ下は涼しい顔をしていたが、目を見たら悔しがっていることが分かった。
次の日の部活は空気が悪かったこともここに記す。

「ねぇ、アンタ鳴滝なんて言うの？」

バイト中、少し空いた川崎さんが厨房にいる俺に声をかけた。

「九十九だけど、どうかしたのか？」

「ふーん。なら今度で良いから料理教えてよ。大志達に作ってやりたい」

おお！良い心がけだよ！良い案だよ！

「あぁ、良いぞ」

「ん、頼んだよ九十九」

「おう……ん？今何て……」

今九十九って呼んだ？え？何で？

「さあね。ほら仕事しなよ」

「ちょ！ま！」

それ以降、川崎さんから九十九と呼ばれるようになった。

その後、大司と被るから沙紀で良いと言われ、お互いに下の名前で呼び合うこととなった。

また、店の人達からは何故か囃し立てられたのだが、理由がわからなかった。

そう言えば所見で怖がらなかったのって川崎……沙紀さんが初めてだな。

書類上の関係

妹とは、その家族間で自分より後に産まれた女の子を指す言葉である。

小説やライトノベル等では『妹こそ至高』と言った言葉が飛び交い、読んだものをその定石に立たせる。

そもそも

妹とは、何なのか。

兄と呼ぶ女の子がそうなのか、はたまたそれに準ずる何かなのか。

最近では妹属性と言う理解できない単語まで存在している。

ならば、義妹はどうだろうか。

何らかの事項により、書類上にて妹として分類される義妹。

妹と言う漢字がつけば、そこでもう至高の片割れに入ってしまうのだろうか。

こう言った言い方は好まれないだろうが、見ず知らずの者から『お兄様』、『お兄ちゃん』、『兄貴』と呼ばれて喜べるのかと親身になって問いたいところである。

結論を言おう。

俺の目の前にいるこの存在は理解できない。

「初めまして、お兄様」

「……は？」

突然すまない。

いきなり家に押し掛けてきた女の子は開口一番にそう言った。

こうなった経緯は十分ほど前に遡る。

今日は俺以外のクラスメートは職場見学へ行く日である。

そんな中俺は、婆さんの御参りとして、学校を休んだ。

朝起きて直ぐに礼装に着替え、家中を掃除。

食器棚から何人来るか不確定な程の湯飲みを取りだし、お茶の準備。
そして寺の人が来てくれる奉納として、金一封を封筒へと入れておく。
更に『ご自由にお取りください』と座布団を二山作って邪魔にならないところへ設置して、お供え物を仏壇の前に置いておく。

「…毎年気が滅入るな」

俺は静かに呟き、手を合わせる。
正直に言えば俺は婆さんの関係性を知らない。
毎年数多くの参列者が訪れ、並んで御参りしていく。
中にはたまにテレビで見るような人もチラホラ見えたり、無関係だと思える人も来たりする。

「…何者だったんだよ…婆さんは…」

訳もわからずに苦笑いを浮かべる俺はふぅ、とため息をついた。

"ピンポーン"

感傷に浸って数分後。
不意にインターホンがなり、俺ははっとなって立ち上がる。
しかし、集まりの時間にはまだ一時間ほど早い。
こんなに早く来ると言うことはこの後に用事を持しているのだろうか？

「はい」

俺は玄関へと向かって扉を開く。
その先には黒い服でサングラスを掛けた体格の良い男二人と、その間に挟まれるようにして堂々とする少女の３人。

「…あの、何か？」

余りにも不釣り合いな、その３人の格好に俺は訝しげな視線を送りつつ訪ねた。

「初めまして、お兄様」

「……は？」

――――と、こう言うことである。

俺をお兄様と呼んだ女の子は屈託の無い笑顔でニコニコし、その後ろでは男二人が石像のように立ち尽くす。
その少女の目には『不安』と『期待』が入り交じっていたのを俺は見逃さなかった。
「……信者勧誘なら他所でやってくれ。
妹属性等を振り撒きたいならそう言った人種が多くいる場所でのみ効果的だ」
俺はそう言って扉を閉めようとして――

「はいこれ」

――――　一枚の紙を差し出された。

「……養子証明？……鳴滝…陽菜？」

鳴滝は婆さんの…そして俺の名字だ。

鳴滝など、探せば他にも居るだろうが、この地区では俺の所だけだ。

そしてこの女の子…陽菜と名乗った少女は養子証明の用紙を渡してくる。

「……つまり、義妹と言うことになるのか？」

「聞き及んでた通り、鮮明な方ですね」

女の子はそう言って上品に笑う。

このような素行を見せられれば嫌でもわかる。

上流階級の仕草に、庶民にはけして相容れない高そうな服装。

所謂、お嬢様と言う人種なのだろう。

と言うことは、婆さんもまた上流階級の人間で、処暑有名だったのだろう。

そうでなければ有名人がご参列する理由が見当たらない。

「今日来たのはお婆様の御参りと、お兄様をお迎えに来た次第です。

今日の御参りが滞りなく終わりを迎えた後、私とご同行お願いいたします」

……この言い方。
俺の存在が許しがたいとでも言うかの様な言葉…。

「一応、理由を聞こう」

「お父様が是非家に、と」

「はっ…そうじゃないだろう。
お前の家に連れていき、そこで尋問でもするつもりじゃないのか？
例えば…『お前が養子等とは不愉快だ』とかな？」

恐らくは俺が婆さんの養子になったことを知り、その事が何らかの汚名に繋がると踏んだこの娘の親が、俺を呼び出す為の口実にこの娘を寄越したのだろう。
後ろの男二人はその護衛。所謂ＳＰというやつなのだろうと推測できる。

「っ……！
私はそうは思いません。
恐らくお父様はお兄様の人柄を確かめるべく呼び出すのだと、そう思います」

「悪いな。初対面の人間はまず疑うところから入るのが俺なんだ。
気を悪くしないでもらいたい。
…それで、同行だったか？別に良いぞ」

この後は特に予定もないから行く分には問題はないだろう。

最悪、飛び出して徒歩で戻ってこれるしな。

「本当ですか！」

……何故か喜び出す女の子。

全くもって意味がわからない。

午後４時。

婆さんの御参りは終わりを迎え、俺は後片付けを終了させた。

この後は義妹と共にお父様とやらにお目通りしなくてはならない。

「それではお兄様、参りましょう！」

何故か先程から嬉々としてそわそわする義妹。
何がそんなに嬉しいのか良く分からない。
目を見ても『喜び』しか浮かんでいないのだから分かりようがない。

俺は用意されていたリムジンへと乗り込み、隣でチョコンと座る義妹を尻目に目的地へと向かうのだった。

「初めまして、九十九と言います。
この度はお招きいただき、光栄に思います」

豪邸。
表すのならそんな場所だった。
義妹の家とやらに到着して早々に目に入った立派な敷地。
その中央に位置するこれまた立派な屋敷。

出迎えるかのように入り口に立っていた義妹の親と思われる男性と女性に一礼して、俺はそう言った。

「こちらこそ初めまして。
私は鳴滝　隆秀。こちらは妻の香と言います」

掌で指された女性は静かに頭を下げる。
こう言った仕草からも、やはり上流階級の嗜みを感じさせる。

「どうぞ中へ」

そう言って通されたのは…客間……だろうか？
広すぎて感覚が狂いそうだ。

「早速ですが…本題に入らせていただきたい」

無駄にデカイソファに腰を下ろした直後、隆秀さんは話を切り出した。

「私が聞きたいのはただ一つ。
母さんの…鳴滝　陽愛の最後を聞かせていただきたい」

……婆さんの最後……。
俺は酷い疑いを掛けていたのだと、恥ずかしさで一杯になるのを感じた。

「…婆さんは…無くなる直前に、俺の名前をくれました。
『大切な物に命が宿るように…大切になってくれた俺にこの名前をあげるよ』と。
そう言って逝きました」

「……そうか。
母さんから、私達については何も聞いていないのかね？」

「はい。
今日その子が来るまで全く知りませんでした」

「その子じゃありません！陽菜ですわ！」

義妹は胸に手を当ててそう言った。
俺は目線を隆秀さんに戻して話を切り出す。

「俺も、一つ聞きたいことがあります」

「…なんだね？」

「何故…どうして今日だったのか、と。
今まで来なかったのには…まぁ訳は何となく分かります。
だからこそ、何故今日なのかと、そう思いました」

「何故…か。
特に理由は無いんだ。ただ、今日でなくてはならない…そんな気がしたんだ。

気に触ったのなら謝罪する。今まで行かなくてすまなかった」

「いえ、来ないことには特に思うところはありません。
ですが、また後日、仏壇の前で手を合わせて頂ければ、と」

「そうだな…そうしよう。
その時はまた、お邪魔させてもらうよ」

それっきり誰も何も話さず、時間だけが過ぎていった。
振り子時計の秒針の音が、気まずさに拍車をかけて、何故なのか心臓がドクドクと早くなるのを感じる。
俺は、緊張しているのだろうか？
初対面で、それでいて養子の立場にある俺がどうすれば正解なのかと、不安になっているのだろうか？

「お兄様」

ビクッ！と、義妹の突然の声にその場の全員が体を譲る。

「お兄様。…もし宜しければ、お顔を拝見したいと思うのですが…いけませんか？」

俺の顔……そうか。未だにネックウォーマーをしたままだったのか。
俺は無言でネックウォーマーを取り外し、ポケットへと入れる。
長く延びた横髪を耳にかけ、義妹の方へと顔を向けた。

「っ……なんてこと…！」

義妹はショックを受けたようで口許を押さえて目を潤ませた。

「この傷のことなら気にする必要はありません」

「しかしだね！そんな傷を負うなど…余程の事がない限りあり得ないのだよ！？」

「確かに俺のこの傷には、周囲の人間を遠ざけるものがあるでしょう。
しかし、だからと言って俺はそれが嫌だとは思ったこともありません」

別に分かってくれる人が数人いるだけで十分だし。
それに将来に困るような物はあまりないのだから気にしていても始まらないのが本音だ。

「……お父様！」

「……分かった。陽菜の言う通りだ。
直ぐに手続きを済ませよう」

え？何今の会話。
家族間の阿吽の呼吸？わかりません。

その後、会話の事が気がかりだったのだが、
義妹も秀隆さんも教えてくれず、なし崩し的に夕食をご馳走になり、

帰宅した。

「それでは、ごきげんよう。お兄様」

別れ際の義妹の言葉が妙に気になったその日の夜だった。

――――翌日。

「お兄様！ふつつかものですが、これから宜しくお願いしますね！」

「ホントにどうしてこうなった…」

翌朝に起きてきたら何故か居た義妹、陽菜に「今日からここに住むことになりました！」と言われて朝から騒がしかったのは言うまでもない。

友人とは、一体何なのだろうか？
世間で言われている＂友達＂は、共に遊ぶ間柄のことを例えている様に感じる。
社会で言われている＂友達＂は、親しい間柄、又は仲の良い同僚に向けられていると思われる。
ならば私の場合はどうだろうか？
もしも親しい間柄の者を＂友人＂又は＂友達＂と呼ぶのであれば、近所の人全員が友達に鞍替えになってしまう。
もしもそうなってしまえば毎日家に近所の人が押し掛けるような事態になるだろう。
そんなのはごめんだ。
それならどうするのか。
決まっている。その人たち全てを＂親しい人＂と言えば良い。
買いつまんで呼ばれるこの言葉は幅広く、悪印象を与えない遠回しな言い方だと思う。
仮にこの言葉が使用不可能なのであれば、私は真っ先に関係を断ちきるだろう。
何故ならそれが一番効率的だと考えているからだ。
故に私には友達と呼べる人がいないのである。

「あ、おはよ……」

朝一番。朝のバイトを終えて学校へ当校。
下駄箱の前で珍しく由比ヶ浜にであった。
由比ヶ浜の口からでた朝の挨拶は何処かよそよそしく、目線さえも合わそうとしない。

「……何かあったのか？」

この場合の遠回しな聞き方はチャンスを潰す切っ掛けになり得る。
だからこそ、単刀直入に、ストレートに話を振るのがベストなのだ。

「別に……あ……おはよ…」

――――何もないよ。
そう言おうとしたのだろうか？
ふと言葉を止めて俺の後方へと目線を向けた由比ヶ浜は、粗か様に気まずいと走って去っていった。

「…よっす」

「比企谷か。おはよう。

由比ヶ浜と何かあったのか？」

後ろにいたのは比企谷だった。

俺は比企谷に向き直って聞いてみた。

「いや、別に……ただ関係をリセットしただけだ」

比企谷は目をそらしてそう言った。

……関係をリセット……？そんなこと出来る筈がないだろう。

一度誰かと関わればそこでもう縁は繋がってしまうんだ。

リセットと言うからには相当な言葉を浴びせたに違いない。

となれば、気まずい雰囲気が出てくるのも納得できるし辻褄も合う。

「……そのやり方だけはお勧めしないぞ。

一度やったことがあったが酷い目に遭ったと記憶している」

「……悪いがこればっかりは譲れねぇな。

俺は哀れみを向けられることには慣れているが施しは絶対に受けないと決めているんだ」

「……分からなくもない。

……兎に角、無事を祈る」

「…おう」

会話は終了を迎え、二人で教室へと向かってあるきだした。

その道中、お互いに無言だったことは言うまでもなかった。

「――――貴方、由比ヶ浜さんと何かあったの？」

数日後の放課後。部室で読書をしていた俺は、雪ノ下の声に顔を上げた。

勿論声を掛けられたのは比企谷だが、顔を上げずにはいられなかった。

「いや、何も」

「何もなかったら、由比ヶ浜さんは来なくなったりしないと思うのだけど。

…喧嘩でもしたの？」

「いや、してない…と思うが。

大体、喧嘩なんて物はそれなりに親い連中がすることだろ？

だから喧嘩っつーより――――」

「――いさかい…かしら？」

「当たらずとも遠からずって感じか？」

ふむ、言い合いで来なくなった訳ではない、と。

しかし由比ヶ浜が気にするようなことと言えば……事故？まさかな。

…だが、言うなら今しかないだろう…それが例え今の関係を崩すことになったとしても。

「…比企谷、原因は……その、事故の事か？」

「っ！？……何で知ってる」

比企谷の俺を見る目が鋭くなる。

余りにも大きな『警戒』と『疑念』だった。

「…今まで黙ってて悪かった…。

…俺も当事者なんだよ…あの時の事故の…」

「……当事者？…もしかして庇ってくれた奴ってお前か？」

「…ああ。

だが結果的にお前を怪我させてしまったことは事実なんだ。

それに俺はその事に気づきながら黙っていた…すまん」

「…別に気にしてない。
お前が庇ってくれなかったら死んでたかも知れないからな……」

「でも足の骨を折ったんだろ？
あの時もう少し早く押し出せていたら怪我もしなかったはずだし…」

「そう言うお前はどうだったんだよ。
聞いた話だと５ｍ近く撥ね飛ばされたって聞いたぞ？」

「いや、俺は捻挫と打撲だけだったから…」

「…頑丈すぎだろ」

そんな会話を少しの間続けた。
暫くして雪ノ下が会話に入り込めずに無言になっていることに気づいた俺は、雪ノ下に顔を向けた。

「…何かしら」

「いや、特に無いが…」

「そう。なら比企谷君には由比ヶ浜さんの説得を命じるわ」

髪の毛を耳に掛けながらそう言った雪ノ下。
しかしその瞳には――――

「後悔と……不安？」

「っ……人の目を見て考えを読むのは止めて貰える？
酷く不愉快だわ」

「……雪ノ下。お前は何を隠してる？」

「別に隠し事なんてないわ。
今の話題は由比ヶ浜さんの処遇よ」

雪ノ下は話をそらすかの様に話題を強制させ、比企谷に目線を向ける。

「……そうだな。馬鹿らしくなってきた。
明日に…は休日か。なら月曜日に呼び出すか」

比企谷は鞄に持っていた本を入れて立ち上がる。
方に鞄を背負って扉へと向かって歩いていく。

「鳴滝、俺はお前に感謝することはしても責めることはしない。
お前は命の恩人で、俺の中では結構上位に良い奴だからな」

そう言い残して部室から出ていった。

――――ありがとう、比企谷。
そう思わずにはいられない俺だった。

「鳴滝君」

比企谷が退室して少し、雪ノ下は唐突に俺の名前を呼んだ。

「何だ」

「貴方は……その、怖くはなかったの？」

怖くなかったのか。

これは恐らく先程の告白について言っているのだろう。

「怖かったな。結構良い感じの関係が築けたと思っていたから、正直叫弾されるかと思った」

「なら、どうして…」

「それでも言わなきゃならなかったからだ。

後ろめたい気持ちをそのままに、これから先もずっと抱えていくなんてのは嫌だからな」

「……そう」

雪ノ下はそれっきり黙ってしまう。
長い沈黙が続き、時計は最終下校時刻を指していた。

「鳴滝君、明日は予定があるかしら？」

雪ノ下のそんな言葉に俺は考える。
明日は特に何もないはずだ。
しかし此処で『ありません』などと答えてしまっても良いのだろうか？
この手の言葉は誘いのセリフと同義に取れる…大方明日何かに付き合ってほしいとかそんなところだろう。
しかしだ。相手は雪ノ下だ。
冷徹な目線と饒舌で相手を撃墜するような雪ノ下なのだ。
だから俺は平然を装い、こう言った。

「明日ｈ「そう、なら明日はララポート前の看板に来て頂戴」…いや、明日ｈ「そうね、時間は午後１時にしましょうか」…だから「お昼は食べて来るのよ。間違っても奢りなどはしないから」……えぇー……」

おかしい。
雪ノ下が話を聞かない……。
たが負けるわけにはいかない。俺にだって貴重な休日を過ごすと言う大義名分があるのだ。

「雪ノ下」

「何かしら？」

「明日ｈ「遅れたらペナルティーを課すからそのつもりで」……わかった」

俺は…無力だ…。

夕日に染まる部室にて、後に残された俺は只立ち尽くすしかなかった。

明日の休日がおじゃんになると頭の中でシュミレートが行われ、更には嫌な予感までしてしまう程に。

俺は静かにあるきだし、平塚先生に部室の鍵を返しに行こうと職員室へと向かうのだった。

第一印象と嫌悪

人の印象とは、まず見た目から決まると言って過言ではない。
この世には『第一印象』と言う言葉さえあるくらいだ。
最近では『人は見かけではない。中身だ。』と言う謳い文句が出回っているようだが、そう言っている者こそが、人の初見を見た目で判断しているのである。
判断材料は　見た目。
男性ならば、『可愛さ』『美しさ』『かっこよさ』『香り』『スタイル』。
女性ならば、『かっこよさ』『美しさ』『スタイル』『自分との比較』『香り』。
酷いときならば、心の中ではＡＢＣなどのランクを付けるものまでいる始末。
ならば人の魅力とは何なのか？
私は『個性』だと提示するだろう。
個性は人それぞれである。
また、人に言われて変わるのもまた個性。
個性とは実に揺らぎやすい物であると思われる。
周囲、環境、心境。
ちょっとしたことで直ぐに変わっていく個性は、己の感性を傾かせ、周りの人間へと浸食していくのだろう。
そうした中でも変わらないものは異端扱いされていくこの世の中は、やはり間違っているのだと痛感する他ない。
結論を言おう。

私の見た目で判断する者共、――――弾け飛べ。

「そこの君、ちょっと良いかな？」

通算６回目。

何の回数か？警備員に補導される回数だよ…。

「またか……」

「はぁ……」

雪ノ下とデパートへと連れられて数秒後に始まり、少し歩けば連絡、補導と言った具合に取り調べ室へと連行されるのだ。

最初の方では雪ノ下も弁解に付き合ってくれたのだが、何度も回数を重ねると流石に無言になってしまう。

「「はぁ……」」

憂鬱そうにしながらも警備員に着いていく俺と雪ノ下だった。

「悪かったな雪ノ下。
俺はこんな成りだから町中とかでも良く補導されるんだ」

「気にしなくて良いわ。まだ時間はあるのだし、気を取り直して向かいましょう」

取り調べから解放され、近くにあったベンチに腰を下ろす。
開口一番に俺は謝罪し、雪ノ下は素っ気なく返してくる。

「所で、何を買いに来たんだ？」

「由比ヶ浜さんの誕生日プレゼントよ」

プレゼント？雪ノ下が由比ヶ浜に？

「……何かしらその目は」

「いやいや。孤高を図ってた雪ノ下がプレゼントを送ろうとするまでに気にすることができる存在を作った事に感心してな」

「失礼ね。私にだって大切にしたい関係もあるのよ」

「ふぅん……」

関係、か。

俺の場合なんて現状維持が限界な状態なんだよな…。

「あれ？お兄さま？」

……この最近から聞きなれてきた声は…！

「鳴滝君。貴女にご家族は居なかったと記憶しているのだけど…まさか」

「何で俺の御家事情を知っているのかは置いておくとして、義理の妹だ」

「鳴滝陽菜と申します。何時もお兄さまさがお世話になって……」

おい待て。何でそんな低姿勢で客人迎えるような言い方してるんだよ。

「はじめまして。雪ノ下雪乃と言います。

貴女のお兄さんとは……と、友達で……」

何で言葉に詰まってんの？そんなに友達の単語が嫌いなの？
それとも俺限定だったりするのか？だとしたら泣くぞ？

「友達……ですか。そうですか」

「所で陽菜は何でここにいるんだ？
確か今日は初めて出来た友達と遊びに行くって言ってたよな」

「あ、はい。さっきまで皆さんと一緒に居たのですが、はぐれてしまったようで…」

突然だが、ここで陽菜についての補足をしておこう。
その仕草から直ぐに上流階級の人間だと判断できるこの少女は、転校して早々に学校で好成績を叩きだし、スポーツもさながら学業も優秀と言った、小さい雪ノ下の様な少女なのだ。
そして――――

「もぅ、目を離した隙にどこへ行かれてしまったのでしょう…」

――――超が付くほどの方向音痴である。
俺の買い出しに着いていくと言った暁には、必ず手を繋いでいないとはぐれるレベルである。
覚えた筈の道でさえも、たまにミスって迷子になる始末。

「なら、私達が探すのを手伝いましょうか？」

そんな陽菜に雪ノ下を着かせれば相乗効果も極まって俺の場合なんて気苦労が増えることは間違いないだろう。

「待て待て雪ノ下。
まずは外見的な特徴を聞くのが先だろう。
陽菜。お前の連れはどんな感じなんだ？」

「はい。今日はその娘のお兄さんと彼女さんの合計四人で来ていました。
一番分かりやすい人だと…やはりお兄さんですかね」

どんなグループできてんだよ…。
知らない人に着いていきそうで俺怖いぞ…。

「えっと…その方は頭の天辺にピョコンと髪がはねあがっていて…
髪色は黒。
身長はお兄さまよりも若干低くって…そう！目がドロッとしてました！」

「……」

「……」

「あ、あら？どうかされましたか？」

「なぁ、雪ノ下」

「な、何かしら」

「今言われた特徴を照合した結果…一人の知り合いにヒットしたんだが……」

「奇遇ね。私も合致したわ…」

間違いなく比企谷の事に違いない。

だとすれば陽菜の友達とは比企谷の妹の小町ちゃんで間違いないだろう。

しかし彼女とは…？

「陽菜ちゃん。貴女のお友達は比企谷と言う名字かしら？」

「その通りです！もしかしてお知り合いでしたか？」

「ええ…小町ちゃんのお兄さんとは……遺憾ながら知り合いに当たるから…」

何か差別的な空気を感じたんだが、気のせいだろうか？

「あ！陽菜ちゃーん！」

「小町さん！」

ふと、向こうの方から見知った少女が駆け寄ってくる。

「おお！雪乃さんじゃないですかー！」

「小町さん、こんにちわ」

相変わらずの元気さを出して、比企谷小町ちゃんは現れた。

「お兄さんも、お久しぶりです！」

「ああ。久しぶりだな小町ちゃん。
ところで、君の兄とその…か、彼女はどこに？」

「彼女…？
ああ！結衣さんですね！あの二人なら良い雰囲気出してもらうために残してきました！」

比企谷と由比ヶ浜が……付き合っていると言うのか！？
見ろ！隣にいる雪ノ下もまさかの事態に戦慄してるじゃねぇか！

「こ、小町さん…本当にあの二人が…その…お付き合いしているの…？」

「ふぇ？いやいやそんなまさか。
まぁ小町的にはそうなってくれると嬉しいんですがねー」

「あら、違いましたの？
私はてっきりそういう関係なのかと…」

なんだよ…陽菜の早とちりか…。
しかし、あの二人が一緒になるってことはすれ違いも上手く収まったってことなんだよな？

「君、ちょっと取り調べ室へ来てもらえるかな？」

ま　た　か！

何で話の最中にまで介入して来やがるんだよ警備員ども！
仕事熱心過ぎるじゃないのか！？

「あの、お兄さま？」

「あー、すまんな雪ノ下……。
後は三人で回ってくれ…。もうここまで来ると呪われているのではと思えてくる」

「……そう。弁解に付き合おうと思ったのだけれど」

「いや、いい。
貴重な時間を無駄にするのは宜しくないし…また明日な」

「ええ…また明日」

そう言って俺は再び警備員に着いていく。
後ろでは何となく残念そうにしている雪ノ下と、理解できない陽菜

も小町ちゃんが取り残された。

「はぁい。鳴滝九十九君」

取り調べ室。
警備員に入るよう促された俺が見たのは何時しか見たことのある顔の女性だった。

「……どなたでしたか？
記憶に無い方の名前を覚えるのは些か難しさに苛まれるんですが」

「あれ？覚えてない？
ほら、事故のときの…」

「…ああ、雪ノ下の。
それで、どう言うことでしょうかね？
まるで俺を呼び出すためにここへ連れてくるように警備員を動かしたようですが」

入室し、この人の目を見た瞬間に解った。
相変わらずの『慢心』と『自信』。そして成功を示した『喜び』。
この女は初対面の時から嫌いだ。
この笑顔に隠された顔はどれだけ醜いのだろうか？
同じ空間にいるのも、話をするのも、俺にとっては害悪以外何者でもない。

「そんな邪険にしないでよ～。ちょっとした乙女のオチャメじゃない」

「そのちょっとしたことが俺にとって多大な災難になっているんです。
ソレすら気づかないとは……その薄っぺらい仮面がそうさせているんですかね？」

「っ！？……へぇ。そんなことまで分かっちゃうんだ？」

「寧ろわからない方がどうかしている。
そう言った奴等こそ、自分が可愛くて仕方なく、無心に巻かれてしまうことになっていると気づかない」

「ふぅん……。
ま、良いわ。取り合えず座りなよ。
色々と聞きたいこともあるしね」

「……」

俺は無言でこの人の前の席に座る。
正直に言えばさっさと帰りたい。こんな女に構っているのは一番の徒労とも言える行動だ。

「さて、まずは簡単な質問からね。
君、雪乃ちゃんのことどう思ってる？」

「誰かさんの後を追いかけるように自分を保つ哀れな存在」

即答で答えてやった。
無論、挑発の積もりで言った言葉で、本心では全く思ってもいない。

「…君、中学の時に女の子から告白されたことあるよね？」

「…だったら何か？」

「その女の子のこと覚えてる？」

「自分の利益のためだけにされた告白を覚えているとお思いですか？
真っ先に記憶から削除しました」

今では顔も思い出せないな。

「……どうして嘘だってわかったのかな？」

「言うは必要は無いですね」

「相手の目を見て感情を読み取る」

「……」

「君は面白いよね。
相手の目を見るだけで思考が読めてしまう。これ程交渉術に活かされる能力は滅多にない」

この女は何が言いたいのか？
俺の特技を看破したところで何があると言うのか…。

「私はね、君が危険なんじゃないかって思ったんだ。
このまま放っておけば何れ雪乃ちゃんに不幸が降りかかるんじゃないかなってね…」

「愉快な発想ですね。
意味のわからない言葉が俺に靡くと思ってんですか？
大体、知り合い同然の雪ノ下に俺の特技が不幸を振り撒く？
馬鹿馬鹿しくて話になりませんよ」

「へぇ…中々言うじゃない。
なら、約束できるのかしら？雪乃ちゃんに不幸をもたらしたらその場で罰を受けるって」

急に話がぶっとんだ気がした。
この女はあの事故の時もそうだった。
どんなことであれ、まずは雪ノ下の安否に始まり、過保護な対応を

冷静な顔でこなして手回しをする。その反応をもう少し雪ノ下に向ければ雪ノ下も変わってくると思うのだが。

「俺は約束何てしないしする気もありません」

「……何で？」

「約束何てものは簡単に破れるし、時が経てば忘れていくものだからです」

「なら、この場合はどうするの？」

「……正直俺が雪ノ下に与える影響は極小でしょうが、誓いましょう。
誓いは約束より固く、破って良いものでもない」

最近だと『約束は破るためにある』とか抜かす輩も居るからな。

「約束じゃなくて誓い……ふふっ……あはははははは！」

急に笑いだした雪ノ下　姉。
腹を抱え、もがくように笑うその姿は俺を更にイラつかせる。

「ふふふ…ごめんね。
うん。ならその誓い、守ってもらうからね」

「……良いでしょう。では」

俺は椅子から立ち上がり、脇目も降らずに出口へ向かう。
後ろなど見なくてもわかる。この女、雪ノ下陽乃は笑っている。
自分の玩具を見つけた子供のように。そして、これからどうやって遊んでいこうかと言う楽しみを抱いて。

やはり俺はこの女が嫌いだ。

『あきらめないこと。どんな事態に直面してもあきらめないこと。結局、私のしたことは、それだけのことだったのかもしれない』とある登山家の名言である。

登山にかけた思いを人生と掛け合わせた言葉は、知る人ぞ知る応援歌となっているだろう。

また、『山とは金では絶対に買うことのできない偉大な体験と、一人の筋金入りの素晴らしい人間を作るところだ。未知なる山との厳しい試練の積み重ねの中で、人間は勇気、忍耐、不屈の精神力、強靭な肉体を鍛え上げていくのである。登山とは、ただこれだけで僕には十分である』と唱えた人物もいる。

これは当時20代の登山家が言った名言であるが、文章を読むにつれやはり諦めないことが思想となっているだろう。

故に人生とは諦めないことであり、諦めることは即ち死を意味するのだろう。

「諦める」といえば、自分の願いごとが叶わずそれへの思いを断ちきる、という意味で使われるのが一般である。

しかし、「諦観（たいかん）」、「諦聴（たいちょう）」といった熟語の「つまびらかにみる、聞く」にみられるように、「つまびらかにする」「明らかにする」が、本来の意味であることはご存じだろうか？

これらは仏教用語として用いられるが、漢語の「諦」は梵語のｓａｔｙａ（サトヤ）への訳語であって、真理、道理を意味するものとされているのだ。

これらの事から諦めはそのまま思想を断ち切るものではなく、真理や道理を追い求める物であるのが真実なのだ。

ならば一般的に使われている「諦め」はどうなるのか？
答えるのならばそんなものは存在しない。それらの全ては『妥協』でしかないのだ。
例を挙げた登山家に習い、私も名言を立ち上げよう。

『真の諦めは道理として心に持つべきである』

「お兄さま！今日は連れていってほしい場所があるのです！」

開口一番に我が義妹である陽菜が言ってきた。
つい先日から学生の長期休暇である夏休みに入り、バイトの稼ぎ時期間でもある。
そんな多忙な俺に、陽菜は元気良くそれでいて期待と高ぶる衝動に駆られるように詰め寄ってくるのだ。

「兄は今これから先のシフトを考えなくてはいけない。
よって今時分陽菜の要望に答えることは出来ないのだ」

「私はお兄さまとの思い出が欲しいのです。
先程、学校の宿題も全て終らせ、洗濯物やその他雑用事項も済ませました。
だからこそお兄さまからご褒美と称した贈り物として付き合っていただきたいのです」

おい待て。自由研究とか読書感想文があっただろうが。
お前絶対嘘書いただろ。

「しかしだな。この稼ぎ時はこの夏休み期間でしか出来ない貴重な収入なんだ。
確かに生活には然程困ってはいない。寧ろ余裕過ぎると言っても過言ではない。
しかし、仕事人間と成り立ってしまった俺の身が、ここで放棄することを抑制しているのだ」

「お兄さま……ダメ…ですか？」

「何処へ行くんだ？」

「っ！はい！動きやすい服装に着替えてくださいね！
私も準備して参りますわ！」

そう言って陽菜は自室へ走っていってしまった。

しまった！まさかあのような儚げな眼と態度を見せられて揺らいで

しまうとは！
いままでそんなことはしたことがなかったあの陽菜が…一体何があったんだ？

「お待たせしましたお兄さま！さぁ！参りましょう！」

戻ってきた陽菜はボストンバッグに麦わら帽子。
白色のワンピースと言った、まぁ所謂旅行にでも行くような格好をしていた。

「そもそも何処へ行くんだ？」

俺はある程度片付いたシフト表をテーブルに置いて立ち上がる。
陽菜は元気良くこう答えた。

「千葉ですわ！」

「待っていたぞ鳴滝（みちづれ）」

陽菜に連れられて来たのは千葉駅の前。
そして出会ったのは比企谷八幡。
疲れたような顔で陰湿な笑みを浮かべ、俺に対してそう言った。

「おい、今俺の名前に何を込めた？」

「気のせいだろう。さぁ、車に乗ろうじゃないか」

そう言って指を指したのは赤色のワゴン車。
車内からは奉仕部メンバーに小町ちゃん、戸塚、平塚先生が乗っていた。

「唐突すぎて理解に困る。俺はこれから陽菜と千葉へ向かうことになっているんだ」

「ああ。俺達全員でな…」

「早く乗りたまえ。時間は有限なのだよ」

平塚先生が車から降りてこちらへと歩いてきた。
そして先生の目を見て全てを理解したのだ。
――――俺は嵌められたのだと。

千葉村。

ここは小、中学生が野外研修と言う名目で使用される学習場所である。

自然が豊かで山道も確りと手入れされており、オリエンテーリング等も行える正に学校行事に適した場所だと言えるだろう。

そんな所へ来てしまった俺は、車内で比企谷に事の顛末を聞いたのだった。

どうやら比企谷も俺と同じ無いようで千葉駅の前に誘き出されて強制参加を余儀なくされたらしい。

そして一人は嫌だと言うことで俺を道連れにすべく、小町ちゃんから陽菜へと連絡がいき、今に至ると言うわけである。

「俺、山アレルギーなんで帰っていいですか？」

「どんなアレルギーなのかしら…」

「もっと楽しもうよ！ほら、空気も美味しいしさ！」

「それ以上に美味しい予定をぶち壊されたんだが」

由比ヶ浜と雪ノ下は俺の両隣にたってそう言う。
俺としてはバイトの期間が減ったことに落ち込むことを押さえられない気分でいた。

そこへ、もう一台の車が俺達の前に停まり、中から数人の男女が下車してきた。
と言うか憎き葉山とそのグループだった。

「……先生、俺は帰ります」

「待ちたまえ。これには君達へと課題も兼ねているんだ」

「課題？俺にとっては嫌がらせにしか感じられませんね。俺とあれの険悪状況は既にご存じの筈ですが。まさか矯正しろとか抜かすんじゃないですよね？」

「落ち着け鳴滝。
私が出すこの課題は彼らと仲良くなる事ではない。
彼らと過ごす2日間を上手くやれと言うものだ」

「片方に嫌悪の感情があるのなら、それは不可能であると定義します。
そもそも、俺には例えそれが強制であっても反抗に戦力を尽くす所存です」

葉山と上手く？何を戯れ言を…。

「無理に関われとは言わない。
どうせなら比企谷達のサポートに回るだけで良い。直接話すことも
ないし、嫌悪することも無いだろう」

「……わかりました」

「助かる」

それっきり会話は無かった。
今回の活動内容は小学生達の行うオリエンテーリングのサポートとして、
お助けお兄さんの様な役を取り持つこと。
俺は小学生達への挨拶が終わるまで、ひたすらに怖い顔になっていた。
その為か、小学生達が怯えていたように見えたのは間違いではない。

「鳴滝君。もう少し落ち着きなさい。
貴方の今の顔が凶器と間違えられてもしょうがない状態になっているわよ」

雪ノ下は俺にそう言うが、誰が顔面凶器だ。
これも全てお膳立てしやがった平塚先生が悪い。

「これから2日間が憂鬱でしょうがない。
それどころか今にも怒りで発狂しそうだ」

「我慢してちょうだい」

俺は終始顰めっ面で開会式を通すのだった。

苛めとは、人間社会における陰湿な行為だと言えるだろう。
判断材料としては「立場の互換性がない」、あるいは「力関係の差」が存在する。
つまり、「いじめる」側と「いじめられる」側がしばしば互いに入れ替わったり、「強い」立場の者が「弱い」立場の者をいじめるという構図にあてはまらない場合には、じゃれあいやケンカなどとみなされる場合もある。
なお、ここで言う「強い」、「弱い」という言葉は、腕力や発言力などを指すものではなく、あくまでも集団内での「立場」を指し、たとえば発言力の強い者がまさにそれゆえにいじめの対象となることもありうるのである。
しかしながら、例外は存在するだろう。
やはりそれらもまた、悪質な苛めに過ぎないのだ。
被害者を助けようものなら対象がその者へと移り変わり、被害を被ることは過去の事件等で立証されている。
ならいじめを無くすことは出来ないのか?と聞かれれば間違いなくできる。
だが、それをしようとしないのが人間なのである。
仲裁に入ったものがいるのならば決まってこう言うのだろう。
『苛める方も悪いが、苛められる方にも原因はあるのだよ』と。
そう言った発言が苛めを助長していると考えずに発せられ、その影でまだまだ続くと理解しないその者こそが、苛めの主犯なのではないかと私は思う。
そうした偽以連鎖が、苛められる側を作り出しているのである。

「いぃや小学生マジ若いわ～！
俺ら高校生とかもうおっさんじゃね？」

「ちょっとやめてくんないぃ？あーしがババァみたいじゃん」

何とも頭の悪い会話をするのは糞葉山の取り巻きである『煩い奴』と『低脳女子』である。
もっとも名前は違うだろうが、俺からすればそれで十分だ。

「でも、僕が小学生位の時は高校生って凄く大人に見えたなぁ」

「小町から見ても高校生って大人～って感じしますよ…兄を除いて」

「おい！俺めちゃくちゃ大人っぽいだろうが。
愚痴を溢したり、汚い嘘ついたり、卑怯なことしたり！」

「ヒッキーの大人のイメージってそんな悲しいものなんだ…」

「成る程な。確かに大人の典型だ。
比企谷は大人の鏡のようだ」

「そうだろう、そうだろう」

「何でそんなに嬉しそうなの？それ絶対誉められてないよ」

まあ、誉めたつもりはないんだがな。

「ねえ、あの子達は何してるのかしら？」

雪ノ下が見ていた方を反射的に見てみる。
そこには女子グループであろう小学生が何やら騒いでいるようだった。

「ちょっと見てこよう」

葉山は無駄にリーダーシップを発揮して駆け寄っていく。
しかし……

「あれは…瑠美ちゃん？」

「何故知っているのかはこの際聞かないでおくわ」

「おい、汚物を見るような目で見るな。
あの子は鶴見先生の娘で、たまにだが家で飯を食うときがあるんだよ」

最近だと頻度が減ったが。

「お兄さんすごーい！」

「気持ち悪くてさわれないよー！」

……どうやら省きにされているようだな。
家に来たときは結構明るい性格だったと記憶しているが…。

「ほっといて良いの？知り合いなのでしょう？」

「ここは様子を見るのが正解だ。
あの馬鹿のように何も考えずに躍り出ていくのは省きの助長にしかならない」

「確かにな…」

瑠美ちゃんは暗い表情で首から下げられたピンクのカメラを弄っている。

「お兄ちゃん！大変大変！」

「どした小町」

「あの人イケメン過ぎるよ！お兄ちゃんに勝ち目がない！」

「ほっとけ…」

「お兄さま…あの方に何か嫌な思い入れが？」

「いや、気にする必要はない。
あれが何をしようと、そのまま自滅することを心から祈ってるくらい気にしてないからな」

「（それ気にしてるよね…）」

そんなこんなでチェックポイントを探す手伝いをすることになった俺達は、とぼとぼと歩くこと数分に件の周辺に来ていた。

「久しぶり、瑠美ちゃん」

一人、グループから外れて歩いてきた瑠美ちゃんに片手をあげてそう言った。

「あ、お兄さん！」

俺を見た瞬間、前までのように飛び付いてくる瑠美ちゃんは笑顔になっていた。

「瑠美ちゃん。何かあったのか？

余り馴染めて無いよ「ここにいたんだ」…葉山」

瑠美ちゃんに事情を聞こうとしたところで制止を喰らってしまった。
振り替えれば葉山かいて、満面の笑みで瑠美ちゃんに手を差し伸べている。

「さ、皆まってるよ？一緒にいこう」

また、皆か……。

「悪いがこの子は足を捻ってしまっている。
慣れていない山道だ。そう言うこともあるだろう。
お前はさっきまでのようにあの子達に自慢の笑顔を振り撒いてろ」

俺の裾を掴む瑠美ちゃんを後ろに隠して葉山を睨み付ける。

「なら、尚更ほっとけないな。
救護テントに運ぶから代わりにあの子達の面倒を見ていてくれないかな？」

「断る。俺はこの子に着いていなくてはならない事情がある。
お前のような腐った布教を振り撒く輩に任せるわけにはいかない」

「僕は今回のまとめ役として平塚先生から委任されているんだ。
それに一人を贔屓目に扱うのは周りからの反感を買うことになるけどね？」

「確かにお前の使用としていることはそう言うことなんだろうな。
何故この子に執着するかは知らんが、お前には指一本触れさせんし、
近づかせもしない」

「…俺よりも君の方が贔屓目にしていると思うんだけど」

チッ……このままじゃ埒があかんな。
こうなったら…！

「比企谷！雪ノ下！」

「どうした？」

「何かしら？」

俺は近くにいた二人に声を掛けて呼び出す。
直ぐ様駆けつけてくれる二人には少しながら感動を覚えたのは仲間
意識があったからだろうか？

「悪いがこの子は足を捻っている。
二人が付き添って救護テントに案内してやってくれ」

「……わかった」

「了解よ」

一瞬だが、二人は俺の目を見たあとに事情を察してくれたのか直ぐ

に頷いて連れていってくれた。
瑠美ちゃんは心配そうにしながらも足を引きずる演技をして二人に着いていった。

「これなら問題ないよな？
お前はさっきまでの行動がとれるし、俺も行動に移れる」

「鳴滝…」

「お前が何を思ってこのオリエンテーリングに参加したのかは知らん。
だがな、俺はお前と行動内容が被っても仲良くなんて絶対にしない」

「なら、今の子を庇っていたのは俺へと対抗心ってやつかな？」

「お前が上であると言う認識からその解釈になったことは解った。
そう思いたいのであればそう思え」

「ふっ…ならそう思うことにするよ」

そう言って葉山は子供達の方へと戻っていく。
茂みの向こうからは「お兄さんおそーい」等の声が聞こえてくる。

「その思考も、直ぐに覆してやるからな」

俺は比企谷達の歩いていった方へと走り始めた。

「鳴滝君、こっちよ」

救護テントの前。

比企谷と雪ノ下、そして瑠美ちゃんが3人で固まり、俺を見つけると雪ノ下が手をあげて場所を知らしてくれる。

「ありがとな。事情を察してくれて」

「まぁ、由比ヶ浜だと逆な思想に回りそうだしな」

「そうかしら…由比ヶ浜さんも空気の読める子だと思うのだけど」

「まぁ何にせよ助かった。

あのまま行けばやがては連れ去られていただろうしな」

まず子供達にばれて、騒がれて、先生が来て、人柄からアイツが選ばれて―って具合に。

「その言葉を聞いた限りでは、葉山君はロリコンの疑いがあるのね」

「否定は出来んな。
瑠美ちゃんは可愛いし、将来美人になるのは約束されているようなものだ。
それを執着に連れていくことを主張するってのは疑いを掛けられることも同義だろ」

「何なのアイツ。お前に対抗心でも燃やしてるの？」

「そんなもんだろうな」

しかしこの後は夕飯作る作業があるし、俺自身付きっきりでは居られない。
幸いなことにテントには平塚先生しか見当たらないし本人は眠ってる。

「瑠美ちゃん。何があったか聞いて良いか？
勿論無理にとは言わないが、先生に言われると困ることなら、黙っていると約束しよう」

「……ん。

誰かをハブるのは何回かあって……そのうち終わるだろうって、気にしてなかった…。
何時も誰かが言い出して…皆もなんとなくそう言う雰囲気になるの。
そんなことしてたら…いつのまにか私がそう言うことされるようになってた…」

因果応報…か。
正直瑠美ちゃんが悪いとは一概に言い切れないが……間が悪かったのだろう。

「別に…何かした訳じゃないのに……中学でもこんな風になっちゃうのかな……」

「「……」」

「ふむ、確かにこのまま行けばこの省きは苛めに変化し、悪質なものに変わっていくだろうな」

「っ……やっぱり、そうなんだね…」

「でもな、今を変えれば多少は変わっていくんだぜ？」

まぁ変えるにしてもちょっと難しいだろうが。

「…ホント？」

「ああ。

何せここには饒舌毒舌論破女王のユキペディアさんがいるからな」

「鳴滝君、後でお話があるから。逃げないでね」

「……とまぁこんな感じに威圧感も半端ない」

「（すっげぇ長い間があったな）」

「だから瑠美ちゃん。
雪ノ下に論破のやり方とノウハウを教えてもらって、あの子達を口撃してやればいい」

「説明に怒りを覚えるのだけど、いい考えではあるわね」

「確かにな…毎日のように言われ続ける身としてはこれ程の適任者はいないと思うぞ」

「比企谷君。貴方も後でお話があるから。」

「……鳴滝」

「逝くときは一緒だ……！」

俺と比企谷はお互いに怯えながら握手をした。
瑠美ちゃんは雪ノ下に向き直り、真っ直ぐ目を見て頭を下げた。

「お願いします！私に論破を教えてください！」

「そのお願い、承ったわ」

「（なぁ比企谷、俺達は事の顛末を見ることが出来るかな？」

「（……できるといいな……」

「二人とも」

「「はい！」」

「覚悟しておいてね？」

ニッコリ笑っていい笑顔♪

俺らからすれば閻魔の怒顔♪

ユキペディアさんは去っていく～♪

瑠美ちゃんを従えて～……♪

そのあとのカレー作りの最中。

俺と比企谷は雪ノ下に散々論破されまくった。

口答えしようにも全面的に俺が悪い分、言い訳も効果を発揮しなかったのだ。

そして瑠美ちゃんに「カレー、好き？」と聞いてきた葉山は、「近づかないでもらえるかしら？変態」と言われ、それを聞いた俺達は密かに笑っていたことを記す。

キャンプファイヤーとは、キャンプで焚き火を囲んで行われる行事である。

集い・儀式的な要素を持つものを総称としてそう呼び、単にキャンプで焚かれるというだけの火は、キャンプファイヤーとは呼ばれない。

キャンプ以外の祭事などで火を焚く行事は、ボーンファイヤー、ファイヤーラリー、ファイヤーストームなどと呼ばれる。

尚、ボーイスカウトでは「営火（えいか）」とも呼ばれる。

キャンプファイヤーには「親睦の火」や「儀式の火」とも呼ばれる親睦の儀式である。

儀式の細かい内容は様々であるが、儀式的な要素を用いて徐々に火の世界を作り上げる。

盛り下がりは神聖さを重視し、雰囲気に重点を置き、キャンプファイヤーの最後は火の神の言葉を拝聴し、友情の火の誓いを立て、終了とすることが一定の流れである。

この呪術的かつ宗教的な儀式は火の神への崇拝が起源であるが、発祥地および宗派や呪術の流派といった起源は不明である。

火を囲んで、『オクラホマミキサー』などでフォークダンスをするキャンプファイヤーはアメリカ合衆国が発祥である。

日本には戦後、連合国軍最高司令官総司令部（ＧＨＱ）により持ち込まれ、学校教育の中に取り込まれた。１９７０年代ごろまでは多くの高等学校で学園祭の後などに実施されていたが、騒音や風紀、防火などの理由から徐々に行われなくなり、現在では学校の敷地内で火を焚く例はほとんどみられなくなった。

この事から、キャンプファイヤーとは学校行事に置ける親睦を深める儀式なのである。

「……」

現在、夕食として作ったカレーを食す場で葉山だけが下を向いて沈んでいた。

理由は明確。

カレー作りの最中に雪ノ下から論破講習を受けた瑠美ちゃんに爽やかスマイルで近寄ったのが運のつき。

「変態」と言うレッテルをやけに響く声で発言されてしまい、近くにいた小学生に『葉山隼人は変態である』という認識になってしまったのだ。

「隼人…気にしない方が良いって。ほら、小学生が言ったことなんだしさ」

「……ああ」

金髪女子が葉山を慰めるのだが意味をなさない。

「どうかしたのかね？」

「ああ、葉山がとある女の子に手を出そうとしたところ、フラレて沈んでいるところです」

「テキトー言うなし！
隼人がそんなことするわけないじゃん！」

「……」

庇いだてする金髪女子。
俺の言葉に反応するその目は絶対的な信頼を示している。
こんなやつの何がいいのか…理解に苦しむ。

「落ち着きたまえ。
それで？何がしたいのかね？」

「…俺が話しかけた女の子は同じ班の子からハブられているんです」

「だよねー…かわいそー」

可哀想……ね。

そういった外面しか見ることの出来ない奴がいじめられっ子を寄せ付けなくしていると気づかないんだよな。

「ふむ。君達はどうしたいのかね？」

「俺は…可能な範囲で何とかしてあげたいです」

「可能な範囲で…ね」

「お前にゃ無理だろ」

「っ……」

元々俺に絡んできたお前がこの件を解決に持っていけるとでも思ってんのか？

「雪ノ下、君ならどうする？」

「そもそもこの件はもう解決に向かっています。今更私たちが手を出す必要もないかと」

確かになぁ…夕食後にちらっと見たけど、瑠美ちゃんの班の子達全員泣かされてたし。

こうなってくると雪ノ下に任せたのは早計だったかな？

「そうか。まぁ解決しようがしまいが、この件は君達に任せる。私は眠いから寝る」

そう言って去っていく平塚先生。

このパターンは離れたところで盗み聞きするやつだな。

「つーかさぁ、あの子結構可愛いし、他の可愛い子とつるめばよくない？
話しかけるじゃん？仲良くなるじゃん？余裕じゃん」

「それだわー！由美子冴えてるわー！」

「だしょー？」

頭の悪い二人は置いておこうかね。
取り合えず瑠美ちゃんはもう話すことはすべて話したし、これから先に他の子が間違っていたと気づけば問題は無くなっていく。
しかし、今ここで誰かが余計な手を出してしまえば状況は悪化の道をたどるだろう。

「あなた達、さっき私が言ったことを聞いていなかったのかしら。この件はもう解決に向かっているの。下手に手を出さないでちょうだい」

雪ノ下もわかっているみたいだな。

「はぁ？あの子今でも虐められてんじゃん。
雪ノ下サン目ぇ腐ってんじゃないの？」

「言われているわよ比企谷君」

「ちょ！今の話の何処に俺が関与している文脈があった！」

「まぁまぁヒッキー…」

奉仕部は何時でも平常運転か。

この光景にもなれてきたなぁ…。

「あーし雪ノ下サンに言ってんだけど。シカトしないでくんない？」

「なら反応してあげる。

貴女が言う虐めってどんなものなの？どういう理由で起こるの？

どうやって解決に持ち込むの？その解決方法に後腐れはないの？」

雪ノ下の攻撃。論破トーク。

「は、はぁ？何言ってんのか分かんないんですけど！」

三浦は逃げ出した。

「この程度の行程も建てられない貴女がこの件を解決しようなんて、

底脳にも程があるわね？」

「くっ……だったらアンタがやってみなよ！

そんなに言うなら解決出来るんでしょ？！」

「何度言えば分かるの？この件はもう解決に向かっているの。

もう私たちが手を出す必要はないわ。分かったかしら？」

もう三浦の敗けが目に見えてんだけど。
つーか回りのやつらも皆唖然としてるぞ。

「お兄さま…」

「ん？どした？」

「雪ノ下さんは…あの方がお嫌いなのでしょうか？」

「んー、まぁそうなんじゃねえか？
昔陰湿ないじめをしてきたやつらに似てるって言ってたしな」

「そうですか…なるほど」

陽菜はそれっきり黙ってしまう。
顎に手を当てて考える仕草をとってはいるが、何を考えているのかはわからない。
雪ノ下になにか思うことでもあるのだろうか？

「だったらこうしよう。
僕らと君達でふたてに別れて解決法を探る。
それならお互いに切磋琢磨できるし、解決にも導ける」

「貴方ねぇ…「やってみろよ」鳴滝君！？」

「おい鳴滝…」

「そのかわり、もしもお前らが瑠美ちゃんに何か害することをしたのなら…
俺は全力で潰しにかかる。よく考えて行動するんだな…」

「…ああ。君には負けない」

一体何と戦っているのやら？

「ツクモン…」

「問題ない。アイツらがどうしようが、保護者側として全力で瑠美ちゃんを守る」

「それとなく犯罪宣言に聞こえるのは俺だけか？」

「奇遇ね。私もそう聞こえたわ」

「お前らね……」

こうして夜は更けていった。
アイツらが行動を起こすとしたら、恐らく明日の肝試しだろう。

「せいぜい頑張るんだな……」

俺は去っていく葉山達を見ながらそう呟くのだった。

「なぁ雪ノ下…」

「何かしら比企谷君」

「今更ながら鳴滝が怖いと思っている俺がいるんだが…」

「あら、頼もしいじゃない？」

「ですよね！お兄さまは素晴らしい方なのです！」

「陽菜ちゃんはツクモンが大好きなんだね！」

「えっへへへ…」

「小町もお兄ちゃんが大好きだよ！あ、今の小町的にポイント高い！」

「最後のがなけりゃ良かったのによ…」

肝試しとキャンプファイアー

作業を行うに中(あた)って、工程が重要になることは必然だろう。プラモデルに至っては設計図、鳶職や土工等の仕事には作業計画を建てて行うのが常識だ。

それらは作業を行う中で怪我や事故を起こさないための配分だったり、其々の人員の得手不得手を考慮した人員配置をするための必要事項の一端である。

しかし、それでも慣れてしまえばこの工程を見逃してしまう事も増えてきてくる。

そうした行動が事故を起こし、怪我をさせてしまうことを知っているはずなのにも関わらず。

慣れとは人間で一番恐ろしいものである、と。とある人物が言った言葉である。

慣れは慢心を生み、手を抜くようになるからであると、私は思っている。

人は一度でも、初心に帰るべきである。

何故ならそれが確実で正確な一歩を踏み出せるのだから。

「さて、今日の予定だが。
知っての通り夜に肝試しとキャンプファイアーをやる予定になっている。
小学生たちは昼間に自由行動となっているため、その間に準備するように」

朝食後、平塚先生は全員にそう通達した。
あの後葉山達は特に目立った行動を起こしていない。

「キャンプファイヤーですか…」

「フォークダンスするやつだ！」

「おお！ベントラーベントラーって踊るですね！」

「オクラホマミキサーと言いたいのかしら…最後の長音しか合っていないのだけれど」

「小町ちゃん……」

確かキャンプファイヤーって信教的な政だったんだよな。
現代では確か友情を深め合うってキャッチフレーズだったはずだ。
まぁ、奉仕部と葉山グループの友情は今日の内に崩れ去るだろうけど。

在ってないようなものか。

「大して変わらねぇだろ。相手にするの宇宙人みてぇな者だし」

一理ある。正直一緒に踊っただけで友情を深められるとは思わないし、嫌いなやつと当たればそれだけで嫌悪感が膨れ上がるだろう。

「八幡、言い方が酷いよ」

「違うんだ。俺にもちゃんと言い分はある」

――――――あれは小学生の時のキャンプファイヤー…。

『別に手をつながなくても良いよねぇ…』

それ以降の女子もそれに習えで、俺一人、エアオクラホマミキサーだった……！

「比企谷ー目が腐っているぞー。

まぁ、その分ならお化け役にもぴったりだな」

「お化け役は俺らが担当するんですか」

「仮装セットは控え室に置いてあるそうだ。

各自、手分けしてやってくれ」

さて、取り合えずアイツらに鉢合わせしねぇ様に作業に取りかかる

か。
俺は立ち上がってイベントグラウンドへと向かっていった。

「――違うのか？」

「何言ってんだ比企谷」

取り合えず簡単な作業を終わらせてグラウンドに戻ってきてみれば比企谷が一人で祭壇櫓を組んでいた。

「お前か。今までどこにいたんだ？」

「肝試しのルートを歩いて危険そうな場所とかを排除したりしてきた。
迷わないようにタフロープとかも付けてきたから大丈夫のはずだ」

「そうか…そのテグスはなんだ？」

比企谷は俺が持ってきておいたテグスを指差して聞いてくる。

「ああ、これは――」

「あっれぇ？こんなところにいたんだサボり」

テグスの用途を言おうとしたところで後ろから声がかかる。

当然声を聞けば誰かなど分かってしまうのだが、反応したくはなかったな。

「誰に話しかけているのかは知らんが、作業に戻れ」

「はぁ？何偉そうにしてんの？サボってる奴にサボるなって言われたくないんですけど」

「確かに！俺ら超頑張ってたのに不良君いないんだもんなー！少し位休憩したって良いでしょー！」

不良君とは俺の事か？

なら見た感じお前はチャラ男だな。

「取り合えず聞くが、その超頑張ったお前らの作業内容を教えてみろよ」

「えっと、薪割りとその薪の運搬、それと片付けかな」

その薪はどこにあるんだよ？

普通櫓の側に置いとくもんだろうが。

「お前ら馬鹿じゃねぇの？て言うか馬鹿だろ」

「は、はぁ！？サボってる奴に言われたくないし！」

「お前らさ、ここに何しに来てるわけ？」

「あんたこそ何言ってんの？手伝いに来たに決まってんじゃん」

三浦がやれやれと肩をすくめ、呆れるような目でこちらを見る。

「やっぱり馬鹿だな。昨日の雪ノ下の言葉を使うなら、低脳だな」

「なっ……」

俺は比企谷に向き直って今度は比企谷に聞く。

「比企谷、俺達はここへ何しに来た？」

「ボランティア活動だな。強いて言うなら小学生たちのキャンプをより良いものにするための補助」

流石は比企谷だ。

俺の欲しい答えを確りと言ってくれる。

「それが薪割って運んで片付けるだけとは……手伝いの程度が知れ

るな」

「……君はサボっていたんだろ？なら、君にはそんなことを言う資格はないはずだ」

「葉山、お前平塚先生の話を聞いていたのか？」

「……各自、手分けしてやってくれ…だったかな」

まさかここまでとは……。

お前は小学生か？

「もういいや。なら問題。

ここにテグスがある。これを何のために使うのか答えてみろ」

「そんなの何かに巻き付けるために決まってんじゃん」

三浦がまたもや頭の悪い回答を示す。

「俺は何に使うかと言っているんだ。使い方を聞いたんじゃねぇんだよド低脳」

「……そこの囲いを固定するため？」

「海老名正解。なら、何のために固定する？」

「そりゃ、崩れないようにするためでしょ？」

又々正解。
海老名は他のやつらと違って冷静だな。

「そう。なら何故崩れると困るんだ？
最終的には片付けるんだぜ？だったらそんな面倒なことしなくても良いはずだろ？」

「……わかんない…」

「ま、そこまでしか考えられていない次点で、自己満足って事なんだよな」

「君はさっきから何が言いたいんだ！はっきりいったらどうなんだ！」

葉山が怒声を上げて俺を睨み付ける。
周りに小学生が居なくて良かったな。今のお前の顔を見ればもう近寄ろうともしないだろうぜ？

「なら言ってやるよ。
もしもまだ小学生が踊っている最中に櫓が倒れて小学生が怪我をしたらどうするんだ？
このテグスはそのための補強に使うために持ってきたんだ。
テメェ等が下らねぇ作業している間、俺は肝試しのルートをタフロープ引っ張りながら歩いてたんだよ。
今日の予定はキャンプファイヤーだけじゃねぇんだぞ？
肝試しで万が一迷子になる小学生がいたらどうするつもりだ？

テメェ等には危機管理の責任が一切ねぇんだよ！そんなこともわからねぇのかコラァ！！」

ハァ…ハァ……。

流石に一気に言うのは疲れたな。

「そ…そんなの脅かし役が見張ってれば……」

「ああ？テメェの目は夜光生物のソレか？

脅かし役との間の距離がどれだけあると思ってんだよ。

その間に一人消えてましたじゃ言い訳にしかならねんだよ」

ましてや森のなかだ。

暗闇で森林はライトがあっても危険きわまりない。

「これから行ってくるよ…」

「作業なら俺一人でやりましたけど何か？

ああ、夜のためのシュミレーションか？いやぁ楽しそうだね。

精々頑張ってこいよ？転びそうなものとかは排除しといたけど、転ぶときは転ぶからな」

「……行こう…」

意気消沈。そんな言葉が似合う葉山達は肝試しの場所へと歩いていくのだった。

「流石に怪我とかは俺も考えてなかったわ」

「普通はそうだな。
でも危機管理は最低限の常識だからな……怪我してからじゃ遅いんだ」

「……そうだな」

俺は比企谷と一緒に作業に取りかかるのだった。
因みに雪ノ下達は夕食の食材を用意したり、小道具の確認作業をしていた。

――――３０分後。

俺と比企谷は熱いを連呼しながら歩き回り、いつしか川沿いに来ていた。
川からは誰かがはしゃぐような声が聞こえ、そちらへと目線を向ければ小町嬢と由比ヶ浜がいた。
二人は水着に着替えて遊んでおり、此方に気づくなり手を振って近寄ってきた。

「お前ら何で水着なの」

「平塚先生が川で遊ぶって言ったから…」

比企谷の質問に由比ヶ浜は小町嬢の後ろに隠れてしまう。

小町嬢は空気を読んだのか、比企谷に水着を見せつけて話題を反らした。が、

「ああ、そうだな。世界一可愛いよ」

「うわぁーテキトーじゃあじゃあ結衣さんは？」

「え！？あの、ちょ！小町ちゃん！」

小町嬢は由比ヶ浜を前へとおしやり、比企谷に感想を求める。

「あ、あの…ヒッキー……」

「えっと…その何だ？い、良い感じだな……似合ってるし…」

「そ、そうかな…ありがと……」

なんなのこのピンクに見えなくもない空間は…。

俺完全に茅のそとなんですが。これがエアーマンの気持ちなのだろうか？

「ぶべぶぉぼぼばぼべべぼ」

何故か比企谷が川で顔を洗い始めたし。

何か言っている辺り煩悩退散とかでも言っているのだろうか？

「あら、川に向かって土下座？」

「んなわけ……」

「……」

雪ノ下登場。勿論水着で。

「何だ、比企谷と鳴滝も来ていたのか」

どうやら平塚先生も来ていたようだ。

しかしどうなんだろうか。こうしてみると俺はやっぱり馴染めるような空間ではないようだ。

「ぐっほぅ！？」

「私は立派なアラサーだ！」

「何やってんだアイツは…」

平塚先生にボディーブローを食らっている比企谷を横目に、俺は近くの木陰に腰を下ろした。

「な、鳴滝君……その、どうかしら？」

ふと顔をあげれば雪ノ下がやけにもじもじしながら聞いてきた。
これはさっきの小町嬢の台詞と被るっている気がしなくもない。

「あー……ああ。似合ってる。可愛いよ」

「そ！そう！それじゃ！」

そう言って雪ノ下は由比ヶ浜の所へと戻っていく。
一応比企谷の言葉を参考にして見たんだが、間違っていただろうか？

「お兄さま…」

ん？今度は陽菜か……って！

「何故お前まで水着を持っている？
俺は何も知らされてなかったのだが」

「いえ、これは小町ちゃんに貸していただいて…」

「ああ、そう言うことか。
まぁ、似合ってて良いんじゃないか？」

「そ、そうですか？ありがとうございます。
ところで、お兄さまは遊ばないのですか？」

「俺は……まぁ水遊びが苦手なんだ。
俺のことは気にしないで、ほら、遊んでこいよ」

「は、はい！小町ちゃーん！」

しかし、陽菜は着やせするタイプってやつか。
由比ヶ浜とどっちが大きいんだろうか？

「なぁ、鳴滝」

いつのまにか戻ってきていた比企谷が俺のとなりに座り、こう言った。

「あれは本当に中学生なのか？」

「……そうだな…」

誰とは言葉に出さず、二人して陽菜に目線を動かすのだった。

その後、おいてけぼりにされてしまった瑠美ちゃんが来たがその顔には達成感が見られ、イキイキと話し合いの結果を語られた。

「……結局、解決の策は思い浮かばなかったけど…どうする？」

夕食後、後に控えた肝試しのために控え室にて仮装を選んでいたと

き、
徐に海老名がそう言った。
「あの娘の事ならもう解決してしまったわ」
「そうだな。アイツ笑ってたし」
返答を返す形で雪ノ下と比企谷がそう言った。
「そうかい？まぁ、俺がやることはまだ終わってないし。
俺は俺の考えを貫いていくよ」
「さっすが隼人！」
「隼人くんマジぱないわー！」
この3人は今度から残念組と呼ぶことにしよう。
そのうち定着しそうで楽しみだな。
「その考えを聞かせてもらえるかしら？」
「簡単だよ。でも、今言ってしまえば君達は邪魔しようとするだろうからね。
本番まで取っておく」
「……」

「（おい、放っといて良いのか？
アイツ何するか想像できるんだが…」

比企谷が黙っている俺に小声で話しかけてくる。

「（俺にもアイツの考えは読める。
大方全員が集まる時を狙って通達でもしようとするんだろ。
『この中に虐められている娘がいます』ってな」

そんなことをすれば更にエスカレートすることも知らずに。

「（もしそんなことになればあの娘が…」

「（そうだな。だがアイツの策を潰す手札は俺にもあるんだよ。
今回の作戦は後だしした方が勝つ」

さぁ、お前の正体も序でに暴いてやるぞ？

「はーい！みんな静かに。
これから、肝試しをしますがその前に、ボランティアのお兄さんからお話があるそうよ」

小学生達は首を上げる。
その前へと躍り出るのは葉山である。
小学生みんなが黄色い歓声を上げており、この数日でどれだけザ・ゾーンを広めたかが見てわかるようだ。

不意に、葉山が瑠美ちゃんに顔を向ける。
ソレにつられて引率の先生やその視線に気づいた子供達もその視線をたどって瑠美ちゃんに行きつく。
これは不味いことになるなどと考えもせずに葉山は悲しそうに顔を作り替えて言葉を発した。

「みんな、話がある。鶴見留美ちゃんのことだ」

瞬間、俺は背筋が凍りつくような感覚に陥れられる。
何故こいつが瑠美ちゃんの名前を知っている？
周りの子供に聞いたのか？もしかして俺の話を聞かれていた？
もしかしたら俺のせいで瑠美ちゃんが標的にされてしまうのではと、そんな思考がぐるぐると駆け巡り、うまく息が出来ない。
雪ノ下と比企谷、由比ヶ浜が俺に気づいたのか、こっそりと近寄ってきて小声で声をかけてくる。

「（ツクモン、大丈夫？」

大丈夫か。
その言葉に俺の考えを言ってしまう。

「（鳴滝君。貴方はそんな些細なことで怯えているのかしら？
ならソレは貴方の慢心よ」

「（鳴滝。あの娘は今、窮地に立たされようとしている。
それを救えるのは考えがあるお前だけなんだ。だから…」

「「「（頑張れ」」」

頑張れ、か。
そんなこと言われたのは物凄く久しぶりだな。
責任、とらにゃならんよな。
手を出すなら終いまで…婆さんも良く言ってたっけか。

俺は俯いていた顔をあげ、割って入るタイミングを探る。
葉山の言葉で瑠美ちゃんへと注がれた多くの視線に込められているのは、
哀れみのように同情する物ではなく、明確な敵意のようなものを感じとれた。

「留美ちゃんは皆からのけものにされている。
留美ちゃんはそれで悲しい思いをしているんだ。俺はこの林間学校で見ていて気がついた」

「鶴見さん、本当なの？」

先生が瑠美ちゃんに問いかけてる。
この事態について先生は知らなかったようだ。

まぁ、知っていたらそれで問題なのだが。

先生瑠美ちゃんの手を握り、葉山の隣まで連れてくる。
その光景は公開処刑のように、貼り付けにされたイエスの様に…子供たちの視線をその身に注がれ、瑠美ちゃんはカタカタと震えているようだった。

「みんな！瑠美ちゃんは皆の友達で、仲間で、学校の家族なんだ！それなのに、それなのにこんな可哀想なことをしているのを見るのは…俺は悲しいと思う！」

子供達は瑠美ちゃんに視線を注ぐ。
その視線は明らかに異物を見るようなものだった。

葉山は瑠美ちゃんの肩に手置く。
それはまるで、瑠美ちゃんをその場から逃がさないようにするための行動に見えた。
俺は怒りで動きたい衝動に駆られるが、何とか押し留め、タイミングを伺う。
握られた拳からは血がポタポタと垂れている。どうやら強く握りすぎたようだ。

「みんな頼む！
留美ちゃんと仲良くしてあげてほしいんだ！これが俺が出来る精一杯のことだ…どうか、お願いだ」

葉山の演説が終わると同時に子供達が声を上げる。

引率の先生はハンカチで涙を拭っており、隣にいる葉山も誇らしげな顔で立っている。
そう、ここなんだ。タイミングはオーケー……後は怒りと憎しみと怨みを混めて……この血が滴る拳を――――――！

「ぐぁっ！」

バキィ！
拳は、葉山の顔面を捉えた。
葉山は地面を転がり、それを見送った俺は瑠美ちゃんに手を伸ばす。

「お兄さん…」

「良く頑張った。偉いよ」

俺は血が出てないほうの手で瑠美ちゃんを撫でてやる。
瑠美ちゃんは緊張が解けたのか、涙を流して泣き出してしまった。

「鳴滝……お前ぇ……」

葉山は起き上がり、俺を睨み付けている。
その目にはハッキリと『憎悪』が現れていた。

「雪ノ下。瑠美ちゃんを頼む」

「了解よ」

俺は後ろに控えていた雪ノ下に瑠美ちゃんを預け、子供たちに向き直る。
一部始終を見ていた子供達は、俺を見るなり怯える表情を見せた。

「貴方は！いきなり何をするんですか！
それが高校生のすることなの！？」

「鳴滝！やりすぎだ！」

引率の先生と平塚先生が俺と小学生の間に割って入ってきた。
だが、比企谷風に言うのなら、ここから先は俺のターンだ。

「邪魔を……するな」

長年の虐め生活で鍛え上げた殺気を二人にぶち当てて、俺は睨みを聞かせた。

「ひっ……！」「っ……」

引率の先生はその場に座り込み、平塚先生はそれを支えてしゃがみこむ。
俺は再び子供たちへと顔を向けた。

「君達は虐めって何だと思う？」

俺は出来るだけ優しく、それでいて心に届くように声を出す。

「虐めってのは痛いんだぜ？心も、体も」

俺はゆっくりとネックウォーマーに手をかけて外した。
そして上着を脱いで、全員に見えるようにする。
そして露になる俺の身体――に刻まれた傷や怪我のあと。
それを見た小学生も、先生も、雪ノ下達を含む周りの全てが息を飲む。
それはそうだろう。ただ殴るだけでは付く筈の無い切り傷。
火傷の跡、痣の跡。

「どうだ？痛そうだろ？
これらは全部虐められて付いた物だ。
痛かったなぁ……なぁ？葉山隼人」

「っ！……僕にはよく分からないな」

「そうか、白を切るか。
さて、子供達諸君。この傷の内、数ヵ所はこの男のせいでついたものもある。
さっきまで虐めはダメだと、そう言っていた男に付けられたものがだ」

子供達は信じられないと言うように葉山に視線を移した。
俺の目の前で座り込んでいた二人も、葉山へと視線を移した。

「理由は俺にもよく分からない。
あの時は確か『俺の女に手を出した報いだ』って言っていたな」

あの時の面白そうなこいつの顔は忘れていない。
俺を見下し、踏みつけたりしたあの時の顔は…絶対に！

「そこの君、君は虐めってどうおもう？」

俺は瑠美ちゃんをハブにしていた女の子の一人を指名した。

「わ、私は……良くないことだって…思います」

「そう、良くないことだ。なのにやってしまう。はい座ってー。
じゃあその横にいる君。何でやっちゃうのか分かるかな？」

「……分かりません」

「そう、答えは分からない。
まぁ全ての虐めがそうである訳じゃないよ？アイツがムカつくから
だとかキモいからってな。
けどさぁ。分からないのに虐めるってどうよ？
はい、じゃあその後ろの娘ー。虐めってどうすれば無くなると思う？」

「…えっと…先生に言う…？「違ーう」…お父さんに言う…「違ーう」…止める？……「違ーう……うぅ」

「正解は無い。虐めなんてのはそこらじゅうで起きている。
解決法方があれば虐めなんて起きるはずがないからね。
ならどうするか…そんなことは俺にも分からん。虐められてる本人

じゃないからね」

俺はここで一呼吸置く。

次に発するのが最後の一言。この一言をそれぞれの頭の髄まで染み渡らせれば俺の勝ちだ。

「でもな…虐められたやつの殆どが思うんだよ……。絶対に復讐してやる……てな」

一気に周りの空気が冷たくなる。

当然だ。虐め返されるわけではないにしろ、ソレに似た何かをされる危険があるのだから。

「ほら、皆も習っただろ?因果応報って。やったらやり返される。当たり前なんだよ…嫌なことをして、されて、それでおしまいなんてあるわけ無いんだからさ。……だからこう言うんだよ…やって良いのはやられる覚悟のあるやつだけだ」

比企谷が後ろで「おい、ちょっと!」などと小声で言っているが、今は無視だ。

子供達は確実に刻まれているだろう。

虐めをすることの恐怖が。やり返されるかもしれないと言う危機感が。

「因みに、俺はやり返したぞ?

ほら、アイツを思いっきり殴ってやった。本当は立てないくらいにやってやりたいけど…

やっぱり誰もいないところでやった方が言いと思うんだよ」

「っ……！」

「さて、虐めをすることの怖さは、わかってもらえたかな？
もしも分からないのならそのまま続けていくと良い。
しかし覚悟すると良い。そのうち……物凄い痛みに悶えることになるからさ…」

そう言って俺はその場から立ち去る。
流石に肝試しとかの雰囲気では無くなったな。まぁ逆の意味で恐怖を刻んだから良いのかもしれないけど。
後で鶴見先生に連絡入れといた方が良いだろうな。
しかし……

「停学かなぁ…？」

まだ喰らってないけど何気に初めてだしなぁ。
内申とかに響いたりするのかねぇ…。

俺はそんなことを考えながら、ログハウスへ荷物を持ちに向かうのだった。

その後、結果的に肝試しとキャンプファイヤーは中止になり、小学生の心のアルバムに楽しくない思いでとして記録された。
引率の教師たちが俺の下へとやってきて罵声を浴びせようとしたのだが、
虐めを見抜けず、その先の最悪な展開までを説明してやったら謝って出ていった。

「あー、つかれたー」

「そうね。中々ない経験だったわ」

「そりゃそうだろ。あんだけ掻き乱したんだからな」

「あの時のツクモン怖かったよ…」

俺達は総武校の門へと到着し、帰宅する最中にいた。

「さて、帰るぞ陽菜」

「はい、お兄さま」

俺は陽菜に声をかけ、鞄を背負った。

「鳴滝、明日は学校で呼び出しがあるだろうから…」

「わかってます。それを考慮して行った行動ですから」

「そうか……」

「行くぞ、陽菜」

「はい」

そして俺達は帰宅する。

明日以降に待ち受ける災難を予想しながら、その日の夜は寝付けずに過ごした。

閑話ノ1　バイト風景

バイト生活でもっとも欠かせないもの。
それは笑顔である。
笑顔とは、コミュニケーションをとるための最善方法であり、良策でもある。
しかし、葉山隼人の様になりふり構わずスマイルを振り撒く輩はいずれにおいても痛い目を見るのだ。
何故か？何も考えてないからだ。
無心な表情が現状の維持や打破をすることなどまず無理であると思われる。
ところで、私の笑顔はどうだろうか？
嘗て比企谷に笑顔を作ってみた結果、『恐い』と言う感想を頂いた。
故に、店長も空気を読んで接客には割り振らなかったのだろうと私は思う。
正直に言えば自分の顔は怖いと言う自覚はある。
だが、試してもいない事を無理だと言うのは間違いではないのだろうか？
結論を言おう。　一度で良いから接客してみたい。

「三番テーブル完了です！」

「了解！」

俺は返事をしつつ忙しなく手を動かす。

「オーダー入ります！業炎野菜炒め１！サッパリしまくり炒飯１！」

「了ｋ…嘘ぉ！？マジで！？」

「マジです！早く！」

「り、了解！」

新しいオーダーに俺は驚く。

まずこの店の説明をしよう。

俺が下校後に働くこの店、『ビュリー・４』は４３歳の店長、松頼武が勤める結構人気な中華料理店である。

店内はそれなりに広く、来客３０名弱が入れるところだ。

俺が入った当時はそんなに客足も無かったのだが、今では忙しい毎日となっている。

そんな店舗の一番の不思議がメニューの名前である。

先程のオーダーに加え、三日月だの夕刻、極限、斬新、到達、爆熱、神域、三途川等が付くメニューがあるのだ。

それぞれに付く名前にあった料理が作られる（と言うよりも俺が作る）のだが、其々の名前からどんなものかは大抵予想が付く筈なのだ。

そして今回頼まれた＂業炎＂。

これはその料理の辛さを示しており、来店する客にはチャレンジ料理として知られている。

最近では全く頼まれなかったこの料理を頼む者がまだいるとは思わなかったため、俺は驚いてしまったのである。

「業炎野菜炒め上がり！」

「はい！」

調理した料理をカウンターに出して炒飯の準備をして止まる。

何故止まるのか。それは――――――

『ひぎゃぁぁぁぁぁあ！？』

客がダウンするからである。

この料理を食したものの大半が悲鳴をあげて轟沈する。今まで完食する者もいなければ、これによってクレームが来たことすら無いのは不思議である。

「あー、お帰りになります…」

「了解……炒飯代は引いといてあげて」

「わかりました…」

今回の客は意識が持つまで耐えたのか。

次に作るのはいつ頃になるのかなぁ…。

そんなことを考えながら溜まっている食器に手を伸ばす。

「お疲れ九十九」

「ああ、紗希さん。今から？」

裏口から入ってきた紗希さんが、片手を上げて入ってくる。

「そう。ねぇ、さっきの客って…」

「ああ…〝業炎〟で轟沈」

「頼んだ辺りで勇者だよ」

「そんなに辛いか？」

「辛いなんて者じゃないよ。あれを完食するのあんたしかいないから」

「ぐ……」

確かに、作った本人が食べられなければ意味がないからな。

「２名様ご来店でーす」

「川崎入ります」

「俺もやっちゃうか……」

再び食器に手を伸ばして、シンクに流していく。

前まで無かった洗浄機もあるお陰か、大分楽できているのは良いことなのだろう。

しかし厨房が俺一人と言うのは寂しさが感じられる。

誰かもう一人雇っても良いんじゃないかと店長に相談したところ、

「だって誰も九十九君のスピードに付いていけないんだもん」とのこと。

良い歳した人が「もん」を使うのはどうかと思うのだが、確かにそうなのだろう。

前まで来ていたバイトの人も、直ぐにやめてしまった次第である。

「オーダー入るよ。

極炎炒飯1、三日月のパンツェッタ1……タンカ用意した方が良いんじゃない？」

「……嘘だろ……？」

まさか〝極炎〟をオーダーする客がいるなんて…！

「死んだりしないよな？俺は食えるけど…」

「今度こそクレーム来そうだけど…」

「……とりあえず作るよ…」

俺は作業に取りかかった。

当店には辛さに別けて段階がある。

桃色から始まり、炎熱、爆熱、業炎、極炎である。

因みにこの業炎と極炎の間が明らかに激しいと、これを食した店長は語る。

「極炎上がり……紗希さ～ん」

「はいはい」

カウンターに置いた件の料理を持っていく紗希さん。

取り合えず三日月に取りかかろうと、これから響くであろう悲鳴を覚悟する。

客席からは『止めときなよキリト君…』『大丈夫だって！行ける行ける！』

と聞こえてくるが、やはり止めた方がいいのではと思考が廻る。

「う……！」

来た！？

「うんめぇえええええ！」

……え？

店内は、少しの静寂に包まれた。

「き、聞き間違いかな？今美味いって……聞こえたような……」

「気のせいじゃ無いから……」

そんな馬鹿な…あれは俺しか完食することが出来なかった代物だぞ…。

あれを完食するなんてどこの猛者だ…？

俺は意を決して厨房から除いてみることにした。

「すげェ上手いぞこれ！」

「私には赤を通り越して緑にしか見えないんだけど……」

まぁ世界一辛いと言われる香辛料を使ったからな…。

「アスナも食べてみろよ！」

「え！？わ、私はいいよ…」

当然だ。食ったら死ぬぞ？
その少年が特殊なだけだ。

「……なんと言うか、凄いな」

「私も驚いてるよ。あんな美味しそうに食べるなんて…」

まぁタンカ持ち出さなくて幸いだった。

そんなとある一日のバイト風景でした。

代表とは、全ての責任を負う者の総称と言えるものである。故に代表者が言うこと、行うことは絶対であり、覆しにくい物なのだ。

逆説的に代表ではない者達は、代表者の意見に著しく従い、ストレスや鬱憤を溜め込むのだろう。

社会的における上下関係もまた、このような柵を多く製造し、間違った社会通念を作り上げている。

仮に代表者が失敗したとして、誰かがその事を攻めることはないだろう。

精々影で批判する声が上がるだけである。何故なら失敗の責任が自分に負わされることを恐れているからだ。

過去、絶対制度なる物があり、やがては革命などの反乱が起きた。耐えきれなくなった民たちが、自信における環境や扱いの改善を求めた結果である。

ストライキ等もこれに順する結果と言えよう。何故なら全ては代表者の責任だからである。

結論付けるのならば、代表者とは人額のあるものこそが請け負うべきである。

「……」

「……」

「……」

最近、奉仕部内の空気が悪い。

先日は花火大会等があり、俺も近所の付き合いなどで出店を出すなどしていたのだが、あの楽しい雰囲気などはこの部室に来てきれいサッパリ吹き飛んでしまった。

朝一の職員室訪問でもおとがめ無しの一報を貰い、教室に行けば葉山どもに睨まれる。

海老名は逆の意味で危なそうなオーラを沸きだたせ、部室に来ればこの様だ。

「なぁ、お前ら何かあったのか？」

「……別に」

「……何もないわ」

「……」

素っ気ないにも程がある。

こんな調子で居るのなら、俺は貝にでもなりたい気分である。

「なん……だと！」

二時限眼の開始時、比企谷八幡は黒板を前に戦慄していた。

黒板には

文化祭実行委員　　比企谷

と書かれており、明らかに平塚先生の思念が入り交じっているように思えた。

「説明が必要かね？

もう次の授業が始まると言うのに委員を決めるのにまだぐだぐだとやっていたのでな。

私がお前に決めておいた」

やったよ私！見たいな顔で比企谷の肩に手をおく平塚先生。

殴りたい。そのどや顔！などと比企谷は思っているだろうが、俺の方がもっとひどい。

保留　鳴滝

何だよ保留って……こんなの何時何を頼まれるかわかったものじゃないだろうに…！

「さあ、授業を始める」

「えー、では文化祭実行委員の女子を決めたいと思います」

ＬＨＲ。別名帰りの会。

全員揃ったこの教室で、犠牲になった比企谷の道連れを決める会議が行われた。

言い方が悪いと思うが、俺は思っていない。クラスの雰囲気がそう言っているのだ。

「えーっと、やりたい人は挙手を」

そんなやり方で手をあげるやつがいたら見てみたいわ！

バカじゃねぇのか委員長！つーかお前が女装してでろや！

「……はぁ」

等とは言わず、机に俯せ、聞き耳だけを立てる。

大方俺は雑用でもさせられるんだろうが、こんな幼稚な祭り事など、作業の内にも入らんだろう。

何故なら本場の祭りで準備作業員のリーダーだからなっ！……まぁ、一番若いからって事で任されてるだけだけど。

「それって大変なの？」

由比ヶ浜か。

まぁ確かに実行委員ともなれば大変さは目に見えているだろう。

だがそれは後の事を考えずにやった結果が大変になるからだ。普通にやれば余裕だろう。

「普通にやれば大変じゃ無いけど……結果的に女子の方は大変になっちゃうかもしれない」

比企谷をチラッとみてそう言った委員長。

「おい委員長」

「な、何かな…鳴滝君…」

「比企谷がそんなに無能そうに見えるのであれば、お前が変わってやれよ。
その方が女子もやり易いだろうからな」

「で、でも決まったことをやり直すのは…」

「だったら人のやる気を削ぐような言い方するんじゃねぇよ。
嫌みにしか聞こえなかったぞ」

「わ、悪かったよ……」

全く…成績からすれば比企谷の方が断然上だと言うのにこのメガネは…。

「と、取り合えず誰か居ないかな…？
正直、由比ヶ浜さんがやってくれると助かるんだけど…人望あるし、適任だと思うんだけど」

「いやあたしそういうんじゃ…」

「へぇ～結衣ちゃんやるんだぁ～」

そういう訳じゃない。
そう言おうとした由比ヶ浜を制して、後方からの声に振り向く。

見ればこれまた嫌味垂らした顔の女子が頬杖をしながら由比ヶ浜を見ていた。

「そう言うのいいよね。
仲良いもの同士でやるイベントとか超盛り上がりそう！」

その言葉に、その女子を囲う複数の女子がクスクスと笑う。

「つーかさ、結衣はあーしと客呼び込む係なんだから無理っしょ」

「そ、そうなんだ～…そうだよね、呼び込みも大事だよね～…」

何だこいつ。
しかし三浦は由比ヶ浜をかばったか。
少しだけ見直そう。ホント、少しだけ。

「つまり、人望もあってリーダーシップを発揮できる人材が、って事で良いのかな？」

葉山が立ち上がってそんなことを言った。
まぁ確かにリーダーシップは大切だ。
人員を導き、より良い方向へと持っていく。そんな人材がいたらの話なんだが…。

「お～、じゃあ相模さんじゃね？」

お前の目は節穴か？

「そうだな。相模さん、ちゃんとやってくれそうだし」

お前の目は節穴だったな。

「えぇ～ウチ～？絶対無理だって～」

……こいつ、全然嫌がっていない。

目を見れば分かる。こいつは今、『嬉々』と『傲慢』と『余裕』を抱いている。

大方クラス内で人気の高い葉山に指名されて舞い上がり、尚且つ自分がやるのは当たり前であり、どうせならもっといってほしいなどと思っていることだろう。

こう言うのはあざといとでも言うのだろうか？

「そこを何とか…お願いできる？」

「あぅ…他にやる人がいないならしょうがないけど……でもウチかぁ～」

一刻も早くこの教室から出ていきたい。

そんな衝動に刈られながら過ごすＬＨＲだった。

「――――でも、ゆきのんが委員会とかやるのって以外だね」

放課後、第一回実行委員会議が終わった比企谷と雪ノ下に由比ヶ浜が労うようにそう言った。

「そうかしら？いえ、そうね。

私としては、比企谷君が実行委員にいた方が意外だったのだけど」

「あ、だよね！超似合わない…」

「おい、俺は半ば強制何だよ」

「そう……」

会話終了。

静寂が訪れ、小説のページを捲る音だけが唯一のＢＧＭ。

「い、委員会ってこれから毎日だよね…。

私もこれからクラスの方手伝ったりしなきゃだし…」

「ああ、俺も実行委員あるから暫くこれねぇわ」

やっぱりそうなるか…。

正直ここでの時間は居心地よく感じるようになってきたんだがなぁ…。

「そう。ちょうど良いわ。
私も今日、その話をしようと思っていたから。
取り合えず、文化祭が終わるまでの間、部活は中止しようと思うのだけど」

「まぁ、妥当だな」

「そう、だよね…」

「……鳴滝君は？」

「……そうだな。
個人的には残念に――――」

ガラッ

残念に思う。
そう良いかけたところでノックもなしに扉が開かれる。
入ってきたのは今日のぶりっこ女。後ろに女子二人を従えて入室してきた。

「しっつれいしまぁーす。
平塚先生に聞いてきたんだけどぉ、奉仕部って、雪ノ下さん達の部活なんだぁ～」

「何かご用かしら？」

クスクスと笑う三人に、少し強めに言葉を発した雪ノ下。

「ウチ、実行委員長やることになったんだけどさぁ、こう…自信がないっていうか。
だからさ、助けてほしいんだ」

……は？
今なんて言った？
この女が実行委員長だと？
やる気もなく、ただただ目立ちたいと目で表記するこの女が委員長だと？

「…自身の成長、と言う貴女が掲げた目標と大分外れているように思うけれど」

「そうなんだけどぉ、やっぱり皆に迷惑かけるのが一番マズイって言うかぁ…
失敗したく無いじゃない？それに、皆で成し遂げることも成長に繋がると思うし！」

終わったな…今年の文化祭。
この女が人を率いるなど出来る筈がない…。
大方雪ノ下に頼むだけ頼んで自分は高みの見物を決め込む気でいるのだろう。

「話を要約すると、貴女の補佐をすると言うことで構わないかしら？」

「うん！そうそう！」

「まて！受ける気か！？この依頼を！」

今まで座っていた俺は勢いよく立ち上がって雪ノ下を見た。
雪ノ下は瞬間に目をつむり、俺に心情を悟らせまいとした。

「……これは私個人の依頼よ。貴方には関係がないわ。
それに、この手の依頼は私一人でやった方が効率が良いわ」

効率だと…？

「それじゃ、明日から宜しくね！」

そう言い残して出ていった三人。
残された俺たちは雪ノ下を注視する。

「……どういうつもりだ雪ノ下。
文化祭終了まで部活は中止すると言っていただろうに」

「言った通りよ。
今回の依頼は私が一人で請け負うの。
貴方達は各自の仕事をしてちょうだい」

そう言って逃げるように部室を後にする雪ノ下。

「……比企谷。
一体何があった？最近に関わらず、今日のアイツはおかしすぎる」

「……分からん。
いや、分かってはいる。だが、言うことは出来ん」

「ヒッキー……ごめん、あたしも」

「……そうか。
すまん、今日は帰る…また明日な」

「……おう」「うん…」

心にもやもやしたものを抱え、その日は解散となった。
雪ノ下の様子の不審さに、その日の夜、俺はあまり寝付けずにいた。

――――――職員室。

翌日、俺は平塚先生に呼び出され、職員室内にある相談室へと訪れていた。

「単刀直入に言う。
鳴滝九十九に私からの依頼だ」

「……文化祭終了まで部活は中止になっています。
他でもない、雪ノ下が言い出したことです」

「それは承知している。
私は奉仕部の君ではなく、鳴滝九十九に依頼するのだよ」

初めてになるであろう平塚先生の依頼。
果てしなく不安が過る中、ふと、ピースが当てはまったような感覚に陥った。

「……文化祭実行委員ですか？」

「話が早くて助かる。
私の勘では今年の文化祭は荒れるだろう」

「そうでしょうね。荒れるついでにぶっ壊れるでしょう。
あの女が実行委員長なんですから」

「知っていたか…。
私からの依頼は実行委員の補佐として回ってもらいたい。
クラスには私から言っておく。生活もあるだろうがどうか容赦してほしい」

何だよそれ…。
何で俺が文化祭実行委員の手伝いをしなくてはならない？
それに生活だと？この期間中バイトを休めって言いたいのか？
やめてくれよ…今のところ余裕があるから大丈夫だろうが、油断すればすぐにでも破産できる自信がある状態なんだぞ…。

「嫌ですよ…俺にとってバイトは将来に安定した生活を送るための貯金目的なんです。
文化祭当日まで何日あると思ってるんですか？貴方は俺の将来をぶち壊すつもりですか？」

「すまないと思っている。
だが、君にしか頼めない事項なんだ…。大変なことになる前に、早めに手を打っておきたい」

……雪ノ下は何らかの思考の下、文実の補佐に回った。
比企谷は半ば強制であるにしても、カバーに回れるほどには動けないだろう…。
だが、他の連中はどうだろうか？
いや、そんなことならこうして頼んできたりもしないだろう…。

「……やり方は全て俺に一任するんでしすか？」

「ああ。好きにしてくれて良い。
その結果、どうなってしまおうが、私が全て責任を負う」

やはりこういった人間が世の中に必要なのではないだろうか？

「……わかりました。
その依頼、承ります」

「ありがとう」

その後、全てのバイト先へ連絡し、明日から文化祭終了までの期間中、シフトを外して貰った。
何かあったのかと心配されたが、結果的に全て了承してくれたのは、そこに信頼関係があったのだろうと有り難みを感じる他ない。

「ツクモン！」

「由比ヶ浜か…どうした？」

下校中、校門前で待ち伏せていた由比ヶ浜。
その顔色はあまりよろしくなく、何かを思い詰めているように感じられた。

「あのね、ツクモン。
私にはゆきのんのこと、どうにも出来ないから…ヒッキー一人じゃ荷が重いだろうし…」

言いたいことは分かる。
だからこそ俺はその次に出てくる言葉が聞きたい。
俺達があの奉仕部で培った何かが崩れることを阻止したいと思っている俺がいる。

だから――

「あの二人を、ゆきのんとヒッキーを助けてあげて！」

「任せろ…！」

覚悟しろよお前ら。

やる気になった俺はもう止まらないぞ！

俺の生活の一部になっているあの時間は、絶対に無くさせたりはしないからな！

祭りの必要事項

失敗とは、誰もが経験することである。
人はその失敗を糧に、過去、現在と、進化を遂げてきたのだろう。
しかし、そうならなかった者も存在することを忘れてはいけない。
失敗を認めず、そのまま我を通す輩は朽て腐り、自滅への道を辿るのだ。
大まかに言うのなら、大したこともしていないのに名前だけ載っている歴史上の人物だとか、成功者に嫉妬して影に隠れて挫折した人間もいると言うことなのだ。
失敗とは、成功の母であるとはよく言ったもので、失敗を繰り返す内に成功への方法や道が見えてくると言った例えだ。
人生を成功させた人物達は、諦めると言った結論を持ち出さず、挫折や失念を払いのけ、朽ては成功へと昇華したのである。
逆に言えば失敗し続ける人間は大した考えを持たずに繰り返し、朽て挫折して時間を無駄にしてしまうのだ。
当然ながらその後悔は嫉妬に成り下がり、成功者へ向けられる矛となる。
成功者は言うだろう。
「何故その嫉妬を次の希望に生かさないのか」と。
失敗者は反論するだろう。
「自分には向いていないのだ」と。
何時の世も、こう言った平行線の口論が世界の何処かで行われているのだと思うと、悲しくなるのは何故なのだろうか？

「――それでは、定例ミーティングを始めます。じゃあ宣伝広報、お願いします！」

翌日、平塚先生からの依頼通り会議室へと赴いた俺は、いち早く気づいた比企谷の隣に座って会議を受けることにした。
比企谷は俺がここにいる理由を察したのか、何も聞いて来なかった。
雪ノ下には驚かれた後に蔑んだ目で見られたが…。

ともあれ開始早々にやる気の欠片も感じないあの女の声を聞くとやる気がドン底に陥った気がしてならない。

「掲示予定ポスターも、大体半分くらいは終わってます」

「そうですかぁ！良い感じですね！」

「いいえ少し遅い」

「――え？」

女の言葉を遮って雪ノ下が正論を投げ掛けた。

「掲示箇所の交渉、ホームページへのアップは既に済んでいますか？」

「ま、まだです…」

「急いでください。
社会人ならともかく、受験志望の中学生やその保護者はホームページを結構古満目にチェックしてますから」

実にその通りである。
どれだけ大きな祭りをするにしても、広告や宣伝が行き届かなければ忠の自己満足で終わってしまう。
祭りとは来る人間が楽しむべき物でなくてはならないのだ。

「は、はい！」

良い返事だ。
この分ならこの生徒には期待できる。

「相模さん、次」

「あ、あうん。
えっと、融資統制お願いします」

「はい。融資参加団体は現在１０団体」

「増えたね～地域賞のお陰かなぁ？」

少ねぇよ。
どれだけ小規模なんだよ。スケール小さい処か極小じゃねぇか。

「じゃあ次は…」

「それは校内のみですか？
地域の方々への打診は？例年、地域との繋がりと言う例を掲げている以上、参加団体の削減は避けないと。それから、ステージの割り振り、開演のスタッフ打ち合わせなど、タイムテーブルを一覧にして提出してください」

「わ、わかりました」

流石だ。
ここまでわかっている人間が上にいるだけでやるべきことも指摘できる。
更には急いでほしいと言う言葉も巧みに表現して伝えている。
回りからも雪ノ下を称賛する声がちらほらと聞こえてくる。

「では、次に記録雑務ですが、当日のタイムスケジュールと機材の打ち合わせなど、作業のタイムテーブルを出しておくように」

「……」

周囲の鼓舞は上場…しかしあの女の影が薄まってきている。
何かしらの企てとか考えそうで不安要素が浮上するな…手を打って

おくか。

――更に翌日。

まだクラスにいた俺は、同様に未だにいるあの女、相模に目線を向ける。

取り巻きのような二人と楽しそうに会話しており、黒板の前で打ち合わせなどしている海老名達など目もくれていない。

先ほども由比ヶ浜が委員会に行くように言ったのだが、普通に断っていた。

俺は溢れ出る殺意を押し込めながら、海老名の方へと歩いて行く。

「海老名。聞きたいことがある」

「何？ハヤハチの成り行き？」

何でこの女はここまでオープンなのだろうか？

だからと言って嫌になるわけではないが。

「済まないが真剣な話だ。
今日やる予定だったスケジュールを教えてくれ。
今やっていることの前に行ったことと、今日これからすることも」

「どしたの急に？別に良いけど。えっと――――――」

「――――――そうか。
時間を取らせて悪かった。
一応先生から聞いていると思うが、俺はクラスに手伝いに行ける状態では無くなりそうなんだ。
埋め合わせはするつもりだが、その場合なるべく安易な用件にしてもらいたい」

「ホント！じゃあ考えとく～……ぐへへ」

本当に安易な用件であることを祈る……。
俺はニヤニヤする海老名を後ろに、会議室へと向かうのだった。

「ごめんね～…私が頼んだんだ～…融資団体足りないってことだったから…」

会議室に到着するなり、少数の人だかりが出来ていた。
中からは生徒会長、城廻先輩の謝るような声が聞こえる。

「すまん、通してくれ」

人混みを別けて中へと入ればそこには訝しげな目で対象を見る雪ノ下と笑顔で余裕そうにする対象者である雪ノ下の姉がいた。

「……」

俺は無言で自分の席へと歩いて座る。

確かに険悪なムードではあるものの、あれは雪ノ下の身内の問題。

俺の出る幕はないし、出たくもない。

何よりあの姉の方と話がしたくない。

「――――そうなの？委員長やってると思ったのに」

「すみませーん。クラスの方に顔を出してたら遅れちゃいました～」

「あ、この子ですよ。今年の委員長は――――」

「嘘ついてんじゃねぇよ。

教室で談笑してたら遅れたの間違いだろ」

相模が入ってきて早々に嘘を吐き出す。

その言葉と態度に若干ながらイラッと来た俺は、無意識の内にそう言ってしまっていた。

「……別に嘘じゃないんだけど」

相模は苦い顔をしながらそう言った。
こうなればこいつの印象を落とすしかない。

「なら、クラスの今日やる予定を言ってみろよ。
そしてお前が手伝っていた内容もだ」

「えっ……出し物決め？」

「バカかお前は。
そんなものとっくの昔に決められてんだよ。バカじゃねぇのか？
嘘つくならもっとまともなこと言えよ」

「な、何よ！アンタだって何もしてないくせに！」

「俺の場合は教師公認だ。クラスの奴等も了承した上でここにいる。
それよりも、遅れた理由に嘘をついたことはどうなんだ？ぶっちゃけやる気ないんじゃねぇのか？」

俺の言葉に会議室全体の目線が相模に注がれる。

「……ごめんなさい。次からは気を付けます…」

相模はそう言って黙ってしまった。

「委員長がこんな調子で大丈夫かねぇ…？」

俺はそうつぶやいて俺に回ってきた雑務に取りかかった。

「ま、次からは気を付けなよ～？
ところで、私も委員会に出ても良いかな？
私も融資団体として出たいんだよね！でも雪乃ちゃんに渋られちゃってぇ～…」

殺伐とした空気の中、何もなかったかのようにそう切り出した雪ノ下姉。
相模は雪ノ下を流し見てからニヤリと笑って答えた。

「良いですよぉ。融資団体足りないしぃ～」

こいつ絶対反省してねぇだろ。
どうせ雪ノ下より優位に立ちたいからとかそんな理由で了承したんだろうが、選択を過ったな。
どんな形であれその女がどれだけ巨大な存在か理解してない。
格上の者を使役するにはそれに見あった代償が必要になるとも知らずに…自滅の道を辿るだろうな。

「地域との繋がりも、これでクリアでしょぉ？」

こいつアホなんじゃねぇのか？
お前にとって地域＝雪ノ下姉なのかよ。どれだけ世間狭いんだよ。
人口溢れ帰るぞ。

「あれ？比企谷君だ。ひゃっはろ～。

でもちょっと意外だなぁ。比企谷君はこう言うこと参加しない子だと思ってたよ」

比企谷が入室し、それに気づいた雪ノ下姉は手を振って近づいた。
何だ？知り合いか……いや、恐らく雪ノ下に近寄る人間がどの様な者なのか確認するために接触したんだろう。危険と判断できるものは即刻排除できるように。

「みなさーん！ちょっといいですかー？」

ふと、先程謝罪を入れた筈の相模が会議室中央へと躍り出て全員の注目を集める。
その顔にはやはり反省の色は見えず、浮き足立っているようにも見える。

「ちょっと考えたんですけど、実行委員はちゃんと文化祭を楽しんでこそかなーって。
自分達が楽しまないと、人を楽しませられないかなって」

確かに一理あるだろう。
人を楽しむことに自分が楽しめなくては意味がないのだから。
しかしこいつが言うとそんな内容も真逆の方向へと向けられているようでならない。

「予定も順調にクリアしてるし、クラスの方も大事だと思うので少し仕事のペースを落とすって言うのはどうですか？」

……は？

「相模さん。それは検討違いだわ。
バッファを持たせるための前倒し――――」

「私の時も、皆クラスの方で盛り上がってたな～」

「雪ノ下さぁん。お姉さんと何があったか知らないけど、前人の知恵に学ぶって言うかさ？
私情を挟まないで皆の事も考えようよぉ」

雪ノ下は何も言えない。
相模の目はそれこそに優越に浸っている。

「てめえ、今の現状の何処に人員を減らす余裕がある」

「……あるでしょ？雪ノ下さんのお姉さんも参加してくれたし、楽になるでしょ？」

「それの何処に余裕がある？
まさか一人増えただけで超楽になります――――なんて考えじゃねぇだろうな？」

「は？聞いてなかったの？
前回の学園祭委員長が手伝ってくれるんだよ?余裕が出ない訳じゃないじゃん」

「前回の文化祭がうまくいって、今回はその立役者がいるから大丈夫だと……。
お前前回の委員会の作業内容がどんなものかしってんのか？」

「それこそ問題ないでしょ？
今回の学園祭だってやることは前回と変わらないわけだし、前回の復唱なんだから関係ないじゃない」

「前回の復唱…ね？
ならば今回の出展内容やステージの割り振り、人員の確保、タイムスケジュールやテーブルは前回と同様の内容で、更にはこの実行委員の人間も、前回と同じ人間が揃っている、と？」

「……は？」

「わからないか？前回と同じ内容で取り組むのであれば同じ内容でやることも流れるようにできるだろ。
だが今回の物は前回と全く違う。ここにいる人員も、学園祭の内容も、出店の数や配置も。
全てが違うこの文化祭で、果てしてうまくいくのか？たかが一人人間が増えたぐらいで？」

「……くっ」

「おかしいよな？
ただでさえ前倒しでギリギリのタイムテーブルなのに、作業ペースを落とす。

これがどれだけ愚かな指示なのか…わからない訳じゃないだろ」

室内は静まり返る。

俺と相模の討論に全員の注目を集め、不穏な空気を漂わせている。

「知ってるか？上に立つ人間は全ての責任を取らなくてはならない。万が一お前の指示に賛同し、学園祭当日までに作業が間に合わず、中止をせざるを得ない状況に陥ったとき、お前はその責任をどう果たしてくれるのかねぇ？」

「そ、そんなの…」

「ま、部下は上司の指示に従う。

端的に言えば上司の命令は部下の行動。部下の失敗は上司の責任になるわけだ。

当然、『作業ペースを落とす』と言う指示の結果がどのようになろうとも、責任は上司であるお前がとることになるんだよな」

俺は見下すように相模を見る。

相模は苦虫を噛み潰したような顔をして悔しそうにする。

「私は相模ちゃんの意見に賛成かなぁ？

委員会も大事だけどクラスの方も大事なんだし」

この女（アマ）……！

「そ、そうですよね！

ほら、お姉さんもこう言ってることだし！クラスの方もちゃんと参加するべきなんだよ！」

味方を得たつもりか？

残念だがその女はお前の味方には見えないぞ？

言ってみればお前を蹴落とすための布石うちにしか見えない。

「それじゃ、今日は解散としまーす」

そうして委員会は終わりとなった。

結果的には相模の意見が通ってしまったようだ。

『作業ペースを落とし、クラスの方に顔を出せ』。

サボる事を肯定してしまうこの指示がどの様な結果をもたらすのかなど、一目瞭然であるが…残った人間に負担が来ることは間違いがないのだ。

「……ちっ」

何かを探るように俺を見てくる雪ノ下とニヤニヤする雪ノ下姉。

俺はその視線に耐えられず、任された仕事を鞄に積めて教室から出るのだった。

３日ほど経った日の放課後、会議室には昨日まで溢れるようにいた人員も、５０から１５人へと減少を辿っていた。

「……ちっ」

この状況の元凶である相模は当たり前のように出席しておらず、雪ノ下姉でさえも来ていない。

「私も…相模さんの意見に反対しとけば良かったなぁ……」

ふと顔を上げれば城廻先輩がたっており、苦笑いで俺を見ていた。

「ごめんね？あんなに意見してたのに賛同してなくて…」

「人って言うのは無意識の内に回りに合わせてしまおうとする。問題なのはその空気が間違いであるかどうかに気づくかどうかです。お気に為さらず」

「うん。ありがとう」

しかし作業は追い付かない。

俺一人でも3人分は埋めているはずなのだが、やはりと言うか遅れる一方である。

「こ、これ……お願いします…」

「了解した。それと、俺が怖いのは分かるが、今は無礼講とでも思って気軽に接してくれ」

「あ、うん」

しかしこの学校に出回った噂はどんなものなのだろうか？
まさか不良と言うだけで怯えられているのであろうか？だとすれば外見で判断するのはいけないことであると議論する必要がある。

「……」

そんなことを考えながらも作業を続け、気づけば外は暗くなっていた。
このペースで大丈夫なのだろうか、と。会議室にいる俺達は満場一致でそう思うのだった。

本気の手助け。失いたくない物の為に

「――ごめんなさい」

彼女は、雪ノ下はそう言った。

原因は言うまでもなくサボった奴等の仕事のしわ寄せが間に合わないことからの重圧と焦り。

このままでは確実に間に合わないだろう。

今ここに来ている葉山の言う通り、誰よりも先に破綻してしまうのは雪ノ下だった。

本来委員長である相模がやるべき仕事に加え、自分の仕事、サボりのしわ寄せなど、一番多く仕事が回ってきてしまうのは副委員長の雪ノ下なのだ。

だからこそ許せなかった。

雪ノ下が謝った、謝ってしまったことに。

「遅れてごめんなさーい！あ、葉山君こっちいたんだぁ！」

相も変わらず、誠意のこもっていないその言葉は、ただでさえイラついている俺を更にイラつかせた。

「おつかれ。相模さんはクラスの方に行ってたの？」

「うん。そうそう！」

「相模さん、ここに決済印を。
不備についてはこちらで修正してあるから」

そう言って雪ノ下は数枚の用紙と印鑑を手渡す。

「ああ、そう。
て言うかさ、ウチの判子渡しておくから勝手に押しちゃって良いよ？
ほら委任ってやつ？」

「……では、今後私の方で決済します」

……良いのだろうか…これで。
相模の暴挙に誰も文句を言わず、好きにさせることでどうなるであろうかなど解っている筈なのに。
そうなればしわ寄せは雪ノ下に増えることになってしまうのに…。

＂キーンコーンカーンコーン＂

「楽しいことやってると一日がはやーい！
じゃ、お疲れさまでしたー！」

退室していく相模。
誰も止めようなどせず、そのまま姿を消していく。
そしてちらほらと帰り支度を始める奴等も出てくる。

「…比企谷、雑務の残りはあとどれくらいだ？」

「……一部半ってところだ」

「……後は俺がやっておく。取り合えず今日は上がってくれ」

「……わかった。また明日な…」

「ああ。お疲れ」

比企谷も帰る。

既に殆どの生徒が会議室からでていき、残っているのは俺と城廻先輩のみとなった。

そんな城廻先輩も、バッグを肩に掛けて何時でも帰れるようになっている。

「ね、ねぇ鳴滝君…まさか今日も…」

「はい。残業です」

「ここ3日間ずっとだよ?何でそんなに…」

城廻先輩は間違いなく俺を心配してくれている。

しかしだ。俺にも譲れないものだってある。この委員会しかり、生活しかり。

「大切な場所と時間を失いたくないからです」

「このままいってしまえば、恐らく失ってしまうでしょう。
そうなってしまえば俺は自分を保つことができず、俗に言う不良と化してしまうでしょう」

「そ、そんなに大きな物なんだ…」

「すみませんが、帰り際で良いので、平塚先生を呼んでもらえますか？
すこし相談と、聞きたいことがあるので」

「うん。じゃあ鍵はここに置いておくね？また明日」

「はい。さようなら」

城廻先輩は退室していき、俺は一人会議室に残る。
直ぐ様ｗｏｒｄを開いて必要事項を打ち込む。
プリンターを接続して印刷を開始してからまた仕事に戻る。
この用紙が、この状況を打破する唯一のカードだ。
雪ノ下は家でも作業をしていることだろう。アイツはそういうやつだ。
少しでもアイツの負担を無くすためにも、俺は……？
何で、何で俺は雪ノ下をこんなに考えるんだ？
雪ノ下からしてもそんなものは迷惑で、俺からしても心配なだけの筈なのに…。
対抗心？いや、違う。向上心？対立？貢献？……違う。これは怒りだ。
誰でもないあの相模に対しての隠しきれない怒り。

「失礼するよ。
城廻から聞いてきたんだが、何かあったかね？」

ビクッと肩を震わせて会議室の入り口を見れば平塚先生がそこにいた。

「いえ、先生に聞きたいことと、許可を頂きたくて」

「……ふむ。見せて貰えるか？」

俺は無言で用紙を渡す。
これが通ればこれ以上の危険は無くなるだろう。

「鳴滝。これは何のつもりかね？」

「は？」

平塚先生は俺が渡した用紙を俺の目の前につきだして見せる。
内容はいたって簡単。先程まで俺が考えていたことが文章化されていた。
どうやら無意識の内に印刷までしていたようだ。

「んなぁ！？ちょ！返してください！」

俺は焦って取り返そうとするが、平塚先生はその場を飛び退いて距離をとる。

「あっははは！まさか君がねぇ？
いやいやしかし、あははははは！」

「見てもらいたいのはこっちの用紙！ほら返して！」

「まぁこの用紙は私が預かっておこう」

「くっ！弱みを握るとは…！」

俺は机を滑らせて用紙を送る。
平塚先生はその紙を見て真剣な顔に変わった。

「私の記憶上、この紙には不備がある。
この事事態には反対するつもりもないよ。たが、この事は私のサインだけでは足りないんだ」

…そうなのか。
てっきり先生の了承さえあれば大丈夫かと思ったんだけど。

「必要なのは後3つ。生徒会長の城廻、副委員長の雪ノ下、委員長の相模。
この3人のサインがなければこの用紙は効果を発揮しない」

「……一応書き換えて明日聞いてみます」

「そうしたまえ」

平塚先生は素早く訂正し、プリントした紙にサインをくれた。

「しかし君はキーボードを叩くのが早いな？」

「まぁ、慣れてますから」

「そうか。しかし、あまりパソコンばかりに目を向けていては視力が落ちるぞ？」

「生憎と、俺の視力は２．０なんで。直ぐに下がるわけでもないでしょう」

「ふふっ。そうかね。
では、私は帰るとするよ。下校時刻はあと４０分か」

「いえ、もう帰ります。残りは家でやりますから」

「そうかね？なら帰るとしよう」

俺は荷物を纏め、鞄に詰め込む。

「なぁ、鳴滝」

「何ですか？」

不意に平塚先生は俺の名前を呼ぶ。

「いや、何でもない。さぁ帰ろう」

「？」

何かをいいかけた平塚先生だったが、俺はあまり気にせずに帰宅するのだった。

「城廻先輩、この書類にサインが欲しいんですけど」

翌日、放課の合間に三年のクラスへと赴き、城廻先輩にそう言った。
ここへ来る間に「何でここに！？」みたいな目で見られまくったが気にせず、やっとのことで到着した。

「おはよう鳴滝君。サインだね……うん。
これはしょうがない事だよね…残念なことだけど、解ったよ」

「ありがとうございます」

サインを記入した城廻先輩は用紙を俺に渡す。
これで後は雪ノ下の所へ行けばクリアされる。

"キーンコーンカーンコーン"

「チャイムか…」

「これから大変だけど、頑張ろうね？」

「はい。失礼します」

俺は教室へと戻る。

しかしながら今更教室へと戻っても途中入室に変わりないので、そのまま会議室へと向かって残りの仕事を片付けることにした。

"キーンコーンカーンコーン"

「ん、チャイムか。Ｊ組に向かうか」

俺は用紙を纏め、立ち上がった。

「――休み？」

「え、ええ……体調不良って…言ってました」

j組に到着したのだが、雪ノ下の姿が見当たらず、たまたま近くにいた女子生徒に聞いてみたところ朝のホームルームで教師がそう言ったらしい。

「そうか。分かったありがとう」

「い、いえ！」

やっぱりJ組にまで俺の噂は回っているようだ。

話している最中にも周りから「かわいそー」とか「大丈夫かな…」とか聞こえてきた。

しかし雪ノ下が休み……無理が祟ったのか。気づいてやれば良かったのに…くそ！

「……平塚先生なら知ってるか？」

先ずは教室へと向かって授業を受けることにする。

昼放課の時間にでも職員室に向かうようにしよう。

「何？雪ノ下の住所？」

「はい。平塚先生なら知ってると思いまして」

昼放課、早速職員室に向かった。
平塚先生は俺の言葉に訝しげな目を向けた。

「何ですかその目は…」

「いやね？弱っている雪ノ下に対して狼にでもなったりしないだろうかと？」

「狼？……すみませんが、いってる意味が良く分からないんですけど」

「襲ったりしないかなって言う意味さ」

「なっ！馬鹿言ってんじゃないよ！
そ、そそそそそんなこと！するわけないじゃないですか！」

「お、おう…冗談だ冗談。ほらこれだ」

「あ、ありがとうございます……じゃ」

「あぁ、待ちたまえ。
昨日のこの紙なんだが…雪ノ下に――」

「止めろよテメェマジでぇ！！」

くっそ！
平塚先生め…大変なめに合った。

「ここか…マンション……高いな」

放課後、城廻先輩に今日は行けないと伝えて帰宅。
その後に雪ノ下の住むマンションへと来ていた。

「えっと…１５０７…と」

"ピンポーン"

号室の番号を押すと、インターホンがなる。
正直ここにいるのが居たたまれない。早くしてほしい。

『…はい』

「雪ノ下か？鳴滝だが」

『何で…ここに』

「頼み事と話したいことがある。済まないが上げて貰えるか？」

『……ええ』

その後、ガラガラと自動扉が開き、奥へ進めと示してくる。
行き先表示までついている辺り、建築費用がどれだけ高いのかが伺える。

「悪いな。体調崩してるのに」

「別に、もう大分回復してるから。それで、用事って？」

「ああ。この書類にサインが欲しい。良く呼んでからサインを頼む」

雪ノ下の家に上がり、リビングで用紙を渡す。
雪ノ下の顔は赤いし、まだ治ってないことがわかる。

「……わざわざ来てもらって悪いのだけど、この書類にサインは出来ないわ」

雪ノ下はそう言って用紙を机に置く。

「……何でだ」

「今更依頼を放棄できないから」

「依頼……相模のか」

「ええそうよ。私には依頼をやり遂げる義務があるわ」

「……け……なよ…」

「え？」

「ふざけんなって言ってんだよ！」

依頼をやり遂げる？

アイツのサポートなんざもうあってないようなものだろうが！

「今回の依頼は相模のサポートだ。

今現在仕事を放棄してる奴のサポートってなんだよ？

体調崩してまでやりやがって…そんなのサポートでも何でもないだろうが！」

「…これは私の受けた依頼よ。貴方には関係ない」

関係…ない？

いやいやいや…まさかこんな言葉でダメージ受けるとは思わなかった…。
ここまで心に来るとは知らなかったぞ…。

「お前、本気で言ってんのかよ」

「……ええ」

「それこそふざけんな。
調子に乗るなよ…お前何様なんだよ」

「……別に、私がやりたいだけよ」

「その結果がこれだろ！失敗を受け入れろよ！
心配なんだよお前が！」

「……心…配？」

「そうだ！奉仕部の仲間だろうが！
だいたい昨日なんて仕事に手がつきづらかったんだからな！」

「……そう」

「頼む。これ以上の無理をしないでしくれ」

俺は土下座で頭を下げた。

"ピリリリッピリリリリッ"

「ご免なさい。電話だわ」

気まずそうに雪ノ下は受話器を取る。

「はい。…はい…大丈夫です……ファックス？……ええ…失礼します…」

雪ノ下は受話器を戻した。

しかしファックスとなると必要な書類が送られてくるのだろうか。

雪ノ下はファックスもとへ行き、送られてきた紙を見て固まった。

「おい、どうした？」

「ひゃっ！な、何でもないわ／／／」

「なっ！？顔赤いぞ！熱があるんじゃないのか！」

雪ノ下はみるみる顔が赤くなり、ふらふらと机に戻る。

そして書類にサインを書き、昨日渡された相模の判子を押した。

「これでいいかしら…」

「あ、ああ。

だが、何で急に…誰からの電話だったんだ？」

１８０度意見が変わった雪ノ下にビックリする。
雪ノ下は未だに顔を紅潮させ、俺と顔を合わせないようにしている。

「私の知人よ…」

あらぬ方を向いてそう言った雪ノ下。
おかしい…普段の雪ノ下ならば確りと目を見て話す筈なのに…。

「ちょっとその紙見せろよ」

「だ、ダメよ！これは…！」

俺の言葉にパッと後ろに隠す雪ノ下。

「良いから見せろ！」

俺は雪ノ下の後ろに手を伸ばす。
抵抗する雪ノ下は中々隙がなく、それでいて必死に隠そうとする。
そして――

「あ……」「ん？……」

俺が雪ノ下を押し倒すような体制で固まってしまった。
二人して顔が赤くなり、俺は慌てて飛び退いた。

「わ、悪い！」

「いえ、別に…」

沈黙。

お互いになにも話さず、静かに時間が過ぎていく。

因みに取ろうとした紙は雪ノ下が折りたたみ、胸ポケットへとしまってしまったため、取り出しが不可能になってしまった。

"ピンポーン"

「客…か？」

「そ、そうね」

た、助かった…気まずいなんてものじゃなかった！

と、兎に角、これに乗じて帰るしかない！

俺は例の用紙を鞄に入れて玄関へと向かった。

「あ…」

「お、お邪魔だったかな？」

玄関には比企谷と由比ヶ浜がいた。

「いや、俺はこれから帰るところだったから」

俺は靴を履いて外へでる。

「雪ノ下。取り合えずサインありがとう。体調治してまた学校でな」

「え、ええ。また…」

あの二人にいらない誤解を与えた気がするが、取り合えず帰って仕事を終わらせよう。

俺は早足に家路を辿るのだった。

進化と退化

憧れ。

それは一般市民が芸能人等に抱く感情である。

言い換えれば、劣等者が優等者を羨む行為である。

あるものは真似をしたり、あるものは参考にする。

それらはまるで模写の様に、似ているところがあればその様に感じとり、己が自信を騙してまでなりきろうとしてしまう。

私からしてみれば、自分の優位性を圧し殺してまでやることではないと考える。

自分が苦手とすることを克服するならまだしも、憧れそのものになると言うことは愚かであるからだ。

やがて無理であったと挫折し、無駄な時間を過ごし、後悔してしまうからだ。

一定の要領を越えてしまったそれは、いずれ取り返しのつかないことにまで発展し、結果的に可能性を壊滅させるのだ。

つまり、デメリットが大きすぎるのだ。

しかし、全てがそうとは一概に言えない。

憧れの過程で自分の可能性に気づき、そちら側へと向かってしまえば、成功の道へと向かうことさえ出来るようになるのだ。

芸能に携わる数人はそうであると私は思う。

だからこそ私は思う。

大切であると思える人がそうなっていたのであれば、私は助力を惜しまない。

会議室。

二週間ぶりに実行委員全員が揃い、会議を行う事となった。

本来なら最初に決めるべき事項を決めていなかったことに城廻先輩が気づいたからである。

「おい。全員揃ったぞ」

緊急でありながらも、校内を走り回ってクラスを回り、実行委員に声をかけて回ったのだ。

声をかけた実行委員の大半が、教唆室内で談笑していたのを確認し、声が荒ぶったのは仕方がないことだろう。

「ああ、そう」

横の席と談笑していた相模は急に不機嫌になり、委員長の席へと座る。

「雪ノ下さん」

相模は雪ノ下にさっさとしろ、と声をかけた。

何でだよ。普通お前が音頭をとるだろうが。

「それでは委員会を始めます。
先程連絡があったように、文化祭のスローガンが決まっていなかったため、この場で会議したいと思います」

☆友情！努力！勝利！

何だっけこれ…たしか少年漫画の……？

☆面白い！面白すぎる！
～潮風の音が聞こえます。総武高校文化祭～

何が面白いのか具体的に言ってみろ。

☆一意専心

これ…絶対雪ノ下じゃねぇか？

☆ファイナルアタック文化祭！

何かの技名？

☆アホやってなんぼの文化祭

何をするつもりだ…！

「まともなやつはないのか…」

「あの中の二つに誰が書いたか心当たりがあるんだが…」

☆ＯＮＥ　ＦＯＲ　ＯＬＬ

「なぁ…これは無いだろ…」

「ああ…」

俺と比企谷は額に手を当てる。

「じゃあ最後ウチらのほうから」

そう言って相模が立ち上がり、ホワイトボードに文字を綴っていく。

☆絆

～ともに助け合う文化祭～

「うぅわぁ～…」「ぶくっ！くくく……」

静かな会議室に、比企谷の声が深く響き、俺はそれに笑ってしまった。

「な、何かな？何か変だった？？」

「「いや、別に」」

「何か言いたいことあるんじゃないの？」

「「いや、まぁ別に」」

「ふーんそう。嫌なら別の案出してね」

そう言って相模は座る。

これはアイツの心を打ち砕くチャンスの一手だ。

比企谷に任せても大丈夫だろうが、それでは俺の気が済まない。

「じゃあ遠慮なく」「あいよ」

さぁ、俺の怒りを思いしれ！

☆人

～良く見たら片方楽してる文化祭～

「人、良く見たら片方楽してる文化祭」

そう言って書いた紙を持ち上げる比企谷。

☆虚言

～進化と言って退化してしまった文化祭～

「虚言、進化と言って退化してしまった文化祭」

俺も記入した紙を持ち上げて相模に見えるようにした。

「あっはっはっはっは！
面白ーい！お腹いたーい！」

急に笑い出したのは雪ノ下姉。
お腹を押さえ、机に伏せて笑い転げる。

「二人とも、説明を」

平塚先生がそう言ってくる。

「んじゃ、まず俺から」

俺は立ち上がり、相模のみを視線に捉える。

「自信の成長を、進化を掲げた誰かさんの言葉が、責務放棄で怠慢し、退化に向かってしまったことを例えます。
それともこれまでの行程が、委員長言うところの進化の過程なのだとすれば、直ぐ様この案は取り下げたいと思いますけども」

俺は座る。
比企谷に目配せをして引き継ぎを促した。

「人と言う字は人と人とがって言ってますけど、片方寄り掛かってんじゃないですか。
犠牲が出ることを容認しているのが人って概念だと思うんですよね」

「犠牲とは主に何を指す？」

「どうせ自分だとか言うんじゃないですか？」

「そうだよな。大事な会議でそんなこと言うくらいなんだからさ」

「そうそう。傲慢すぎるんじゃないの？」

「噂通りだよな。ってか何であいつここにいるの？」

平塚先生の言葉に続くように、複数の生徒から野次が飛んでくる。
野次を飛ばしている者の全員が、今日まで一度も仕事をやりに来なかった奴等だった。
比企谷は下を向き、黙ってしまう。
所詮は数の暴力ならぬ暴言。
一人では言い返せるものも言い返せない。
ならば一人一人に言ってしまえば俺の意見はまかり通る。
その程度で俺の怒りが収まると思うなよ？

「常葉　淑子、高松　秀夫」

俺は立ち上がり、最初の標的の名前を呼んだ。

「お前ら今日まで一度も仕事をしに来なかったよな？何してたよ？」

「そんなもんクラスを手伝ってたに決まってんだろ？」

「そうよ」

「その中に暇な時間は無かった、と？
それはおかしいよな？お前たちのクラスの準備万端４日前には終了したと報告が来ていたんだが？」

「そ、それは…」

「こ、小道具とか必要だったから！」

「お前らのクラスは喫茶店だったはずだが？
必要な資材はテーブルにクロス、食器類に内装。
全て学校からの貸し出しが用意された筈だが、他に何が必要だったんだ？」

「え……あの…」

「その……」

「お前らが放棄した仕事は全部俺に回ってきたんだが、そこんところどうなんだ？」

「「……」」

さて、先ずは一組。
既に静寂が戻っている。もう俺の独壇場と化しているこの場は教員か雪ノ下にしか止められない。

「松永　陽祐、南　久美子。
お前らのクラスも同様に４日前には終了したと報告されてるが、どうなんだろうな？」

「えっと……」

「その報告が間違ってたとか…」

「残念だったな。
俺は報告があったクラスは全て回っている。
その中から不備を探してみたが一つも見当たらなかったぞ？おかしいよな？」

「「……」」

「お前らが放棄した仕事は？
本来委員長に回る仕事を副委員長に回り、その結果副委員長は体調を崩した。
そこのところどうなんだろうな？」

「ご、ごめんなさい…」「すみませんでした…」

さぁどんどん行こう。

「五島　大介、白石　啓子」

「「…」」

「黙ってるってことはもうわかってるんだよな？
写真展示会の報告は6日前に来てる。不備もなかった。
何故来なかった？忘れていたか？あり得ないよな？どうなんだよ？」

「すみません…」「…すみません」

「お前らの仕事は比企谷が担当してくれました」

俺は比企ヶ谷の肩に手を置いてそう言った。

「少なくとも、今比企谷の説明に反論唱えた奴等全員が、今日までサボっていたことは確認している。それともこれが、仕事を他に丸投げすることが、委員長言うところのともに助け合うってことなんですかね？犠牲になりまくってて分かんないんですけど」

俺は相模に目線を向ける。
相模は既に顔を伏せており、誰も喋ろうとしていない。
俺は雪ノ下に目で合図し、次に進めるように頼む。

「……二人の案は却下します。
この議題は明日に回し、改めて全員で出し会うことにします。
鳴滝君、タイムスケジュールを」

「学園祭当日まで残り5日。
各自作業に取りかかり、前日に全員参加で行えばギリギリで間に合

うであろうと考えています。
今現在では途方もない量ですが、一人ででも間に合わせて見せます」

一人ででも、と言う部分を強調して言う。

「それでは相模さん。…相模さん」

「っは……じゃ、じゃあ今日は解散します…お疲れさまでした」

相模の声にちらほらと立ち上がって会議室から出ていく生徒たち。
俺は直ぐ様パソコンを開いて作業を開始した。

「無茶をしたな鳴滝…」

いつのまにか前に平塚先生が立っていた。

「平塚先生…ま、これが焚き付けになればそれでいいです。
誤解なんぞはただの装飾品。そのうち掠れて消えていくでしょう」

「比企谷と共闘するとは思わなかったがな」

「それは違います。
鳴滝とはたまたま意見が合っただけで共闘ではありません」

話を振られた比企谷は、顔をそらしながらそう言った。

「そうだったのか!?俺結構楽しかったんだけど…」

「楽しいって何だよ…相模のライフはゼロ通り越してマイナスだったぞ」

「俺の怒りはそれぐらいだったってことだ」

俺は笑いながらパソコンに目を落とした。

まぁこうした場合の展開なんぞ虐め生活からでも結構分かるからな。

妨害に警戒するようにしておこう。

こうして俺はその日一日を終えた。

基本的に俺が使うのはパソコンなので、バックアップを取っていて正解だった。

翌日、パソコンを着けたらフロッピーディスクが抜かれており、溜め息を付きながらバックアップを取っておいたＵＳＢをセットするのだった。

最終日前日。

スローガンも無事に決まり、欠けることなく全員が集まった。
その日一日は慌ただしく、ホームページのテストアップにスローガンの入れ込み、機材の最終調整など、兎に角忙しかった。

俺はといえば比企谷と隣り合って雑務をこなしていた。

「そっちは終わったか？」

「もう少しかかる。
正確にはあと８行半」

「近隣報告の紙ってどこいった？」

「それなら雪ノ下に渡してある」

「ボランティア参加者の名簿は？」

「今終わった」

「「「……」」」

流れるように作業する俺と比企谷を見て、周りは唖然とするが構っている暇はない。
数字に表して約９４％が終わっており、かといって残りの６％がすぐ終わると言うわけでもない。

「やぁやぁ、頑張っているかね？」

「邪魔するなら消え去ってください」

「……」

暫くして雪ノ下姉がやって来た。
俺はそれを足蹴にして追い払う。

「比企谷くぅん…」

「俺には何とも言えないです」

雪ノ下姉は比企谷にヘルプを頼むが、あっさりと流されて立ち尽くす。

「雪乃ちゃんを助けてくれてありがとう」

「……別に。
俺は相模がムカついただけですから」

「それでもだよ。
今のあの子は憑き物が無くなったみたいに動いてる」

「雪ノ下自身に思うことがあったんでしょう。
個人的にはそれでよかったと思いますけどね」

「…うん。

君に頼んで本当に良かったと思うよ」

頼んだ……？

俺はこの人から何かを頼まれたような記憶は一切ない。

だとすれば……！

「もしかして平塚先生の依頼は――」

「お姉さん、勘の良いガキは嫌いよ？」

そう言って俺の唇に指を当てる雪ノ下姉。

その瞬間、隣からドサッと重苦しい音が聞こえて思わず振り向いた。

「補助員、仕事をしなさい。

スローガン決定に伴う書類の製作、議事録、それから各団体へのスローガンの通達メールを送っておいて。それと今回にかかる費用の予想段階とその用途を纏めておいて。休んでいる暇は無いわ」

何故か冷たい目で俺を見下ろす雪ノ下が立っていた。

何処か不機嫌に感じるのは気のせいではないはずだ。

「あらあら雪乃ちゃん、もしかして――」

「姉さんは帰って。

それが嫌なら手伝いなさい」

「……ふふっ。はーい」

そう言って去っていく雪ノ下姉……陽乃さん。

「なぁ、会計って聞こえたが会計はどこいった？」

「それなら相模さんの付き添いで体育館へと向かったわ。客席の設置が間に合わないから手伝う、と」

……逃げたな。

「取り合えず費用の関係は全て終わっている。平塚先生に引き継いであるから必要なら取りに行ってくれ」

「そ、そう。早いのね」

「作業開始から残業２３時間は伊達じゃないってことだな」

「２３時間……お前労働基準もへったくれもないな」

「俺は体調を崩したことはないからな。睡眠時間だって３時間あれば余裕だ」

「……人間か？」

「見ればわかるだろ。息をして二酸化炭素増加させる所なんかは立派な人間だろう」

「それ以外は人間じゃないように聞こえるのだけど…」

こうして一日は過ぎていく。

慌ただしい日常はあと数日で終わりを迎える今日この頃、雪ノ下や比企谷との繋がりに少し強みを感じた日だった。

祭の賑わいと解ける緊張

緊張と言うものをご存知だろうか？

緊張とは、世間一般では大切な場面などで身体が硬直するように行動に制限がつく様な状態を指している。

しかし、緊張と言う言葉には数種類の意味があるのだ。

1つは心やからだが引き締まること。慣れない物事などに直面して、心が張りつめてからだがかたくなること。

これは今挙げられたような事である。

続いて2つ目は相互の関係が悪くなり、争いの起こりそうな状態であること。

これは他にも緊迫と言う言葉が当てはまるが、今はおいておこう。

3つ目、　生理学に置いて、筋肉や腱（けん）が一定の収縮状態を持続していること。

よく足が吊った等と言う単語が使われる事に対し、これが当てはまる。

そして4つ目。　心理学に置いて、ある行動への準備や、これから起こる現象・状況などを待ち受ける心の状態。

何かの現象や予想に心構えを持ち、常に警戒を怠らないようにする状態を指している。

私が言いたいのは正にこの事なのである。

常日頃から緊張して動き、対処や対応を怠らずに過ごして来た私は、長い間緊張を解いたことはないのである。

もしも緊張を解いたのなら。　私はどのような結果をもたらすのだろうか？

『開演三分前、開演三分前』

総武高校講堂。
全校生徒が集まる中、世話しなく動く学園祭実行委員。
比企谷から報告の伝令が届く。

『雪ノ下です。各員に通達。
オンタイムで進行します。問題があれば即時発報を』

インカムから雪ノ下の指示がくる。
俺自身には特に役割はないため、舞台袖から観客席の方へと視線を移した。
会場は生徒で溢れ帰り、談笑する者、パンフレットを読む者と言った感じに待ちわびている空気が流れている。
今回で間に合った事に少なからず達成感を持つ俺だが、気を抜けるのは学園祭が終わったあとであると気を引き締め直す。

『開演１０秒前。９・８・７・６・５・４・３・２・１…』

『お前ら！文化してるかー！』

おおおおおおおー――！

『千葉の名物、踊りと～』

祭りー―！

『同じアホなら踊ろにゃあ！！』

ｔｈｉｎｇ　ａ　ｓｏｎｇ！！

よし。開始は上々。

幸先の良いスタートだと言えるだろう。

後は挨拶関連の事項だが、練習してきたかどうかも怪しい相模がしっかり出来るかどうかにもよるが…無理だな。

『それでは、文化祭実行委員長より、ご挨拶です』

城廻先輩による司会進行に従い、相模がステージ中央へと歩いていく。

その表情は見るに耐えないほど緊張を示しており、冷や汗をかき、小刻みに震え、、思考回路の制限を掛けている。

『み――――――』

キィィン…と、マイクが反響を起こして相模の第一声を中断させる。
とことん運のないあの女に同情などは一切しないが、この分だとこいつの後に控えているスケジューリングを改正する必要が出てくる。

『比企谷君、巻くように指示を出して』

『さっきから出してる。緊張だかで見えてないみたいだが』

『そう、私の人選ミスかしらね』

『おい、それは俺の存在感の無さを揶揄してんのか！』

『誰もそんなこと言ってないわ。
それよりどこにいるの？客席？』

『めっちゃ揶揄してんじゃねぇか！て言うか見えてんだろお前……』

こいつらは何をしてんだ？楽しそうで俺も混ぜてほしいんだけど。

『以降、スケジュールを繰り上げます。
各員は相模さんのフォローをお願いします』

こんなときになっても相模に自立を促す…俺には到底出来ない真似だな…。雪ノ下のそう言うところは、素直に学ぶべきなのかもしれないが…ないな。

「今日はお集まりいただきありがとうございます」

講堂裏。そこに集まった１０名ほどのボランティアの人達に挨拶をするべく、俺は声を張り上げる。

「事後報告で申し訳ありませんが、祭りを楽しんでいる人の中でひたすら活動など、疎外感剥き出しで詰まらないでしょう。なので、皆さんは祭りを楽しんでいただき、その過程でゴミ拾いなどを行っていただければ十分です」

本来ならこう言うことは許されないだろう。

しかし今回集まったのは全員が顔見知りで信頼感系だって気づけている。皆絶対にやってくれると確信しているのだから、これくらいの妥協は許されるはずだ。

「九十九ちゃん、ゴミはどうするかね？」

「各階に三ヶ所のゴミ袋が設置されています。足りなくなった場合、または満帆になった場合は会議室が用途の場所になりますのでそちらへ行っていただければ大丈夫です」

「いやぁ、こりゃ前回より盛り上がりそうだねぇ」

「ありがとうございます。

それでは各自、楽しんでください。お願いします！」

よし、これでボランティアの動きは問題ないはずだ。
あとはクラスの見回りと確認と時間調整だけだ。
先ずは校庭に行ってみるか……。

「よう。雪ノ下」

見回り中、偶然ながら雪ノ下の姿を見かけて声をかける。

「鳴滝君…そろそろエンディングセレモニーの最終打ち合わせが始まるわ。
講堂に向かってちょうだい」

「ああ。これから向かうさ」

雪ノ下の言葉を肯定で返して歩き出そうとしたとき、俺達の隣を走っていく二人の女子がいた。

「ほら！早くしないと終わっちゃうって！」
「待ってよぉー！」

「……何だ？」

「行けば分かるわよ」

そう言って先頭を歩き出す雪ノ下。俺は理解できずに雪ノ下についていくのだった。

講堂二階エントランスホール。

そこから見える風景は、講堂全体を見渡せるほどであり、講堂にいる全ての視線はステージへと釘付けになっている。

理由は簡単。ステージには陽乃さんが指揮者として立ち、その指揮棒を振りかざすことで演奏が始まった。

「…へぇ」

「…流石だわ」

ステージに立った陽乃さんは、指揮者ながらにその存在感を溢れさせ、その腕の動きひとつひとつに神経が行き渡っていた。

「流石…ね。

意外と言えば意外だな。雪ノ下が人を誉めるなんてのは」

「そう?これでも私は姉さんを相等高く評価しているのよ。

私も……いずれああなりたいと思っていたから」

…そうか…。…そうだったのか。
今まで雪ノ下が追っていた背中はあの人の物で…比較される世間体や価値観に苛まれて、歪みながらも追い続けることを諦めずに完璧であろうとした。
だからこそなのだろうか？雪ノ下は――

「ならなくて良いだろ。そんな物…」

「……え？」

「対抗心や憧れを持つことに遺憾を唱えるつもりはないが、そうしてしまった時点で勝負は既についてしまっている。
他人の価値観や比較に左右されて自分を作り上げるなんざ愚か者のすることだ。
その人物はその人物のやり方や理念がある。そうした物を見つける方が余程有意義だし、確実だろう」

「…負け……」

「誰かになろうとしている時点で、負けを認めているような物なのさ。例え自分がそう認めていなくても、卓越した考えを持つ人間ならば直ぐに気づく……比企谷とかな」

「……そうね。
……私は負ける気はないわ。私は私のやり方で、私のあり方を見つける。姉さんなんて追加点でしかないもの」

こいつは……負けず嫌いと言うかなんと言うか…。
ん？

ふと、雪ノ下の後ろに一人の実行委員が表れ、耳打ちで連絡を伝えていた。
雪ノ下は目を見開き、驚愕を露にした。

「どうかしたのか？」

「…今すぐ舞台袖に向かいましょう。相模さんがいなくなったそうよ」

「…了解した。直ぐに向かう」

俺達は話しを打ちきって講堂の舞台袖へと向かった。

「遅れたか？」

講堂に到着し、すぐさま舞台袖へと向かった。

そこには平塚先生を始め、城廻先輩達文化祭実行委員が勢揃いしていた。

「問題ない。それよりも…」

「相模が居ないんだろう?とうとうやらかしやがったか」

予想はしていたのだが、やると思っていた分焦りは出てこない。

「携帯電話も繋がらなくて…」

「参ったわね…このままだとエンディングセレモニーが出来ない…」

「最悪代役を…」

「それは難しいと思います。最後の挨拶や総評は何とかなったとしても、優秀賞と地域賞の投票結果を知っているのは相模さんだけですから…」

雪ノ下は顎に手を当ててそう言った。

「それなら投票結果をでっち上げれば良い。どうせ投票数は公表しないんだし」

「その必要は無いぞ」

俺は比企谷の言葉を遮って言う。こんな時のために対処しておいて

正解だった。

「投票結果なら俺が知っている」

「どうして知っているの？あの用紙は一枚しかないはずだし、相模さんに一任された筈なのに…」

「チラ見しただけだ。アイツが見ているのを後ろから確認しただけ。今の今まで職務放棄をしてきた人間を信用できないからな」

「……では代役を雪ノ下に頼む。その後の進行は城廻と合同で行ってくれ」

平塚先生の言葉に全員が頷く。

「どうかした？」

不意に、舞台袖に現れた葉山が会話に入ってきた。

「何でもねぇよクソッタレ。
さっさと準備してステージ上がれ」

「お前には聞いてないよ。雪ノ下さん、どうかした？」

「……ちっ。

比企谷、とりあえずあの女を探す。ふたてに別れて散策し、時間ギリギリで連絡を取り合おう」

「わかった」

俺と比企谷は外へと向かう。このままだと葉山が介入するのは目に見えて分かる。そうなる前に見つけ出せれば良いが…。

「……さて、何処にいるかね？」

俺は比企谷と別れ、三階の廊下にいた。ああいう奴が行きそうな場所なんてのは少数に限られてくるわけだが、時間のない今、そんなに回ってもいられない。

「あれ？九十九？」

「沙紀さん…そうだ。沙紀さんは一人になりたいとき、何処か適応した場所ってある？」

ふと声の聞こえた方を振り替えると沙紀さんが立っていた。

「どうしたの急に……そうだね、特別棟の屋上かな。彼処人気ないから」

特別棟…時間も間に合うな。

「ありがとう！」

「あ、ちょ！」

俺は走り出した。

もしかしたら比企谷も向かっているだろうが、そこに葉山がいれば連れ戻すことは必至。そうなればアイツは反省もしなければ失敗も思わないだろう。

ただ楽をして、その場を乗りきってしまうのは俺達の努力を皆無にしてしまうのはわかりきっている。

「間に合ってくれよ！」

そう吐き捨てて、俺は全力で階段を掛け上がるのだった。

「――お――――だろ――――！」

バタンッ！

俺は目的の場所へ到着し、勢いよく扉を開けた。
そこには予想通り、相模がおり、その他戦力外な実行委員二人がいた。
そこから目線を左に向ければ、葉山が比企谷の胸ぐらを掴んで壁に押し付けていた。

「んのやろぉ！！」

それを見た瞬間に葉山の顔面に右ストレートを撃ち込んで比企谷から引き離した。

「葉山君！」
「葉山君大丈夫？！」

戦力外の女子二人が倒れた葉山に掛けよって抱き起こした。
俺の方を睨み付け、「何しやがんだこの野郎」と目で訴えてくる。

「時間がない」

俺は懐から一枚の紙を取り出して読み上げた。

「今この時をもって相模を実行委員長の座から解任。
副委員長、雪ノ下を委員長とし、この後の学園祭進行を行うものとする。以上」

「……は？何、それ…」

「比企谷、雪ノ下に連絡を。集計結果は既に伝えてあるから大丈夫だ」

「了解……雪ノ下か？――」

相模の言葉を無視して比企谷に雪ノ下へ連絡を回すように言う。

比企谷は直ぐに行動してくれた。

「何なのよそれはぁ！？」

「業務連絡だよ。分からねぇか？

お前が散々に職務放棄してくれておかげで、今年の文化祭は前年度より大幅に忙しくなってしまった。それらのことを踏まえ、教員及び実行委員の承認のもと、こう言った緊急時の対応として用意された解決策だ」

俺は相模に紙を見せびらかしてそう言った。

「知らない…ウチそんなの知らない！」

「残念ながらその返答は許されない。

これは承諾されるもとしてされた立派な書類だ。今更覆すなんてことは絶対に不可能なんだよ」

「鳴滝、報告終わったぞ。これから閉会式を行うそうだ」

「ん、了解だ」

俺は紙を折り畳んで懐へ仕舞う。
そして扉へ手を掛けようとしたところで葉山が怒鳴った。

「何でだ！相模さんを連れ戻しに来たんじゃないのか！」

「誰がそんなことを言った？
誰かさんの携帯に連絡が付かなかったから直接言うために仕方なく探したまでだ。連れ戻そうなんて微塵にも考えてなかったな」

「お前ぇ…！」

「残念ながら今の書類には元実行委員長の承認だって押されている。既に決まったことを一々言わないでくれるか？」

「ウチそんなのに判子なんて押してない！」

「委任しただろ？雪ノ下に……」

「え……あ…」

「じゃあな」

俺と比企谷はその場を後にする。
残された四人は何も言わずにその場に立ち尽くすのみだった。

「流石に疲れたな…」

無事、学園祭は終了を迎えた。
雪ノ下は委員長としてその後のエンディングセレモニーを仕うし、挨拶までもを完璧にこなした。

「ううっ……う～…」

「大丈夫？」
「アイツが変なこと言わなければちゃんと出来たのに…」

方付けの最中、何故かまだ残っていた相模と取り巻き二人が傷を嘗め合うように慰めていた。

「あの二人マジヒデェからー！夏休みん時も、葉山君殴って笑ってたしー！」

「殴られたのか葉山！先生に言った方が良いんじゃないのか！」

「……良いんだ。彼らにも悪いところはあるだろうしね」

例の葉山の集団も、事後報告の様に口々に俺と比企谷の誹謗中傷を言い始めた。

ふと見れば由比ヶ浜や沙紀さん、戸塚が俺と比企谷を労うように見ているのに気づいた。

目線が会うと暫くして歩いていってしまい、どうやら気にするなと、そう言っているように感じたのは気のせいではないだろう。

「ひゃっはろー！」

後ろからは陽乃さんと平塚先生が歩いてきた。

「いやー、二人とも最高だねぇ！皆から聞いちゃったよその活躍ぶり！」

「活躍も何も、危機管理の範囲内です。予想をたてるのは比較的簡単でしたから」

俺は方付けをしながら陽乃さんの言葉に返事を返した。

「私的には結構好きだよそう言うやり方は。ね、静ちゃん」

陽乃さんは平塚先生の肩を叩いたあと、一人で去っていった。

「はぁ…結果的には君達の尽力は多大な物だった。だが、葉山を殴ったと言うのはちょっとな…」

平塚先生は俺の肩に手をおいてそう言った。

まぁやはりと言うか、噂が流れるのは早い。このまま行けば俺が不良であると言う噂は事実として学校中に広まることは間違いないだろう。本当に今更だが。

「次からは気を付けろよ、比企谷」

「ちょ！おい！何で俺がやったことになってんの！殴ったのお前だろ！」

「直ぐ様反応してくれる比企谷はとても頼もしいぜ。ま、アイツは殴られて当然の男ですから。その事については反省も後悔もしてません」

「そうか。何にせよ学園祭も終わりだ。片付けが済み次第、体を休めたまえ」

平塚先生は片手を上げて去っていった。

何かを察してくれる人ってのは大きく貴重だと言えるし、無くしたくないものだと思う。

俺は引き続き、片付け作業に戻るのだった。

ガラッ
俺と比企谷は奉仕部の部室へと赴いていた。

「あら、ようこそ。
校内一の嫌われ者と恐怖の権化さん」

入室して早々に雪ノ下がそう言ってきた。
久しぶりになる雪ノ下の饒舌に少しホッとしたのは内緒である。

「喧嘩売ってんのか」

「不本意ではあるが、受け入れておこう」

俺達は席に座る。

「打ち上げはどうしたの?行かないの?」

「事後処理の用紙が数枚残ってるからな。それを仕上げてから帰ることにしてる」

「わかりきったことを聞くな。絶対に行かねぇよ」

「どう？本格的に畏怖されるようになった感想は？」

「そうだな…存在を認められるってのは良いものだな」

「右に同じ」

どうやら俺の感想は比企谷と同じらしい。

「驚くべきか呆れるべきか…貴方達ははっぱり変ね。
その弱さを肯定してしまう部分、嫌いではないけれど」

「おお。俺も嫌いじゃねぇんだ。むしろ大好きだね。こんな自分が」

「弱さってのが完全に悪と言うわけではないからな。寧ろ、俺は弱いままでいたいね」

逆に言えば、弱い奴が強いやつに敵わない謂われも無いのだ。様は気の持ち方、考え方で人は強くなったり弱くなったりするのである。

「んで？お前はここで何やってんの？」

「進路希望表を書いているのよ。実行委員で忙しくて中々書く時間がなかったから。それに、誰かさんに今までの考えを覆されてしまったから」

「誰かさんって誰だよ」

「内緒よ…ふふっ」

「内緒ねぇ…。由比ヶ浜辺りか？他には…平塚先生とか、陽乃さん辺りも妥当な線だよな」

「…はぁ」

「……んだよ？」

いきなりため息を吐かれた。

別に変なこと言った覚えはないんだけど。

「…なぁ、二人とも」

「ん？」「何かしら」

突然、比企谷が歯切れ悪く言葉を紡ぐ。その顔は何処か言いづらいことを口にするかのようで……

「俺とｔ――」

「ごめんなさいそれは無理」

「くっ！最後まで言ってねぇだろ！」

比企谷の言葉を遮って雪ノ下がそう言った。何を言おうとしたのかは分からなかったが、その雰囲気が俺には大変心地良い。

「くく…なぁ比企谷」

「んだよ」

俺はクスクスと笑いながらも比企谷に目線を合わせる。これから言うことは俺の口から初めて出る言葉で、それでいて儚く脆い言葉でもある。

「よかったら、俺と友達になってくれねぇか？」

「ぁ――――――」

比企谷は目を見開く。

信じられないものを、あり得ないものを見て、感じたかの様に俺を見て、比企谷は硬直するのだった。

「…駄目だったか？」

「あ、いや……別に、良いぞ」

「ん」

良かった。

これで比企谷に断られていたら数日間引きこもっていた自信がある。

「雪ノ下は良いのかよ？」

「へ？ああ。雪ノ下は由比ヶ浜の誕生日の買い物の時に「鳴滝君」……はい」

「それ以上の言葉を繋げるのなら…私にも考えがあるわ」

怖かった。

何時もは凛とした目をしている雪ノ下の瞳には「それ以上言うな」と示されており、何時ものような凛ではなく冷…もっと言えば極寒のごとき冷たさが伺えた。

「（お前何かしたのか？」

「（いや、覚えがない…」

雪ノ下の恐ろしさを比企谷と二人、小声で話し合う俺達だった。

ガラッ

「ぃやっはろー！」

扉が開き、入ってきたのは由比ヶ浜。

「文化祭御疲れー！と言うことで後夜祭に行こー！」

「行かない」「行かねぇ」「帰る」

三人の同意件。
由比ヶ浜の誘いを即答で切り捨て、黙々と字を連ねる。

「んで？その後夜祭って何？」

「知らないで断ったの！？後夜祭って言うのは…えーっと、その…打ち上げの大きいやつ的な？」

「お前もよく知らないのかよ」

一気に騒がしくなる部室。
あれだけ気まずい雰囲気が流れていたのに、何事もなかったかの様に集まった奉仕部のメンバー。
誰一人欠けることもなく、誰一人嫌がらない。
そんな何時もと同じようなこの時間が、俺にはかけがえのないものの様に思える。

「これで…守れ……だ…な」

そんな気持ちが溢れ帰り、今まで張ってきた緊張が全て解け、俺は――――

ドサッ

「ちょ、鳴滝！？」

「鳴滝君！どうしたの！？」

「ツクモン！そうだ！先生！」

おかしいな…床が真横にある…三人は慌ててるし、どうしたんだ？あー、眠い……明日は振替休日だし……のんびりすごそうかなぁ……。

「どうした！」

「先生！ツクモンが！」

更に騒がしくなる周りを気にせず、俺の意識は完全に遠退いていった。

嫌悪な空気をお届け

修羅場。

とある男子に複数の女子が重なりあうことを指す言葉である。

こうなった場合の大半は男子が悪く、故意であろうがなかろうが責任を取らされるのが定石なのだ。

そうなってしまう事の原因としては、勘違い、見解の相違、女囲い思想等が上げられる。

特に酷いのが女囲い思想である。

女囲い（にょがこ）。別名ハーレム願望。

一人の男子が複数の女子にアプローチを掛ける事を指す。

現代日本での結婚制度は一夫一妻制であるのに対して一夫多妻等が認められるはずもない。

もしもそんな思考を持った輩が居るのなら、そいつは腐っているとしか言いようがないだろう。

仮に一夫多妻が認められた世の中だとしたのなら、結婚できない男性が続出し、絶望的な世の中に様変わりを果たすことは間違いない。

でなければ世紀末と同意義である。

……話が剃れたようだ。

兎に角私が言いたいのは、今目の前で起こっている現状に覚えがないと言うことである。

「アンタは家に帰ってなよ。後は私がやるから」

そう言った少女は河崎沙紀さん。

青みがかかったら白髪を持ち、スタイルもよくて家族思いな綺麗な女性。

「あら、それこそ帰らなくてはいけないのはそちらの方ではなくて？家族がいるのだから、彼の介抱は私に任せて」

片やもう一方の少女は雪ノ下雪乃。

しなやかな黒髪を持ち、スタイルこそ劣るものの、清楚な顔立ちとその立ちずまいは見るものを魅了する素養の持ち主である。

……さて、現実逃避はもうやめようか。

取り合えずどうしてこんな状況になったのかを説明しようと思う。

昨日、俺は学園祭終了後、部室にて気絶した。

今まで身体を行使し続けてきたせいか、張り巡らせていた緊張が溶けたとたんに倒れたのだ。

その後、病院まで搬送されて診断。結果は「過労」であった。

しかしそこまで酷いものではなかったらしく、検査入院と言うことで話はついたかと思われた。
そこで出てくるのが入院費用である。
俺の気持ちを酌んでくれたのか、平塚先生は俺の家まで運んでくれたらしい。
それから2日間、眠り続けた俺は3日目の昼過ぎに目を覚ました。

学園祭から既に日にちが経っていることを知った俺は、急いで学校へ連絡し、バイト先にも報告を入れた。そしてじっとしていることも出来ず、バイトに行こうかと思ったところで来訪者が現れたのだ。

"ピンポーン"

鳴り響くインターホン。
恐らく奉仕部の人間だろうと予想をたて、構っている暇はないと自己完結してスルー。
そして下から「はーい」と言う陽菜の声が。

「ちょっ！待て、出るな！」

そう言ったのも遅く、既に客人は家の中へと招かれていた。
俺は急いで部屋の窓から脱出を試みたのだが、
「病み上がりが何処へ行こうと言うのかしら？」と、雪ノ下が極寒の目で俺を見つめていた。
時は既に遅かったのだ。

その後、どうして逃げようとしたのかと聞かれ、じっとしているの

も何だからバイトに行こうとした。
と良いわけをした。……まぁ、散々罵倒されたのだが。
更にそこへ来訪者が訪れ、雪ノ下と目があった瞬間に冒頭へと戻る状態となったのだ。
因みに陽菜は逃げた。
「小町ちゃんと遊んで来ますね！」と言って逃げていった。
俺も連れていってほしいと切実に願ったのはおかしくないはずだろう。

「取り合えず二人とも。お見舞いに来てくれたのは嬉しいし、ありがたいと思う。
先ずは穏便に話をしようじゃないか」

…なんだろう。浮気のばれた夫の心境になってきた。

「鳴滝君。私は常に冷静を保っているわ。
むしろこちらの彼女が事を荒げていると思うのだけど」

「は？私から見るにアンタが冷静を保ちながら挑発してるように思うんだけど？」

「「…は？」」

何なのこれ？もうヤバイよ…！
会話に混ざるどころか阻害されて二人だけのバトル空間作りはじめてらっしゃる。
どうやって収拾つけるか分からんのですが…こんなとき誰か仲裁に

は入れる勇者が居ないものか……！

「ちぃーす…失礼しました」

「まてまてまてまてまてまてぇ！！」

突如現れたのは先日出来たばかりの友人、比企谷八幡だった。

比企谷は俺達を目視した瞬間に踵を返して帰ろうとしやがる。

「（お願い助けてマジで一生のお願い！」

俺は比企谷の足を掴み、小声で頼み込む。

「（バッカお前、こんな殺伐とした空気に自ら飛び込めって言うのか？

何処の自殺志願者だよ」

「（助けてくれよ！見舞い序でに！」

「（見舞いよりもこっちがメインだろ！俺には荷が重すぎる！」

あーでもない、こーでもない。

「鳴滝君。私はそろそろ帰ろうかと思うのだけど、良いかしら？」

比企谷と言い合ってしばらく、雪ノ下がそう進言してくる。

「へ？あ、ああ。分かった」

「九十九。私も今日は帰るよ。またバイト先でね」

どうやら沙紀さんも帰るようだ。

「そ、そう？分かった。またね」

もう何が何やら。

俺は流されるままに二人を見送った。

帰り際でさえも二人はお互いに視線でバチバチと牽制しあっており、はっきり言ってあの空気から解放されることを喜んだ俺は悪くない。

「なぁ、鳴滝……」

「何だ比企谷……」

再び居間に戻り、比企谷と対面して座る。

比企谷が話を切り出し、俺もそれに答えるべく返した。

「お前何したんだよ」

「何にもしてない……筈だ」

そもそもあの二人は見舞いに来ただけのはずで、誰が出会った瞬間に牽制しあうのかが分からない。

仲が悪いのか、はたまた別のことがあったのか。

まぁ知ることはできないのがむず痒いな。

「まぁこれ以上は触れないでおこう。
それで、明日からは来れそうなのか？」

「ん？ああ。体の調子は好調を通り越して絶好調だ。
前よりも軽くなった気分だ」

「ならいい。お前が居ないと何故か部室の空気が重いんだ」

空気が重い？険悪ってことか？

「明日からはしっかり行く。心配ない」

「それなら良いんだ。じゃあな」

そう言って帰っていった比企谷。
取り合えず学校に行くのは問題ないだろう。
しかし気がかりなのがあの女の件。実行委員の邪魔をされたなどとのたうち回れば確実に負けるのは俺の方だろう。
となれば俺は責任をとって退学や謹慎処分が下される。

「また忙しくなるな…」

そう呟きながらも、俺は明日の準備を始め、それと平行して対応を考えるのだった。

紫って色言葉で成仏って言うらしいよ？

人の噂も７５日と言う言葉がある。
一度噂された事柄も、７５日も経てば収まりを迎えることの例えなのだが、それは時と場合によるのではないのかと、訂正の辞を唱えたいところである。
そもそも誰が言い出したのか、噂とは酷く曖昧なものであり、噂の対象となる人物が善であるか、悪であるかによってその度合いが変わってくるのだ。
諸君は伝言ゲームなるものをご存じのはずだ。
噂も同じようなもの…いや、それよりも酷いものである。
伝えられていく伝言が広まるのをそのままに、対象の評価を基準として最初とはまるで違うものへと姿を変容させる。
それはまるで悪意、もっと言えば呪いの如く、さも当然のように広がっていくのだ。
不幸の手紙やチェーンメールも同様である。
過去、依頼としてやって来た件も、葉山と言う防壁があったからこそ、そこまでの大事にはならなかった。もしもその防壁が無かった場合は、最悪な展開を迎えていただろう事が伺えるのだ。
故に、噂を消すなど出来ることではなく、強いて言える解決法は諦めることであると呈示できる。
一度広まってしまった噂を消すことなど、その噂を知ってしまった全ファクターの記憶を消す他ないのである。
雪ノ下が言ったように、これ以上の被害が出ないようにするためには、根本を断絶することは必然と有するのだろう。
しかし我々にそんな時間はあり得ない。

今を生きる者にとって、時間とは大切なものなのだ。

だからこそ言おう。

下らないことに時間を消費する愚かな者達よ、爆散しろ。

雪ノ下達が家に来た日から二日ほどたって、漸く俺は学校へ登校した。

教室に入れば先程まであったはずの喧騒が一瞬で静まり返り、あちこちでこそこそと話し声が聞こえる始末だ。

どうやら学園祭の俺の行動が噂になっているらしく、その殆んどが悪いもので持ちきりのようだった。

俺は席に付くとそのまま机に打つ伏せになり、取り敢えず耳を済ませる。

そして聞こえてくるのは俺への誹謗中傷な言葉の数々。

やれ、もう来たのか。

もっと倒れていればよかったのに。

南かわいそう等々。

正しくあの時の現状を知らない者達が囁く滑降の話題だった。

「鳴滝」

「比企谷か、おはよう」

名前を呼ばれ、顔をあげると最近友人関係となった比企谷八幡が立っていた。

噂される事柄には、勿論比企谷の内容も含まれているはずだ。なのに比企谷は構わずに話をしようとやって来てくれる。この事に微かな暖かみを感じながらも、これからどうしようかと思考に潜り込むことにするのだった。

「さて、どうしようかしらね…」

「うん…」

放課後の部室にて、雪ノ下と由比ヶ浜がそう言う。二人は机に置かれたパソコンの画面を訝しげに見ていた。

「正直、俺が入っていることが知れ渡っている部活動に以来が来ることが信じられん」

俺が部室に来たときは二人して称賛してくれたものだが、パソコンが知らせたメール到着音にその鳴りを納めて画面とにらめっこな状態なのだ。

因みにその内容とは、平塚先生からの通達で新たに加わった活動内

容であるメールシステム。
その名も「千葉県横断お悩み相談メール」である。
と言っても、本学校における生徒からの悩み相談しか来ない辺り、千葉県を横断する意味が分からないのは気にしない方向でいきたい。

「体育祭を盛り上げるためのアイデアを募集しています。
それと、最後なので絶対に勝ちたいです」

「あぁ…もうそんな時期か…」

「嫌だだったわよね…クラス対抗リレー…」

「あの謎のプレッシャーな」

「私、あんま足早くなかったから辛かったなぁ…」

「そうそう、居るんだよなぁ…クラスメイトが抜かれると舌打ちして、マジギレするサッカー部の長山」

「それ誰！？何で個人名！？」

そもそも俺は参加事態させて貰えなかったから何とも言えんのだが。
しかし、何処にでもあるんだなぁ、そう言うのは。

「あと、バトンを受けとるのを嫌がる女子な。
何でわざわざ俺の前で『マジあり得ないんだけど』とか言うの？ツンデレ？」

「いやぁ…それはぁ…」

「自分で分かっているだろうから言明はあえて避けるけど、女子が嫌がっていることの大半はかなりの確率で本気よ」

「言明したるじゃねぇか。言明の意味調べとけよ」

まぁそもそもそんな事態になる機会すら来ないんだけどな。

「ところで、鳴滝君は何故先程から黙っているのかしら？」

「会話に着いていけないからだよ」

「どうして？貴方も学校の生徒なら意見などがあるはずでしょう？」

中々ぶっこんで来るじゃねぇかよ雪ノ下…。

そんなに俺を虐めたいのか？

「ならば思い返せ。去年の体育祭、俺が出ていた所を」

そう言うとみんな揃って考えこむ。

「……なぁ、去年何に出た？」

「私あんまり覚えてないや…」

「そうね、私もよ。で、何に出ていたの？借り物競争？」

やはり印象以前に俺のことなど眼中に無かったようだ。

まぁ目に留まるようなこと事態してなかったからな。

「出てないんだよ。この顔と噂のせいで出場停止だ」

「「「あぁ……」」」

おい、その視線は止めろ。地味に傷付く。

"コンコン"

不意に扉がノックされ、雪ノ下が入室を促す。

入ってきたのは文化祭で顔を会わせた、生徒会長である城廻先輩だった。

「えっと、奉仕部ってここでいいのかな？

体育祭のことでメールしたんだけど、返事来なかったから直接来ちゃった」

「あ、このメールの差出人…」

「あ、それ多分私！文化祭の時みたいに体育祭も盛り上げて行きたいんだぁ。

協力をお願い出来ないかな？雪ノ下さんと…確か比企谷君、だった

よね？
それと…鳴滝君も」

文化祭の時みたいに…ねぇ。
まぁそれは良いとして協力か。俺以外なら良いとしても俺が入ることで実行委員会の評価を落とすことになりかねんのだが。

「あ、由比ヶ浜です。由比ヶ浜結衣」

「由比ヶ浜さん、ね。うん！覚えたよ」

「それで、具体的に何をしたら…？」

「あ、そうそう。
みんなにお願いしたいのは男子と女子の目玉競技なんだよ」

「目玉……はぁ」

「そう言えば去年は何をしたんだったかしら？」

「そう言や記憶に残ってねぇな…」

「人は、あまりに辛い記憶は封印してしまうと言うものね」

「おい、勝手に人の記憶を黒歴史扱いするな」

「あ、あははは…でも、私もあんま覚えてないし…」

「男女それぞれの百足競争だろ。
何で参加してない俺が覚えていてお前ら覚えてねぇんだよ」
そこまで嫌だったの？考えたやつは不毛だったんだろうな。

「毎年地味なんだよね。
だから今年は派手なのやりたくてさ」
まぁこう言った行事で学校の評価が変わることは一概に間違っているとは言えない。やはり評価するのは大人が多いだろうしな。

「用件はわかりました。
それで、何時までにアイデアを出せば？」

「それなんだけど、これから運営委員の会議があるからそこに参加してもらえないかな？」

「今からですか？」
「今からかよ…」

正直帰りたいんだけど。

「あ、皆何組？うちの学校ってクラスを半分に分けるから皆の色を把握しておきたいな！」

「……赤」

「赤」

「赤……」

「……き」

「あ、ごめん…鳴滝君のだけ聞こえなかった。もう一度だけ言ってもらえるかな？」

「……紫ですよ」

瞬間。空気が凍った気がした。

「あの、紫なんてあるんですか？」

「き、聞いたこと無いんだけど…」

知るか。

俺だけそう言われたんだよ。

「と、とにかく！鳴滝君以外は皆赤組なんだし、優勝目指して頑張ろー！おぉー！」

「「「……」」」

ああ、俺は省きって訳ですか。

「お、上手く人員確保出来たようだな」

体育祭実行委員。つまるところ、文化祭実行委員で使用した会議室へと、俺達奉仕部は城廻先輩の案内の元、訪れていた。

「はい！先生の言う通りでした！」

城廻先輩は平塚先生の設問に答える。

「また先生の差し金ですか」

「私も、毎年同じ様な体育祭でいい加減飽きてきたからなぁ…面白いの期待しているよ」

教師やってるんだからそうなることも必然だろうに。

行事一つ一つにどれだけの期待とかしてんだという話だ。

「あ、遊び気分だし…」

「体育祭も平塚先生がご担当なさるんですか？」

「まぁな。
こういう仕事は若手にお鉢が回ってくるものだ。ほら私、若いから…若いから！」

そこまで若いを強調せんでも…大体年齢とか気にしてるから視野が狭まったりするんじゃないのかね？

「ところで、俺の配色についてですけど」

とりあえず聞いとかなくてはならないだろう。
俺を隔離するように仕向けられたこの仕打ちがどう言った物なのかを。

「それについては…まぁ、例によってと言うかだな…」

例によって。
つまり俺の容姿がまたもや邪魔をしてくれたと言うことに他ならない。

平塚先生は目を泳がせながら続ける。

「私としても、不参加の意見を覆そうとしたのだが……結果的に一つの種目だけと言う事に…」

「一つの種目？

つまり俺がどれに出たいかを選んでも良いと？」

「我々の中ではそう言う方面に結論付けた。
しかし、だよ鳴滝。
君の素行は素直…もっと言えば学園生活において優秀と言っても過言ではない。しかしながら学園の外は露知らずと言った状態なのだよ」

「まぁ、言いたいことはわかりますけど」

「やはり鳴滝君の獰猛な目が他者の恐怖心を煽っているわけですね」

「おいこら、俺を危険人物見たいに言うんじゃねぇ。とって食うぞ」

「ほら見なさい。貴方のその発言が既に獰猛であると結論付けているわ」

やぶ蛇でしたすみません。

「んんっ。
兎に角、今後…つまり来年に置ける行事に参加するためにも、今回の事例は絶対不可欠！つまり、君がどれだけ活躍出きるかが問題となってくるんだ！」

ばっ、と立ち上がって俺を指差す平塚先生。
人を指差しちゃダメって習わなかったんですかね？

「鳴滝の身体能力ならどれに出ても楽にこなせるでしょうに」

「そこなんだよ比企谷…どれでも優秀な成績を叩き出せる。それは言ってしまえば目立つことが抑制されてしまうのだ」

「なるほど。
だからどれか一種目に絞り、それでいて優秀な活躍が出来るかが肝になる、と」

「その通りだよ雪ノ下。
そこで鳴滝の配色に関係してくるんだ」

「…当日、最終種目で負けている方に加勢、と言う事ですか」

比企谷が少し考えた素振りを見せながら言った。

「そっか！負けてる方に入って逆転優勝しちゃえば、結構注目浴びるんだ！」

「そうね。良い考えではあるわ」

そう簡単にいく物かねぇ？
大体俺の容姿を危惧した案件なんだからその結果がどのように転ぶかなんて解らないだろ。

「兎に角。鳴滝には最後の種目…つまりこれから決める目玉競技に参加してもらう。そのためにも、面白い内容を期待しているぞ」

結局のところ、平塚先生が楽しみたいと言う事でファイナルアンサーだな。

「じゃあ城廻、会議を始めようか」

全員が揃い、其々の席へと着席する。
ホワイトボードの前にたった城廻先発は気合いのは言った様子で発声する。

「はい！
今回の議題は今年の体育祭の目玉競技についてです！
皆、じゃんじゃんアイデアを出してこぅ！意見のある人は手を挙げて！」

「はい！」
「はい、由比ヶ浜さん！」

まず最初に手をあげたのは由比ヶ浜だった。
やる気に道溢れるその顔は、率先した意見を持っている様に引き締まっている。

「部活対抗リレーとか！」

「それだと部活に入っていない生徒が出られないからなぁ…」

確かに。部活に入ってない生徒だって結構いるだろう。そうしたなかで出場出来ないと言うのは些か不毛にとれる。

「き、気を取り直して言っていこう！」

「…（スッ」

「はい、雪ノ下さん！」

次に手をあげたのは雪ノ下だった。

まぁ雪ノ下なら比較的まともな種目を挙げられそうだな。パン食い競争とか。

「オーソドックスにパン食い競争」

ほら。

「それだと模範波の意見がクレームに繋がる恐れがなぁ……」

「派閥争いそんなに深刻なのかよ…」

「いや、それも仕方がないことだと言えるだろう」

「…どう言うことだ？」

俺の一言に比企谷を含む全員が反応する。

「普段、パン何てものは簡単に食べることができる。しかし、吊り下げられてしまえば思うように食べられないだろう？」

「まぁ、手を使えないからな」

「そんな競技参加者は見に来た保護者や来賓にその無様で滑稽な姿を見てもらう事になる」

「「「「……」」」」

「その様はまさに、我々学生は社会に食べさせて貰っていると言うことを心の芯に刻み付けることを目的に用意された競技と言うことに他ならない」

「…いや、考えすぎじゃないか？」

「ツクモンのパン食い競争の印象ってそんな酷いんだ……」

「見方によってはそうとらえても仕方ないわね…」

まぁ、冗談なんだがな。

「まだまだ、意見は求めるよ！どんどん言っていこう！」

「はい！」

「はい、由比ヶ浜さん！」

「借り物競争！」

「それだと借金で苦しい生活を送っている親御さんへの配慮を考えると…」

「配慮ばかりですね」

「最近はどこも五月蝿くてなぁ…我々の力ではどうにもならんのだよ」

それ以前に現実と競技との区別がつけられないほどに苦しい生活を強いられていることが信じられんのだが。

「兎に角、もっと色々考えてみよ！
他の皆も、どんどんアイデア出していってね！」

「――――他にないですかぁー……」

先程までは元気だった城廻先輩も、段々と意気消沈。
終いには窶れた様に言葉を投げ掛けるだけとなってしまう。

「思った以上にアイデアが貧困だったわ…」

「何か言っても反対される意見の方が多いし…」

そもそもこれだけの競技に反対意見を用意している事に驚きを隠せない。
まぁ、途中から連想ゲームみたいになっているのは気にしないでおくことにしたいが…。

「先生。高校とは社会に出るための練習場所だと言う印象があります」

「ふむ、確かにそう言った意味合いは無くもないな」

「故に俺は耐久レースを提案する！」

「耐久レース？」

「そもそも社会人は常に我慢を前提としている節がある。つまり、未来を見据える行程として、我慢することを競うことでお互いを高め合うと言う事にすれば反対の意見など出るはずもないでしょう」

「確かに。出来る奴は社会に潰されるのが定石だ。さらに言えば上

司の意見を我慢して呑み、何とかして成功して見せても給料は上がらない」

「あああっ！分かるっ！分かるなぁっ！！」

「先生、そこは共感してはいけないところなのでは……」

共感したと言うことは日頃から使われていると言うことだろうか？…頼まれた仕事溜め込んでそうだけど。

「でもどうするの？このままだと決まんないし」

あれ？由比ヶ浜さん？俺の意見はスルーですかね？却下の方向ですかね？

「俺達が決めるってことがまず間違ってるんだよ」

「じゃあどうするの？」

「適材適所っていうだろ？その道のプロを呼んだ方が早い」

「それは依頼を放棄すると言うことかしら？」

「違う。ワークシェアリングだ。ジョブローテーションだ。アウトソーシングだ」

「何か分からないけど凄そう！」

「何ともまぁ、次から次へとそれらしい単語を…」

「まぁこのまま言ってもダメならそれにすがるのも良いかもしれない。建設業の二次下請けってやつだな」

と、言うわけで助っ人を呼ぶことになった。

「何で私呼ばれたん？」

「ケプコンケプコンっ！うむ、左に同じ」

「ああ、それはだな――――」

比企谷は説明を始める。

それに伴って俺達はホワイトボードを白紙に戻し、パソコンを用いて次々に出される提案を記入していく。

「なぁるほどザユニバース！話題になる競技を考えろとな？！」

「ナニが盛り上がっても良いんだよねぇ？」

「お、おう……」

「じゃあ考えてみるー！」

「義輝におっまかせー！」

何だか不安になってきた自分がいる。

「大丈夫かしら…」

「あー、うん。信じてみよう…」

こうして助っ人二人を交えた会議は進行し、その後、承諾されるのだった。

目玉競技って何か意味深…

参加することに意義がある。

近代オリンピックの父である、ピエール・ド・クーベルタン男爵が演説で取り上げ、広く知られた言葉である。

私はこの言葉を大変疎ましく思っている。

近来、この言葉は強制参加の謳い文句として誤用されているが、私はこの誤用に含まれたことがない。

まるでこの言葉が意思を持ち、恰も「貴方は例外です」と告げているように感じてしまうのだ。

何で私だけ、と。思うことは少なくはない。

人は見かけだけで判断することが大半であるが、それでもこの場合は酷いものだと異議を唱えたい。何故なら仲間はずれは嫌なのだ。

仮にそれが当たり前で、尚且つ世界の常識であるのなら、私は論争の準備も事欠かない次第である。

結論を言おう。

私は仲間外れや外見的な差別に異議を唱える！

体育祭当日。

奉仕部のメンバーは運営委員に設置されたテントにて、その日の進行様子を見ていた。

予想していた様に、各種目で憎き葉山が活躍して白組の点数を底上

げしていっている。
その為、対する赤組は何とか食らいつくように点差を縮めていくが、中々に追い付けないのが現状だ。
やはりと言うか、次第にやる気が無くなっていく赤組の面々が、女子に囲まれている葉山を見つけては睨む形で憎しみを盛り上げているようだった。

「貴方が鳴滝先輩ですね」

「ん？」

そんな中、じゃんけんに負けた俺が雪ノ下達の飲み物を買いに行こうと自販機の前に立ったとき、背後からハスキーな声が聞こえて振り返った。
見れば背の低い感じの女子が立っており、勝ち誇るような顔をしていた。

「だったら何だ」

俺は再び自販機に向き直り、指定された飲み物を買うことにする。

「いえいえ。ただ葉山先輩の妨げ足り得る人物を拝見しに来ただけですよぉ？」

葉山の妨げ…なるほど。つまりこの女もアイツの勢力と言うことか。

「そりゃご苦労だったな。

さっさと帰れよ。その葉山先輩とやらが待ってるんじゃねぇのか？」

こう言う輩とはあまりに関わらないのが吉であると俺の経験が告げている。

「もしかして嫉妬してるんですか～？怖い外見してかわいいところがあるんですね」

「可愛いねぇ…初めて言われたわ。
んで？それだけだったら早く行けよ。俺ってば結構忙しい方だから」

「じゃあ一つだけ聞きますけど、貴方は葉山先輩とどういう関係なんですか？」

何だこいつ。いきなり意味のわからん質問してきやがって。
もしかして海老名と同じ想像でも働かしてんのか？

「元虐めっ子と虐められっ子の関係だな。つーかそんなこと聞いてどうすんだよ？葉山にでも告げ口する気か？俺はそれでも構わんが」

「別に告げ口とかはしませんけど…」

「あっそ。用件はそれだけか？だったら俺は行くぞ」

俺はそれだけ言って缶を持ち、歩き出す――

「じゃあその顔の傷も葉山先輩に付けられたんですか？」

――前に足を止めた。

「てめぇ…何処かで見たのか…」

無意識に目が鋭くなる。

「ひっ……い、いえ…ネックウォーマーで隠してるから…傷でもあるのかな…と」

つまり、かまをかけられたと言うことか。

「……傷があるのはその通りだ。アイツが付けた傷じゃないがな…」

「そうですか…すみません、軽率でした」

「そう思うなら早く戻れ。もうすぐ女子競技の時間だ」

「あ、はい」

急いで戻っていく女子生徒。

何がしたかったのかは分からないが、強ち悪いやつではないのかもしれない。

そう思いながら運営委員のテントへと歩いていった。

「――遅い。何処で油を売っていたの?飲み物を買ってくると言う

簡単な作業すらまともにこなせない木偶の坊立ったのかしら？木偶の滝君」

運営委員のテント。

いざ戻ってみれば即座に罵倒が飛んでくる始末だった。

「いや、これには深い訳があってだな…」

自販機の前で売ってましたとは言えない。

正直に言うことは美徳なのかもしれないが、ここで正直に言ってしまえば更なる罵倒が飛んでくるに違いない。

嘘はあまり好きではないが、ここは身を守るために使うしかない…！

「なら、何故こんなに遅くなったのかしら？」

雪ノ下は腕を組んで冷たい目線を向けてくる。

俺の一挙動すら見逃さないと言うその目は、明らかな『疑惑』を投げ掛けている。

「せ、先生と話してたんだよ」

「あら、どの先生かしら？名前で言わなければ分からないのだけど」

「あ、あー…最近物忘れが激しくてな…忘れちゃったと言いますか…な？」

「あら、貴方の頭はそんなことすらも忘れて足舞うほどに単細胞だ

ったのね？認知症かしら？」

やばい、どんどん土坪にハマっていく……！
比企谷と由比ヶ浜は近寄らないように距離おいてるし！
仲間がピンチだぞ！助けろー！

「ほら、何かいってみなさい。
そこまでして隠そうとする理由は何かしら？」

ずい、と一歩詰め寄ってくる雪ノ下。
こうなれば最近呼んだラノベの主人公を灯影するしかねぇ……！
……確か女の子と話すときはまず服装を誉めるんだよな？

「そ、それよりもその格好は似合ってるよな！雪ノ下の可愛さを一層際立たせているし！」

「っ……そんなことで言い逃れが出来ると思ってるの？」

……ん？ちょっと揺らいだ？
もう少し続けてみるか…。

「いや、これは本心だよ雪ノ下。
確かに普段では見られない格好だが、下手なドレスとか礼装を想像するよりよっぽど綺麗だ」

「～～～っ！？？！？」

き、効いてるぞ！
よぉし！更に畳み掛けて――

「（おい鳴滝、もうやめとけ！」
「（何だ比企谷！このままだと俺は罵倒を浴びせられまくるんだぞ！回避するためには仕方ないことなんだよ！」
「（だがそのやり方は不味い！もしぼろが出たら更にひどい目に合う！」
「（しかし今更じゃないのか？！ここで引いても結局罵倒じゃないのかっ！」
「（だからひどくなる前に止めておけ！
このまま行けば女子全員を敵に回すぞ！」

女子全員を敵に？ふっ…そんなの今に始まったことじゃない。今更そんな事で俺が怯むと思っているのか？

「二人とも…」

「（兎に角、俺はまだやめるわけにはいかないんだ！」
「（よく考えろ！」

「聞こえないのかしら？」

「（考えた結果がこれなんだ！もうどうにもならない！」

「た、確かにどうにもならないな…」

急に比企谷が通常の声で話し出した。心なしか、何かに怯えているように見える。

「おい、どうしたんだ……よ…」

比企谷に問いかけようとしたところで肩を引かれる。顔だけ振り替えればビックリするほど雪ノ下だった……！

「比企谷君は…まぁ良いでしょう。でも鳴滝君、貴方はダメよ。

（――なんでだよ。比企谷も仲間に入れてあげようよ。）

先程からまぁ好き勝手に言ってくれたわね…そんなに暴言を吐かれたいなんて、自虐趣味でもあるの？痛々しいわね。

（――――そんな趣味は断じて持ち合わせていない。）

だいたいさっきの言葉で私を騙せるとでも思ったのかしら？

（――――結構動揺していたと記憶しているが？）

だとしたら笑わずにはいられないわ。貴方の頭は何時から芸人のような軽んじた内容に様変わりしたのかしら。

（――芸人の頭は脳内お花畑とでも言いたいのか？
全国の芸人に謝ってこいよ）

ついでに言えば貴方が表面上誉めてくれた服装に関してだけれど、私はこの服装を好ましく思ってないの。
これは大将を勤めるに当たって仕方なく着ているものであって、仕方なく着ているものなの。
それすらも考慮できない時点で貴方の考えが浅はかであることを示している上にどうしようもなく哀れみを誘うようで滑稽でしかないわ。
もっと付け加えるのなら、貴方が買ってきてくれた飲み物だけど、もともと次の競技の前には飲んでおきたかったものなのだけど、競技の合間に飲もうと考えていた私の予定を崩してくれた事に少なくない怒りを覚えているわ。
私の貴重な時間を潰してくれた貴方はこの事についてどう考えているのかしら？」

もう、言われたい放題である。

「確かに、俺はお前を傷つけてしまったのかもしれない。
正直に言えば俺は油売っていたことに間違いはないんだ」

「ついに認めたわね。それで？何か申し開きがあるのかしら？」

「ああ。今回は全面的に俺が悪い。特に言い訳にお前の服装を誉めてしまったことが俺としては良くないことだと思っている」

「そうね。逃げるために嘘の言葉を並べるのは愚かな行為だわ嘘滝君」

「ぐ…だ、だがその騎士甲冑が似合っていないかと言われれば俺は真っ先に似合っていると言える！何着ても似合うと言うわけではないが、普段見られない雪ノ下が見れたことは得したと言うものだろう！」

もう何言ってんのか解らなくなってきた。

大体あと数分で女子競技始まるし、討論してもしょうがないと思うんだよなぁ…。

「…そ、そうやってまた逃げるつもりなのでしょう。

同じ手を二度も使うなんて……でもまぁ、今はその嘘に騙されてあげる」

後で覚えてろっていうやつですねわかります。

「１００対１５０…この競技で私たちが勝てば３０点が加算されるわ。そして次の競技で貴方達が勝てば赤組の逆転優勝。この意味がわかるかしら？」

「イ、イエス・マム！」

わかった。わかったからその冷たい目線を止めてください雪ノ下さん……。

「ならいいわ。でも、負けたら言うことを何でも一つ聞いてもらうから」

「ナニソレコワイ」

そう言い残して入場門に歩いていく雪ノ下。

もう後がない…どうするマジで…！

「比企谷…マジで勝たなくてはならなくなった…！」

俺は比企谷の肩を掴み、頼みの綱を引き寄せる。

「怖い、怖いから分かったからまず落ち着け」

「この際何でもいい…どんな手を使ってでも勝ちを掴みとるんだ…！勝てば官軍負ければ屍…死せばもろとも…比企谷、殺るぞ！」

「おいこら待て待て！もろともって俺を巻き込む気かお前！？」

「……そんなことはない」

「その糞長い間は何だったんだ」

相手は葉山のグループが殆ど。

となれば必然的にラフプレーをしてくる可能性は否めない。と言うことはこっちも相応にラフプレー出来ちゃうことになる。

「俺の命のため、犠牲になりやがれ葉山…！」

「お前、今までで一番怖い顔してるからな…？」

比企谷。君は作戦を考えなさい。

『さぁ、体育祭もいよいよ大詰め。現在は白組が優勢、我らが葉山隼人がこれまでに多くの点を入れてくれています！』

『続いては体育祭の目玉競技、千葉市民騎馬戦！略して千葉戦だぁっ！』

アナウンスに気合いが入っているのか、盛り上がるように言葉を並べる葉山グループの馬鹿三人。聞いている限りでは葉山を誉めたいように聞こえなくもない。

グラウンドには紅白が別れるように陣形を組み、開戦の合図を待ちわびている。

緊迫した空気を出しているなか、テントの方でも似たような空気が流れていた。

「この際赤組の女子が負けてしまえばさっきの脅しは無効に…とな

れば俺は晴れて自由を勝ち取り心身共に救われることに……？」

「おい、それはそれでどうなんだよ…。
これで応援してなかったと知られればそれこそヤバイ状況に「頑張れ赤組っ！」…現金なやつだな…」

俺は死にたくないんだよ…！

〝ブォォオッ〟

『ワアァァァ！』

平塚先生が角笛らしき物を吹き、戦いの火蓋が切って落とされる。
大将騎はそれぞれに三騎。
時間切れ、もしくは大将がいなくなればその場で終了となるルールだ。
白組の大将は葉山グループの金髪と海老名、そして沙紀さん。
赤組は雪ノ下に由比ヶ浜、城廻先輩となっている。

とりあえず開戦した訳だが…

「ぶっちゃけ騎馬戦の描写が書けないのでアニメ見て想像を働かせてください」

「おいちょっと、何言ってんの！」

だって書けないんだもん…。

九十九　無双

　人間最大欲求と言うものがある。
大まかに分けてその三つは人にとって限りなく重要なものになるだろう。
その三つとは、睡眠、食欲、性欲の事なのだが、性欲については本当に必要なのかはわからない。
何せ経験がないからねっ！
とは言え、残り二つにおいては、人間が生きていくなかでも重要とされるもので、どちらかが欠けてもダメなことくらいはわかるだろう。
説明を付けるのなら、食欲は空腹を満たし、栄養を摂取すると言う点で生きることに大きく貢献している。その間、古来より言われてきた『血となり肉となる』と言う言葉は間違っていないと結論付けられる。
次に睡眠だが、個人的にはこの欲求が一番大きいと思っている。
睡眠とは、ストレスの解消に伴って疲労を回復させる事であるが、この睡眠には環境が求められるのだ。
他にも姿勢や体調によって疲労回復の幅が変わっていくこともある。
つまり、人としてもっとも大切なのは睡眠であると提示する。

『次は男子による棒倒しでーす』

アナウンスから低脳（三浦）の声が響き渡る。
テントから離れる際に雪ノ下がドヤ顔を見せつけ、俺のモチベーシ

ョンは低下を示した。
これで勝てなかったらと思うとあとが怖い。

しかしながら、これは団体の競技であるため、一個人の戦果としてはある程度言い訳に使えるのかもしれないと考えられる。
比較的『頑張りました』と言う姿勢を見せつけ、何とかして命令の幅を狭めてもらえるよう努力しよう…。

「聞けえぃ、者共！総大将の御成りであーる！」

あれやこれやと考えている最中、材木座が赤組男子の前に立って声を張り上げているのが見えた。
そんな言葉に続くように、今度は戸塚が前に出て言葉を繋げる。

「あの…えっと…赤組大将の戸塚彩夏です。皆さん、頑張りましょう！」

戸塚は声を張り上げているようだが、赤組全員に届いたかと言えばそうではない。
恐らく前列にいる数人の男子にしか聞こえていなかっただろう。

「我らが敵は！葉山隼人ただ一人！」

戸塚をフォローするかのように再び材木座が声を張り上げた。
確かにその意見は賛成できる。俺の場合は人生の敵だと断言するがな。

「あの生け簀かない糞イケメンに優勝までかっさらわれて良いのかぁ！？我は嫌だ！すっごく嫌だぁ！もうこれ以上惨めな思いはしたくなぁい！！」

……何だろう。

後半から私情が漏れまくっている気がしてならない。

とは言え、材木座の少し離れた場所に比企谷がいるのが見える。となると比企谷の作戦か何かだと考えるのが妥当なところだろう。

「話しかけられたとき、頬をひきつらせて笑いたくない！近くを通りかかったとき、急に立ち止まってそっと道を譲りたくなぁい！皆はどうだぁっ！」

『お、おぉー…』

まぁこれは葉山グループ以外の全盛とが体験していることだろう。

材木座の鬼気迫る表情には少し同情の視線が送られている気がしなくもないし…。

「ならば勝つしかあるまい！目覚めるときは今なのだ！立てよ県民っ！！」

『おおおぉぉぉぉお！！！』

なんと言うカリスマ…！

赤組男子が今、確実に団結した瞬間だ！これは絶対に総武高校の歴史に残る……はずだ！

一仕事終えたように材木座が比企谷の所へ歩いていくのが見えた。
俺もそれに続いて行く。

「ふむ、こんなものでどうだ？」

「良いんじゃねぇか？気持ち悪くて良く目立ってた」

「キ、キモ！？」

やっぱり比企谷の差し金だったか。

「さて比企谷。俺はこの競技でどう動けばいい？」

「鳴滝か。それはだな――――」

静寂。
グラウンドには双方に別れてお互いに向き合うように対立している。
辺りから「葉山…！」とか「リア充め…！」とか「モテない男の敵め…」とか「ぶっ潰してやる！」とか色々と思念と怨念が込められた言葉が聞こえてくるのは気のせいにしておく。
平塚先生が空砲を上空に掲げ、俺たちはそれぞれに開戦の合図を待ちわびる。
そして――

"パァンっ"

両軍一斉に飛び出した。

『さぁ始まりましたぁ！男子の男子による男子の男子の棒倒し！攻めと受けぇ！両軍が入り乱れるぅっ！先ずは白組からの先制攻撃ぃ！』

海老名がヤバイ。この一言につきる。

「おおりゃあ！」

「はい退場ー」

アナウンスの音を広いながら、向かってきた白組の数人を転倒させ、赤組の数人が取り押さえる。

「鳴滝さん！こいつらはどうすれば！？」

…鳴滝さん？

「あー、取り合えず棒から遠ざけといてくれるか？」

「了解です！」

…何なんだろうな…この団結力は？

普段との差が激しいと言うか…崇められている気がすると言うか…。

「隙ありぃ！」

「ねえよ」

飛びかかってきた白組の男子を避けると同時に胸ぐらを掴み地面に寝かすように誘導する。

男子は何が起きたのかわからない顔をしながら、やはりと言うか取り押さえられた。

つーか何で取り押さえるのだろうか？これって警察と泥棒の遊びじゃないはずなんだけど。

「けぽぉぉう！」

「んあ？」

グラウンド中央から材木座の悲鳴が聞こえ、振り替えればやはり材木座が喉に手を当てて苦しんでいた。まぁ演技だとわかってはいるが。

「確かに、少しばかり鬱陶しいと感じざるを得ないな…」

棒に向かって襲い来る白組を倒しながら、そんなことを考えているその時だった。

「鳴滝九十九！」

急に名前を呼ばれ、そちらへと視線を向けると体格のいい男子が堂々と立っていた。

「お前に一騎討ちを申し込む！」

「…その前にお前誰だよ」

「ふっ…俺は2年A組、帯野九朗（おびのくろう）！」

帯野…確か柔道部所属の生徒だったか。

「で、一騎討ちってなんだよ。喧嘩でもするきか？」

「バカを言うな。そんなことをすれば停学が待っているだろう！
良いか！俺はお前のポテンシャルを誰よりも逸速く見抜き、前々から目を付けてきたのだ！故に俺はお前の隠された実力に目をつけた！」

「長ぇよ。簡潔に用件を言いやがれ」

「柔道における一本勝負を一騎討ちと称し、俺と戦え鳴滝！
俺が勝った場合、貴様には柔道部に入ってもらう！」

なーんて面倒な事を言い出しやがりますかねこの熱血男は…。
見ろよ、雪ノ下のあの冷徹な目を。
あんなの負けたら殺すって言ってるようなもんだぞ？
明らかに『不安』と『祈願』、『思惑』、『殺意』が入り交じってるし。

「行くぞぉお！」

「まだ受けるって言ってねぇよ」

声を張り上げて突進してくる帯野の手を払い流して後ろに回るように足を運ぶ。

帯野は一瞬だけ呆けたが、再び俺を見つけて突貫をする。

「お前プロレスじゃねぇんだからよ…普通にしてこいよ」

「おおおおお！」

聞いてねぇな。

まぁ少し考えることにしようか。

この男、帯野は俺を見つけて現れた。

まず帯野の目的は簡単に言えば俺の柔道部への勧誘だ。だがそれは体育祭の、それでこそ競技中に言うものではないはずだ。

勧誘ならば普通の日にでも俺を訪問すればそれですむ話だ。

ならばなぜ今なのか。

それは確実に白組の向こう側で嘲笑う目を向ける葉山が関係している。

大方俺を押さえてくれとでも指示されたのだろうと結論付ける事が可能だ。

まぁ帯野の勧誘は嘘じゃないみたいだし、いい機会に勧誘もしておこうと言う思惑なのだろう。

「てやぁあ！」

「ふっ！っと！」

次々と掴みかかる手を払い除けて体を捌く。

帯野は疲れてきたのか額に汗を流している。が、その目は諦めないと言う『決意』がうっすらと見え隠れている。

「本当に…」

――どうしたものか…。

そう思わずにはいられなかった。

比企谷ｓｉｄｅ

「けぽぉぉう！」

材木座がグラウンド中央でウザイ演技を披露している。

俺はその横を素通りして白組の陣営へと足を進める。

俺は今、額に包帯を巻き、赤いハチマキを隠すようにしており、既

に回りからはスルーされる状態となっている。
現に俺の横を通りすぎる白組男子は、俺の事を見ておらず、普通に走り去っていた。

これが俺の永きに渡るボッチ生活で会得したスキル…ステルスヒッキー！
周囲の空気に溶け込み、俺の姿を認識されないように振る舞うことで、誰からも相手にされず、話しかけられもしない…鳴滝を除いて。
とまぁ、そんなことを考えながらも、既に白組の棒はすぐ近くにある。

「これで俺達の勝ちだ…！」

なんて上手く行くほど世の中は甘くない。
知ってたさ。……ホントだよ？

「やぁ。来ると思ってたよ」

「…葉山…」

もう少し。そんな俺の前に立ちふさがるように躍り出たのは赤組男子に敵認定された葉山だった。

「その包帯、頭に怪我でもしたかい？」

「っ……へっ」

俺は額に巻いてあった包帯をゆっくりほどく。
取れた包帯をそこら辺に捨てて葉山を睨み付けた。

「ちょっと頭の痛い子なんでな」

「材木座君…だっけ？彼を囮にするまでは良い作戦だった。本当はアイツを単独で突っ込ませて来るだろうと思っていたんだけどね」

「残念だったな、予想が外れて」

鳴滝の言った通り、葉山は鳴滝が突貫すると踏んでいたようだ。
俺の後ろにはいつの間にか二人の男子が立っている。

「でも、結局君の作戦は失敗した。普段からアイツといる君達を、俺がマークしないわけがないだろう？」

「あんまり買い被るなよ、元虐めっ子」

「ふふっ…悪いね。「スタンドプレーにはチームプレーで対抗させてもらう」……っ！？」

鳴滝の予想が当たりまくっていて怖い。

「葉山。お前の考えは全て鳴滝に読まれているぞ？」

「何っ…！」

「作戦を立てるとき、鳴滝が言ったのさ。『葉山ならこう言うだろうな』ってな」

「か、考えが読めていても実際に君はもう終わりだ。大人しく捕まるんだね」

明らかに同様を見せる葉山。
何か今までの分を合わせて気分が高潮してきたぞ。

「ふぅ…」

「っ？…降参かい？」

俺は両手をあげ、降参を示す。
葉山は一瞬だけ身構えたが、それを見て姿勢を戻した。
後ろの二人も油断している。やるならばここしかない…！

「いいや？材木座ぁぁ！」

俺は先ほどまでウザイ演技を披露していた材木座に呼び掛ける。
だが――

「は、八幡～…」

材木座は打つ伏せに倒され、拘束されていた。

「……マジかよ」

「残念だけど、読んでたよ。
これで君の思惑は完全に崩れただろう？
アイツも、今頃は帯野君に組伏せられて…？」

葉山が赤組の陣営に目を向けて固まる。
まるで信じられないものを見るかのように目を見開いている。
俺も釣られてそちらへと視線を移せば――

「まだまだぁ！」

「いい加減にしろよ…」

掴みかかろうとする白組の男の猛攻を、溜め息付きながらいなしている鳴滝がそこにいた。

「何なのアイツ？修行僧？」

まさにカンフー映画の立ち会いを見ているように華麗に動く鳴滝。
だが、これならまだ勝機がある！

「鳴滝ぃぃぃぃ！！出番だぁ！」

俺は鳴滝に届くよう、精一杯叫ぶのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「鳴滝ぃぃぃぃ！！出番だぁ！！」

「比企谷…っとぉ！了解だ」

比企谷から声がかかり、作戦が失敗したと告げられる。
未だに掴みかかってくる帯野をいなし続けて数分、息も絶え絶えで、腕も最初より下に落ちている帯野。
そのめには明らかな『疲労』と『絶望』が見られた。

「悪いが遊びはここで終わりだ」

俺は初めて構えを取る。
本を読んで学ぶこと１１年。格闘技の至るところまで手を出してきたその集大成を使うときだ。

「まだだ！まだ終わってない！」

帯野は疲労した体に鞭を打って突進してくる。
俺はその掴みかかる腕に手を添えながら、愛読した書物の通りに足を運んだ。

――コウホ――――ハイホ！

「ぬわぁっ！？」

帯野の横を通りすぎながら足を絡めとり、背中から地面に打ち倒す。
倒れた帯野はいまだに何が起こったのかわからない顔で空を見て固まっていた。

「俺の勝ちだ…じゃあな！」

俺は倒れた帯野に向けてそう告げ、走り出した。

「アイツを止めろ！」

進行方向の先で、葉山が他の男子に呼び掛ける。
その横では比企谷が二人の男子に捕まっているのが見えた。

「ここは通さねぇぞぉ！」
「葉山の敵だ！」
「絶対に止める！」

そんなことを言いながら、葉山グループの3馬鹿男子が俺に向かって走ってきた。

「遅い、甘い、小さい！」

「うお！？」
「なっ！？」
「うわぁ！」

一人一人の腕を掻い潜り、素早く身を翻して回避する。

掴みかかった腕が空振りする事でバランスを崩し、３人は被さるようにして一斉に倒れ混んだ。

「鳴滝！」

目的の目の前まで来ていた俺は、比企谷が叫んだことで気を切り替える。

俺の横から葉山が飛び付き、捕まえようとしていた。

「させるかぁ！」

「お前は何時も甘いんだよ！」

倒れ込みながら俺を押し倒そうとする葉山の背中を踏み台に回避し、そのまま跳躍。

「沈め！」

その勢いのままに、棒に向かって飛び蹴りを放った。

『うわあぁ！？』

衝撃で倒れた棒は、支えていた白組男子諸とも倒れ込む。

俺は空中から着地し、ズザザザッと地面を削って制止した。

『ワアアアアアアアッ！』

歓声が沸き起こり、騒がしいくらいに辺りに響く。
踏み台になった葉山はとてつもなく悔しそうな顔をしつつ、俺を睨み付けているのが分かった。

「……はっ」

そんな葉山を見ながら鼻で笑ってやれば、逃げるように顔を反らす。
こうして今年の体育祭は幕を閉じ、明日からはまた通常授業が始まることになる。

「――と言う夢を見たんだ」

「現実を見なさい鳴滝君。
私たち赤組は誰かさんが企てた作戦によって反則負けになったのよ」

その日の部室にて、話題を反らすために言った俺の発言をバッサリと切り捨てる雪ノ下。

「まさか反則になるなんてね」

「誰かさんが包帯で下手な小細工しなければ勝っていたのに」

女子二人に攻め立てられる比企谷。

「悪かったよ、誰も見てないと思ったんだ。だいたい、堂々と戦闘を繰り広げてた鳴滝にも責任はあるだろうが」

机に頬杖をついてそう言った比企谷は気まずそうにそっぽを向く。そんなこと言っても挑んできたのアイツだし、別に殴り合いじゃないしなぁ。

「し、しかし何だ、結構頑張ったよな！赤組は！」

「うん！ヒッキーも結構頑張ってたよね！」

「そう言う由比ヶ浜はリレーで転んでたよな」

「なぁっ！？何見てんの！？ヒッキーマジでキモい！」

「お互い様だろうが」

「ヒッキーとは違うし！」

何やら痴話喧嘩を繰り広げる二人。

若干ながら疎外感が感じられてくるのだが。

「ところで鳴滝君？」

「……何でしょうか雪ノ下さん」

不意に雪ノ下に呼ばれて振り向くと、ニッコリ笑った雪ノ下が俺を見ていた。

今はその笑顔が逆に怖い。

「命令を一つ、聞いてもらうから」

「待て！それは何かが間違っている！

俺は結構頑張ったし、何より赤組が敗北したのは俺だけのせいではないはずだ！」

「それでも負けたことにはならないわ。

それとも、貴方はこんな簡単な約束も守れない狭い男なのかしら？

…甲斐性なし？」

「約束は破るためにあるって誰かが言ってた！」

「駄目よ。これは破ることの出来ないものなの。諦めて従いなさい」

「ひ、比企谷…」

「すまん。俺には何も出来ない…」

…そうか。

やはり俺には神なんて者は憑いていないと言うことなんだな…。

「…良いだろう。
男　鳴滝九十九！誠心誠意この身を献上してやる！」

「あら、私はまだ何も言ってないのだけど？」

態度を良くすれば軽いものですむかな～なんて考えてないぞ？ホンとにホントだよ？

「さ、さぁ！何でも言ってみろ！」

「ふふっ…まだ言わないわ。
この件は残しておく事にするの。後で使う方が効果的だもの」

「なっ…ぐぬぬぬ」

この女…！確実に楽しんでやがる！

「何か二人とも楽しそうだね！」

「ええ。とても楽しいわ」

「鳴滝…」

「比企谷…俺はもうダメかもしれない」

こうしてその日は終わりを迎える。
それでも明日は来るし、次の日もその次の日も必ず来るのだ。

こんな日常が繰り返されるのも悪くはないと、俺は何処かで思うのかもしれない

行き先の想定

修学旅行。学生である者の最大の行事である。
主にあげられる行き先としては、京都、奈良、北海道等であるが、とある地域では沖縄も視野に入れている学校もある。
そんな修学旅行だが、近来の学生たちは修学旅行の本来の目的を忘れ、遊戯目的として向かっている節がある。
あながち間違ってはいないのだが、学生としてそれはどうなのだろうか？
勉学のために向かう先で遊ぶと言うのなら、プライベートで家族と一緒に行くのが筋ではないのだろうか？
例をあげるのなら、京都における金閣寺や銀閣寺、清水寺や虎石など、見学名所が多々あると言うのに、その付近にあるアトラクション…遊園施設に入り浸っているではないか。
そう言った者達が羽目を外し、問題行動を起こして中止、若しくは行き先却下の礎となってしまうのだ。
仮に修学旅行が遊びの場であると言うのなら、修学旅行に行きたくても行けないで、自宅で勉強の処置を取るしかなくなっている学生はどうすれば良いのか？
皆が楽しんでいる間に自主学習や自主登校を課せられ、あわよくば教員の手伝いや準備で自分の自由な時間を無くされる。そんなことが許されても良いのだろうか？
人は生まれたときから優劣が決まっていると言う。
ならばそんなものを取り払えるよう、努力するべきではないだろうか？
そんなことも解らないものがいるのなら、小学生からやり直した方

が良いと思ってしまう。

学校行事もその波を潜め、数日も立てばその高揚感も収まり始める。ここのところ寒くなりつつある季節に、俺を取り巻く環境は一層の寒さを感じさせた。

「修学旅行何処行くん？」
「あーし隼人と回るから」

「そりゃないでしょぉー！俺も楽しみにしてんだしー！ハブにされるとか、それって何滝君～？」

俺の席の後方で何時ものように騒ぐアホども。何処からか流れた『鳴滝九十九は貧乏である』と言う情報を持ち、それを笑い話に話題を膨らませるやり口を見るに、やはり低脳なのだと改めて確信付ける。

確かに俺は修学旅行等と言う行事に参加したことはなく、そう言った日に限ってはバイトや自宅学習で時間を潰してきてはいるが、逆に修学旅行に行きたいなどと思ったことは今までに一度もない。名所を歩いて回るなんぞプライベートでも行けるし、その場所の知

識なんてのも行かなくても仕入れることくらい簡単だ。
苦学生である俺からすれば、奴等こそ時間を浪費しているのではないかと鼻で笑ってしまえる。

「つくもん、ちょっと良い？」

「由比ヶ浜か。何だ？」

窓の外を見ながら、修学旅行期間で何をしようかと模索する。そこへ由比ヶ浜が訪ねてきた。

「あのね、つくもんは修学旅行行かないってホント…？」

成る程。このクラスで誰よりも優しい由比ヶ浜は俺が行かない…いや、行けないことを信じられていない様に体現している。

「ああ。行かない。
その日は家の用事があるからな」

「そうなんだ…ならさ！お土産何が良い？！何でも言ってよ！」

心配掛けないように家の用事と言ったのだが、逆効果だっただろうか？

「そうだな。何でも良い…と言いたい所だが、行き先の写真で良いぞ」

「写真…？」

「そう、写真だ。
どうせお前たちは奉仕部で回る時間を考えているんだろ？ならその時に言った場所の写真を所望したい。
どんなところだったとかの説明もあると良いな」

「～っうん！
楽しみにしててね！いっぱい撮ってくるから！」

そう言って由比ヶ浜はアホどもの渦中へと戻っていった。
そのいっぱいの写真の1枚1枚に確りと説明付けられるのか不安を刈られるな。

時は進んで奉仕部。
何時ものように席に座って本を読む比企谷、ニコニコ笑って雪ノ下を見る由比ヶ浜。
各自に紅茶を振る舞う雪ノ下。そして――

「ん？鳴滝、携帯買ったのか？」

最近持つようになった携帯…スマートフォンだったか？を操作している俺だ。

「いや、バイト先の店長とか編集の人とかが持てって聞かなくてな。半強制的に持たされた」

何気にこれ、現行を打ち込むにも勝手が良いのである。

因みに料金は編集者持ちである。

「ならさ！アドレス教えてよ！」

「ああ。えっと…ほれ」

手渡しで由比ヶ浜に携帯を渡す。

何か携帯デビューと同時に誰かのアドレスを習得するために歩き回った気分だな。

何か恥ずかしい。

「普通に渡すんだ…ヒッキーとおんなじだね」

携帯を受け取り、由比ヶ浜は早速打ち込みを開始する。

「…はい！一応ヒッキーのも入れといたから！」

「おい。俺のプライバシーは何処に言った。

別に困る訳じゃねぇがそれなりに断りを入れろよ」

勝手に教えられたことに比企谷が抗議の声をあげる。
由比ヶ浜は何処吹く風の様に「だってヒッキーだし」と返した。

「大体、どのみち教えるんだし、良いじゃん」

「…まぁ、良いけどよ」

言い負けたように鳴りを潜める比企谷。
何か申し訳ない感を覚えてしまう。

「ゆ、由比ヶ浜さん。私のは教えたのかしら？」

「ううん。だってゆきのん、嫌がるかなって思ったし」

何処か狼狽えたように質問した雪ノ下。
そうか。入れてないのか。

「由比ヶ浜さん。それは私だけ仲間はずれと言うことかしら？」

「ええ！？ち、違うから！そんなんじゃないからぁ！」

何故か冷めた目で由比ヶ浜を問い詰める雪ノ下。何をそんなに怒っているのだろうか？
ああ、そう言うことか。

「雪ノ下。お前のアドレスも教えてくれ」

「えっ！？」

「部活間の連絡に困るだろ？ほら」

俺は雪ノ下に携帯を手渡し、そう言った。

対する雪ノ下は何故か落胆したような雰囲気で受けとる。

「…そうね。そうなるわね…」

何か粗相をしでかしたのか？

打ち終えたのか、携帯を雪ノ下から受け取り、ポケットにしまう。

席へと戻り、雪ノ下が入れてくれた紅茶を一口。うむ、旨い。

閑話休題。

「はぁ…て言うかうちの学校も沖縄とかが良かったな。京都とか行ってもどうしようもなくない？」

話題は修学旅行にシフトチェンジ。

そうか。俺は空気に徹すれば良いんだな？

「することなら幾らでもあるでしょう？

この国の文化を直に見て、触れて「そう言うもんじゃないと思うぞ、あれは」…？」

比企谷が雪ノ下の言葉を遮る。
まぁ確かに修学旅行ってのは見て触れて学ぶの目的があるが、それだけじゃないと言うのも確かだ。
行けない知人や家族に名産物を持って帰ったりするのも一つの醍醐味と知れるだろう。
その点、比企谷は分かってるな。
妹がいるし、何かしら頼まれていても不思議じゃない。流石だな。

「あら、では何のために修学旅行に行くのかしら」

ふむ。ちょっとした心理だよな。
何のために…俺なら人それぞれだと返すけど。比企谷は結構良い返答を出すと踏んでいる。

「あれは社会生活の模倣なんだよ。
上司と出張にいけば、泊まるところも晩飯のメニューも自分じゃ選べねぇ。
でも妥協すればそれなりに楽しいんだと自分を騙すための訓練みたいなもんだ」

「…俺の期待を返せ」

「なっ、何だよ…何がだよ…」

「ヒッキーの修学旅行、超楽しくなさそう！」

そうだったな。比企谷の考え方は斜め下を我が儘に進むものだった

な…逆の意味で感心したよ。

「貴方達だって、楽しみにしていることの一つや二つはあるでしょう？」

その貴方達に俺は含まれているんでしょうかね雪ノ下さん？

「まぁな」

「私はまだ全然調べてないからなぁ…ゆきのんは？」

「そうね、龍安寺、清水寺もそうだけど…鹿苑寺、慈照寺等の有名どころも押さえておきたいわね」

何故挙げられた候補が寺オンリーなのかは触れないでおこう。

恐らく雪ノ下は楽しみで舞い上がっている。今は目をつむっていて分からないが、確実に楽しみにしまくって舞い上がっているに違いない。

「鹿苑寺…しょうじ？」

「混ぜるなよ。何かちょっと格好いいキャラ名見たいになってるぞ」

「もう少し歴史について勉強することをお勧めする…」

「ふ、二人して馬鹿にして！ちょっと間違えただけじゃん！」

「一般的には金閣、銀閣と言う方が通りは良いかしら？」

「ほぇ…なら最初からそういえば良いのに」

仮に最初から言っても分かるかどうかが分からないがな。

「あとは――――」

この後、雪ノ下による観光名所のあれやこれやをたんたんと語られた。

明らかに舞い上がっている。これ以上ないくらいに。

普段とのギャップを感じなくもないが、詳しすぎるのもどうなのだろうか？

「――と言うところかしらね」

「詳しい…」

「何お前、ジャランなの？」

「京都についての知識なんて、一般常識の範疇でしょ」

そう言って紅茶を飲む雪ノ下。

その目の前には観光ガイドの雑誌が置かれている。

「……くくくっ」

「ぷっ…」
「へっ……」
それを見た俺、比企谷、由比ヶ浜は一緒になって吹き出す。
「…何か？」
「な、何でもない、何でもない」
…こんな楽しい時間も、貴重と言えるんだよな。
もっと長く、それでいて大切に過ごせれば良いんだけど。
「フラグだったか…」
少し経って、部室には葉山と戸部…？が訪れた。
「何かご用かしら？」
一瞬で空気が針積める。
何処か雪ノ下も声のトーンが落ちている気がする。

「ちょっと相談事があって…連れてきたんだけど」

「いや、やっぱ無いわ…この二人に相談とか無いわぁ…」

「……あぁ？」「…あ？」

「た、頼みに来たのはこっちだろ…？」

「いやでも二人にこう言うことははなせないでしょぉ…信頼度ゼロだわ」

入ってきて早々に俺と比企谷を迫害する戸部。
その言葉と素振りは俺の怒りを買うのに充分だったと言える。

「なら帰れ。
いっそのことその生け簀かない顔面に拳めり込ませて窓から紐無しバンジーで追い出してやろうか？
それ以前に頼み事をする立場でありながらその態度は相手を挑発する最高の一手だぞ。もともとそう言うつもりなら買ってやるよその喧嘩。
今の俺は確実に殺れるぞコノヤロウ」

俺は立ち上がり、ツカツカと戸部の元へと歩いていく。
葉山が間に入り、庇うように身を呈したのでその前で止まったが、怯える戸部を睨み付けることは止めていない。

「止めなさい鳴滝君。
確かに信頼を持ち合わせていない二人が悪いのは分かったわ。
この場合は仕方がないもの。では、出ていってくれるかしら」

「……そうかよ…なら終わったら呼んでくれ。
少し頭冷やしてくる」

「待ちなさい。何処へいくの？」

は？いやだから出ていくって…

「出ていくのは貴方たちの方よ。
礼儀も知らない。礼節もわきまえない。そんな輩のお願いを、快く聞き入れるとでも思っているの？寧ろ聞く必要が皆無だわ。
早々にお引き取り願うわ。寧ろ出直す必要もないわね」

「何かやな感じ！」

…雪ノ下、由比ヶ浜…。

「……確かに、俺たちが悪いな。
戸部、戻ろう。この事は俺達で解決するべきだ」

「いや、もうここまで来たら後には引けないでしょぉ！」

退室を試みた葉山の腕を振り払い、戸部は決心を目に宿らせて1歩前に出る。

「ホントにゴメン！実は俺さっ――――――」

戸部は上半身を折り曲げ、謝罪をしてから話始めた。

「――マジ？！」

「つまりあれか。告白して海老名さんと付き合いたいと…」

戸部が持ってきた依頼は、思いを寄せている海老名に告白し、付き合いたいと言うもの。初の恋愛絡みな依頼で俺自身なんと言えば良いのかわからない。

昔告白されたことはあるけど即座に振ったし。

「そうそう、そんな感じ！

流石に振られるとかキツいわけ！」

「はぁ…振られたくない、ねぇ…」

そもそもの話で振られるかもしれないと言う要因が自分の中にある時点で駄目なんじゃないのか？不安要素とか知らない内に持ってたりするし。

仮に自覚がないとしても、対象からしてみたら欠点がある相手はノ

ーサンキューで終わるんじゃないのだろうか？

「何かそう言うのすっごく良いじゃん！応援するよー！」

「…やっぱり、そう簡単には行かないかな」

「そりゃまぁな」

「簡単に行くなら少子化問題も勃発してねぇ。大体、そんなに好きなら振られる覚悟して告白してくれれば良い。
振られるのが怖いのなら、告白しなければ良い」

「でもそうなるとこれから気まずいでしょぉ…俺、今回はマジなんだよ…」

マジ…ねぇ？
それは普段の騒がしいと言う欠点を自覚したってことなのか？

「悪いけれど、お役にたてなさそうね」

「ええー！良いじゃん、手伝ってあげようよぉ～」

断ろうとする雪ノ下にすがり付く由比ヶ浜。
何か子供が物をねだるときの一画に見えてしょうがないんだが。
そして俺を見る雪ノ下。

「え？俺が判断するのか？正直きついぞ？」

ほら見ろ、由比ヶ浜も一緒になって目線送ってくるし…。

「鳴滝君…いや、鳴滝さん！オネシャスッ！」

「張り倒すぞコノヤロウ…」とは言えないこの状況。

しかしこの展開で発展していくのは結構な確率で破滅をたどることが何となく分かる。

「ゆきの～ん、戸部っちも困ってることだしさぁ～」

「まぁ…そこまで言うのなら考えてみましょうか…」

「ちょっと雪ノ下さん。最近由比ヶ浜さんに甘すぎじゃないですかね？」

「寧ろ由比ヶ浜に甘い分、辛さが俺達に回ってきている気がするまである」

「「「「「……」」」」」

「「ぐっ……」」

全員から向けられるジト目に、俺と比企谷が怯む。

「はぁ…やってみますか」

結局やることになってしまったその日の放課後だった。

「で？具体的に何をすれば良い？」

「いやぁだからさ？俺が告る訳じゃん？そのサポート的なこと？」

サポートにも幅があるだろうが。

おいそこ。由比ヶ浜こら。照れと歓びを体現するな。乙女か。

「お前が海老名を好きだってのはわかった。

……比企谷、告白して振られた場合、挙げられるデメリットはどれくらいある？」

「振られる前提なんだ！？」

そりゃそうだろ。

物事はまずデメリットを考えてから行うものだ。

「そうだな…まぁ告白した次の日にクラスの奴等が知っているのは当然だよな。

まぁ知ってるだけなら良い。けどなぁ…ちらほら聞こえてくるんだよ」

『香、比企谷にコクられたらしいよ～』

『え～嘘～香可哀想～』

『私メルアド教えてなくて良かった～』

「――と、愉快な話のネタにされ、ちょっぴり傷つくことになる」

「…忘れろ。それはお前にとって最悪の局面でしかない」

「残念だが、そう簡単に忘れられたかトラウマは抱えてねぇんだよ…」

久々ながら、その場がトレースできてしまった…！

「て言うか、またヒッキーの話だった…」

「まだまだあるぞ。

中の良いやつに告白するとこれまでの関係性にヒビが…」

「ああ、それは分かるな。

闇討ちされたり、虐め受けたりとかな」

あの日の思い出。俺は絶対に忘れられないだろう。

「ま、まぁまぁ。そこら辺は何とかするからさ」

……何とか？

こいつ。まるで戸部が振られる事がわかってるみたいな言い方を…。

「じゃあ、俺は部活あるから…またな戸部」

そう言って退室していく葉山。

「取り合えず、考えを話し合いましょうか」

「うん」

はぁ…何でこんなことになったんだか。

「では、取り合えず戸部君のアピールポイントを探してみましょう」

「……隼人君と友達？」

「早速人頼みだし！」

そもそもその頼みが使えるかと言えばそうでもない。
先日の一年が俺と葉山の関係性を尋ねてきた。恐らくそれは何かを不振に感じたからではないのかと、俺は思っている。
万が一それが事実なら、校内の少数がその不審を抱えていることになるだろう。
とは言え、それでもアイツを信じているやつだって居なくはない。
そう考えれば割りと使える方向に傾いていると言える。

「他に何かないのか？」

「えっと…明るい、とか？」

「明るいで持てるならハゲ大人気だろ。雪ノ下は？」

「そうね。騒がしい…いえ、騒々しい…喧しい…賑やかな所……かしらね？」

「オーケーわかった。鳴滝は？」

「一言で言えば煩いの一言に尽きる。
仲間内であるのなら、ムードメーカーとして役立つだろうが、それは逆に空気が読めていないことに繋がる。
例えば誰かの心に入り込み、荒らすだけ荒らして帰っていくと言う具合か。
言ってしまえばムードメーカーとは良点と欠点が入り交じっていると言うことだろう。判断材料には向かないな」

「…そうだな。作戦変更だ。戸部の良いところを探すより、海老名さんの好みに合わせていこう」

その方が手っ取り早いか。

「…ところで、海老名さんは戸部君のことをどう思っているのかしら？」

「ええっ!?えっと…どうだろうね…？」

……これ、答え出てるだろ。
つーか分かりやすいな由比ヶ浜。

「ちょっとそれ気になりマクリングでしょぉ！」

「おい良いのか？これはあれだぞ。ファイナルジャッジメントだぞ」

「聞かなきゃ先に進めないでしょぉ！」

こいつホンとに大丈夫なのだろうか？

「……でば、どうぞ」

「……いい人だと……思ってるんじゃないかなぁ……？」

ああ。ダメなやつだこれ。

もう査定どころの話じゃねぇな。確実に門前払いだ。

「これ、プラス査定じゃね？」

へし折りたい。その心。

もう振られる所しか想像できなくなったな。

やはり恋愛経験皆無の俺が、恋愛について思考するのは間違っている

勇気。

勇ましい気持ちと書いてそう読むこの言葉。

ではその勇気はいつ頃に発揮されるのだろうか？

例えば気になる女性への告白。成功するにしても失敗するにしても、結果を見れば「私は勇気をだした」と発言するところは記憶や経験から想像することはたやすい。

だが待ってほしい。

ただ告白するにしても、勇気をだしたから遂行されると言うのはおかしくないだろうか？

もしもそれが間違っていないのなら、難しい状況の打破も、誰かの期待に答えることも、悩みの打ち明けも、全てが勇気で成り立っていることになるのではないだろうか？

しかし私はそれを勇気とは思わないだろう。

それは勇気に連なった、もしくはそれを凌駕する覚悟だと思っているからである。

失敗することも厭わない覚悟。

打破出来なくても前へと進む覚悟。

笑われるかもしれないが、悩みを知人へと打ち明ける覚悟。

形は様々だが、それでも勇気とは違うのではないだろうか？

勇気と無謀は違うと言う言葉を聞く。

私にはどう違っているのかはわからない。

結局それは結果を優先させた、人が決める価値観だからだ。

どう言うことかを説明するならば、成功率が半分程の肯定をクラス

の人気者が行って失敗した結果、周りの人間は慰めの言葉を掛けて回る。
「こんなこともあるよ」
「次は出来るって！」
「たまたまだよたまたま」
では逆に成功率が半分にも充たない行程を、人気にも程遠いクラスメイトが成功したのなら、周囲は打って変わったように言葉を曲げていくだろう。
「まぐれだろ」
「いい気になるなよ」
「調子に乗るなよ」
これだけの温度差があるのだから、結局のところ勇気と無謀は変わりのない事象だと言える。
言葉とは難しいもので、相手に伝わる事が曲解になることもある。
だからこそ明確な意思と主張を伝えることが、今求められる大切な事なのではないだろうか。

「――どうしましょうか？」

あれから三日ほどたった授業後、雪ノ下は奉仕部にてそう言った。
戸部の告白にしても良いアイディアが浮かばずにずるずると今日まで来たわけだが、正直に言えばこれほどに面倒なことはない。
実際に戸部はここにはいないし、本人が居ない状況で話が進とも思えない。

「この３日間、取り合えず海老名を見てきていたが、それと同時に

目についたことがある」

「何だ？」

「戸部や葉山が比企谷に接触し過ぎていると言う点だ。実際に話したりするわけではないが、あの二人が比企谷に対して視線を向けると言う場面を、対称である海老名が見ていることもあった。

これがどう言うことに繋がるのかはわからんが、良い方向とは言いずらい」

「そう言うことね…比企谷君」

「待て、それは俺のせいじゃない。

大体、海老名さんが考えるなんて腐った内容にしかならんだろ」

確かにそう思うのが普通なのかも知れないが、あれは多分――

"コンコン"

「っ…どうぞ」

不意に扉がノックされて雪ノ下が反応する。

「ハロハロー」

入ってきたのは海老名だった。

海老名は何でもないように入室し、雪ノ下に促されるまま席へと座る。

「それでヒナ、どうしたの？」

「うん…実は戸部っちの事で相談があるんだけど…」

瞬間、由比ヶ浜に戦慄が走った。

「とととと戸部っちがどうしたの！？」

動揺しすぎだろう。

「うん…戸部っちがね…戸部っち……」

「うんうん！」

「戸部っち…誘い受けだと思うのっ！」

のっ…のっ……のっ……。

響いた。物凄く響いた。

耳が痛い。目も当てられないほど痛くて見てられない。

鼻息荒くしてる海老名が怖い。

「え、えーっと…」

「最近隼人君やヒキタニ君と仲良くし過ぎてるっぽくて！

大岡君と大和君がフラストレーション！！
私はもっと爛れた関係が見たいのに、これじゃあトライアングルハートが台無しだよっ！」

「あー…それで？」

「最近戸部っち、ヒキタニ君とよく話してるじゃない？意味ありげな視線とか送っちゃって…ジュルリ。
あのね？誘うなら皆誘ってほしい。そして受け止めてあげてほしいの。
端的に言うと誘い受けて欲しいの」

「やだ、絶対嫌だ」

「なんなら鳴滝君でも良いんだよ？」

「俺と奴等の関係を知っているだろうが。
だいたい、葉山と仲良くなんて絶対に断る」

「対立関係にある二人がくんずほぐれつ…グフッ」

なぁんで真っ先にそっちの方向へ持っていくんだろうねこの子は？

「それで、依頼はなんなのかしら」

「あ、うん。
何か最近、皆がギクシャクしてるみたいでね…前みたいに仲良くで

きないかなって」

仲良く…ね。

そもそもあれらは仲が良かったのだろうか？

上面を保って話を合わせ、ご機嫌をうかがって流れに乗る。

自らの意思を持ち合わせず、ただ人気者である葉山隼人の近くにいると言うアドバンテージを求めている。

チェーンメールしかり、学園祭しかり。

こいつらの関係は見ていて不快なものを感じてきた。

「だ、男子にも色々あるんだよ…ほら、女子にだって話せない内容とかあるし」

だが、海老名はどうだろうか。

よく三浦とつるんでいるが、見てきた感じで言えば理解者が海老名だからと言うことぐらいか。

先程言った趣味の本音も確かに理由なのだろうが、俺からすればあの関係は海老名にとって余り関心のないものと言える。

ただそこに理解者である三浦がいて、その三浦が葉山に行為を寄せているから補助しているにすぎない。

「……」

「何か最近、皆ギクシャクしてるみたいで…前みたいに仲良くできたらなって。

あ、二人が仲良くしても良いんだよ？私も目の保養になるし」

本人がこう言っていても、葉山達がどう思っているかによって変わってくるだろう。
そもそもの話、男子がギクシャクしている理由が海老名についてなのだから根本的な解釈としてはハズレも良いところだ。

「じゃあ、当日も美味しいの期待してるから…」

そう言って海老名は立ち上がる。
そして扉を開けて――

「ヒキタニ君、鳴滝君、よろしくねー！」

そういい残して出ていった。

「…結局何が会いたかったのかしら？」

「さぁな」

「ま、皆仲良くしてやれば良いんじゃないの？」

「そうだよね。せっかくの修学旅行なんだし、楽しまなきゃ損だよ」

「俺には関係ないけどな」

「「「……」」」

何か微妙な空気にしてしまった。

そして修学旅行当日。
俺は朝からベンツに乗って何処かへと向かっていた。

「…どうしてこうなった」

「いやぁ…ははは」

目の前には叔父さん、鳴滝隆秀が座っている。
どこへ向かうかも聞いてないし、朝一報告で半ば強制的に連れてこられたわけだ。

「で、どこへ向かってるんですか？」

「九十九君は雪ノ下財閥を知っているかな？」

雪ノ下財閥？確か雪ノ下の親がそうなっているのを聞いたことがあるような？

でもそれが何の…

「そこのご令嬢と会って貰いたいんだよ」

……ご令…嬢？

「初めてあうだろうし、緊張とかもあるかもしれないが、まぁ君ならば大丈夫だろう。
立場的にはこちらが上だが、なるべく粗相の内容に頼むよ」

「……何のために行くんですかね？」

「それはお見ぁ…んんっ！御披露目と言うやつだよ。うん」

…今お見合いって言い欠けただろこの人。
つーかお見合い？雪ノ下のご令嬢と？
……まて、雪ノ下は今日から修学旅行だ。俺の知っている雪ノ下は居ないと言うことにはかならない…となればお見合いは成立しないし、俺が行く必要もないはずだ。

「彼女は九十九君より二つほど年上だが、容姿、器量よしときておまけに明るい子だ。
きっと、君とも仲良くなれると思うよ？」

…やべぇ、今ピンポイントでそれらしい顔と表情が浮かび上がった。
外れてほしい！と言うか帰りたい！

「――で」

「本日はようこそおいでくださいました。
私、本日のお相手をさせていただきます、雪ノ下陽乃と申します」

俺の記憶に一致しやがる女が、これはまた素晴らしい礼節を持って出迎えてきやがった。
服装がお見合いとかによく見る浴衣姿だし、俺スーツなんですけど？
つーかここ何処だよ。
自宅じゃなくて茶屋？クソ高そうな店なんだけど。和風庭園広がってんだけど？

「おお、君が雪ノ下君のところの娘さんか。
良くできた子だ。今日はよろしく頼むよ」

「承っております。両親は間もなく到着いたしますので、少々お待ちくださいませ」

待つの嫌なんで帰って良いですかね？あ、ダメですかそうですか。

「そう言えば紹介が遅れたね。
私は知っての通り、鳴滝財閥３代目当主、鳴滝隆秀。
そしてこちらが甥の鳴滝九十九君だ。訳あって血の繋がりはないが、それ以上の繋がりが私たちにあると自負しているよ。よろしくしてやってくれ」

そして俺に目線を向ける雪ノ下姉。

「初めまして、雪ノ下陽乃と申します」

「こちらこそ初めまして。鳴滝九十九です」

何だよその目は…読み取れとでも言いたいわけか？
目と目があっても好意にゃ気づかんぞ。
はぁ……えっと『悲観』と『祈願』？何だこの目？
悲しさに願う？……嫌だ的な？……まぁ話したいこともあったし、外に連れ出してみるか？

「叔父さん、少し彼女とお話がしたいんですが、外を出歩いてきても宜しいでしょうか？」

「んっおおおお！是非そうしたまえ！
雪ノ下君には私から伝えておこう！大丈夫、夕方までに帰るようにしなさい！
いやぁ目出度い、は気が早いな！さぁ、行ってきなさい！」

テンション高いぞ隆秀さん。
つーかやっぱりお見合い目当てじゃねえか。

「よろしくお願いいたします」

「…取り合えず外に出ようか」

俺は雪ノ下姉と共に、茶室からの脱出に成功するのだった。

お見合いなんてしたくない

お見合い。

結婚を想定した前段階の顔合わせのようなものである。

結婚は人生の墓場だと言われているが、言い得て妙であることは否めない。

結婚したらそのまま死ぬのかと、最初は思ったものだが、恋人の関係であった状態から書類一枚で決まってしまう結婚。

夫婦となってしまった暁には、当初の繋がりは数年経つにつれて廃れていき、お互いに干渉しない空間がその家となる。

言ってしまえば、その家庭が墓場となるのだ。

浮気は文化と言う輩が居るが、そんなことを言っている内でも、やがて誰かに刺されると言った墓場直行の行動だと言えよう。

ただ、もしも結婚をするのなら。

健全なお付き合いをとか、心身潔白な、等の間柄ではなく、お互いに好き合い、お互いを思い会う関係が好ましいのではないだろうか。

相性等は二の次、強いて言うなら思う気持ちだと定義したい。

それは甘く、苦く、時に酸味がある関係なのだと、私は思う。

刺激な事でも構わない、お互いにお互いを必要とし、笑い会える関係を私は求めたい。

彼女居ないけどねっ……！

「ありがとね鳴滝君。お姉さん助かっちゃった」

取り合えず行く宛はないため、道行く道を適当に歩く。

雪ノ下陽乃は後ろに続く俺を振り替えってそう言った。

「別に、そうしてほしいとアイコンタクトを送ったのはアンタだろ」

先程の解釈は『連れ出してほしい』だったようで、結果的に間違いではなかったようだ。

「こんなこと、君以外には出来ないよ?ふふっ。

でも以外だったなぁ。最初私を見た瞬間に突っかかってくるかと思ったのに」

「社交性は俺の領分の一つなので、あの程度で動揺することはない」

「ふーん」

余り興味が無さそうだな。

とは言えここはどこだろうか?

車のなかでは外なんて全く見ていなかったわけだから、どこに向かっているのかも知らなかった。

「……はて、何か見覚えのある建物が…」

「んー?ああ、鹿苑寺だねぇ」

鹿苑寺…?確か京都にある観光名所の一つだったな。
雪ノ下が熱く語っていたのを覚えている。

「なぜ、俺は京都にいる…?」

「何でって、会談に来たんじゃなかったの?」

「バカ言うな。俺は今日の朝いきなり聞かされたことなんだぞ。大体会談自体建前だったじゃねぇか。お見合いとか冗談じゃねぇ」

「あっはははは…まぁ、今日来たのが君で少しホッとしたけどね」

「あ?それってどういう…」

雪ノ下姉の言葉を追求しようとしたところで、携帯が震えた。
取り出してみたら叔父さんだった。

「はい、九十九です」

『九十九君!どうして教えてくれなかったんだ!』

何の話？

『今日、君の学校は修学旅行らしいじゃないか！
先程陽乃嬢から連絡があって初めてしったんだぞ！』

余計なことしやがって…！
俺は雪ノ下姉を一睨みして会話に集中する。

「いえ、俺は別に行きたくなかったので」

『そうはいかん！
君はいまから最寄のタクシーに乗って学校の方と合流するんだ！いいね？！』

「……了解しました」

そうして切れる通話。
そのまま携帯を仕舞い、雪ノ下姉を睨み付ける。

「どういうつもりですか？」

「やだなぁ、ちょっとしたお節介だよ。
私は雪乃ちゃんに良い思いで作って貰いたいしね？」

……どこまで勝手なんだこの女は…！

「何か暴動でも起こしてみようかな…」

「被害者は主に隼斗かな？」

「…ストーカーか何かなのか」

「侵害だなあ」

この女は、何処まで行っても人をおちょくるのは変わらない。

「いい加減スッキリしたらどうですかね？
知り合いが居ないところへ行くとか、見つからない場所を探してリフレッシュするとか」

「…迷惑だったかな」

「別に。
会うたびにふざけた作り顔されるのは弱冠…いやかなり腹が立ちますからね」

「…そっか。
じゃあ君と二人だけの時は普通でいようかな…」

「……良いんじゃないですかね。
誰に見られるを気にせずに、そう振る舞えれば尚良しですが」

「ふふ…それはまだちょっとね」

ふむ。
これが普通だと言うのなら、まぁ悪くはないと思う。

「では俺はこれで。
誰かさんのお陰でまたスケジュールを組み直さないと行けませんしね」

「あはははは！良い思い出作ってきてね！
お姉さん、期待してるよ」

「アンタはもう少し自分の意見を出せよ。
誰かの良いなりなんぞ、生きてるとは言わないからな」

そう言って俺は走り出す。
一々タクシー引っ張ってたら金が勿体無いからな。

「っ……ホント、油断できない子だなぁ…ふふ」

雪ノ下陽乃は、そんな聞こえない呟きを俺の後ろに残して戻っていった。

「人という字は、人と人とが支え合って出来ている」
そう言ったのは誰だっただろうか。
実際にこの文字、一人でも作れてしまうのだ。なのに何故、二人の人員を用いて支え会わなくてはならないのか。
「人は一人では生きてはいけない」
これもまた、有名どころの言葉である。
確かにその通りだろう。一人で生きられるようになるのは、働くことができるようになったらだと思う。
それから先は自己責任。何をやっても責任が付きまとい、自分の道を決めていくのだろう。
が、しかし。
一人では生きていけないと言いながらも、誰かに固執するのはどうなのだろうか。
「誰かが居ることで、私は安心できる」と、そんな言葉は只のエゴでしかない。
束縛し、自由にさせない。これは人の尊厳を踏みにじる行為ではないだろうか。
もしもこの言葉が正論であり、人は一人では生きてはいけないという言葉を肯定してしまうのであれば、誰しもが『ヒモ』と言う状態に陥り、最終的には誰も働かなくなってしまう。
しかしながらそこの辺りは社会。
そうなる者とそうならない者が区別され、良悪の対応をされる。
中には、不本意でこうなってしまったと言う者も居るだろう。
だがそういった叫びは戯れ言として足蹴にされるのだ。

働かない者達への不評不満を否定する訳ではないが、私は今、この社会が正しいのか、酷く不安に思っている。

はっはっはっ、と一定のリズムで呼吸が行われる。
現在走っている俺は、比企谷たちが宿泊するホテルへと向かっているわけだが、走り出してから二時間ほど経過し、辺りは暗くなり始めていた。

「到着…」

それからもう少しの間走り続け、目標地点へと到着した訳だが…。

「君は馬鹿かね」

玄関前に仁王立ちしている平塚先生に出くわした。

「親御さんから金銭を受け取っているだろうに、何故タクシーを使わなかった？」

「ふぅ…『生徒の自主性を尊重する』という校則のもと、自分の足で張り切っただけですね」

「君は…全く。もうすぐ夕食の時間になる。中へ入って待機していたまえ」

はーい、と返事をして玄関をくぐる。

中はそこそこに綺麗で、正にホテルと言える内装だった。

「ん？鳴滝…来ないんじゃなかったのか」

「おお、比企谷。これはあれだ。とあるお節介と陰謀による根回しで来ざるを得なくなったんだ」

「…そうか。明日は奉仕部で回ることになってるが、行けそうか？」

「ああ。海老名の事も含めて一緒に行くぞ」

その後、由比ヶ浜とも合流し、夕食となったのだが、飯はそんなに旨くなかった。

小一時間ほどし、ホテル内を見回っていたら、お土産コーナーにいる比企谷と雪ノ下を見つけた。

雪ノ下に至っては雪ノ下陽乃の事もあり、顔を会わせにくいと感じてしまう。

「あら、聞いてはいたけれど、来ていたのね」

「おう」

「お前は風呂に行ったのか？」

「いや、俺は一人で入る。こんな体だからな」

「「……」」

ふむ、気を使わせたか。

しかしこう言うことも来たくない理由のひとつにあったんだよな。

「明日は…ん？」

「どうした…あれは…」

比企谷が口を開いた途端にある方向を向いたので、俺もつられてそちらをみた。

その方角には如何にも変装をしている様子の平塚先生が…。

「何やってんだよ…」

「っ…お前達…」

見つかった！とでも言いたそうな平塚先生は、暫く黙ると「ついてこい」と言って歩き出した。
俺達3人も、訝しげながら着いていくことにし、玄関前に駐車してあったタクシー乗って向かった先は――――

「ラーメンですか…」

屋台のラーメン屋に到着した。

「うむ！ここのラーメンが美味いと評判でな！」

誇らしげに胸を張る平塚先生。
そう言えばこの人夕食の時居なかったな。

「よし！では入るか！」

まるで何かに挑むように、俺達を引き連れた平塚先生は、店前の椅子に腰かけるのだった。

ホテル付近のコンビニ前。
俺、比企谷、雪ノ下の3人は、ラーメン屋からタクシーで送られ、途方にくれていた。
と言っても余りにも呆気ない時間に、余韻に浸る暇がなかったのだが。

「ラーメンなんて、初めて食べたわ…」

「あの人はラーメンにかなりの拘り持ってるからな…寧ろ初めてがハズレじゃなくて良かったと思うぞ」

確かに。あの旨味はかなりの修行を積んだとみた。

「取り合えず歩こうぜ。
さっさと帰らにゃ、部屋の誰かに捜索でもされそうだからな」

「おう…」

しかし、こうして歩くのも以外と新鮮な感じがする。
何時もの四人で其々組み合わせで歩く事は何度かあったものの、夜に出歩くと言うのも合わさり、普段ない心地よさと言うものが沸いてくる。

「……」

「？」

ふと、俺と比企谷の前を歩いていた雪ノ下が立ち止まり、信号の方か歩道の方かで視線をさ迷わせていた。

「（そういや方向音痴だっけか…）信号渡るぞ」

「そ、そう…」

俺は先導して信号を渡り、雪ノ下の前に出る。

比企谷は何故か前に出てこず、俺、雪ノ下、比企谷と言う順番で再び歩き始めた。

「…そう言えば鳴滝の妹もフラフラしてたな」

「陽菜のことか？あれはもう手を繋いでいないと危ういレベルだ」

「そうね…いつの間にかはぐれそうになっていたわ」

二人とも、恐らく由比ヶ浜の誕生日の件について言っているのだろう。

警備員に連れていかれた後、そんなことになっていたとは思わなかった。

「迷惑かけたな」

「いいえ。とても楽しかったわ」

「そうだな。二人を探すのに手間取ったしな」

「っ…誰の子とかしらね」

「さて、誰のことか」

歩きながらも、二人して楽しそうに話す。

たまに見る、入れないなと思う空気がそこにあった。

「ほれほれ、そんなに離れるとまた迷子になるぞ」

「さ、先に行ってくれて構わないわ」

「いや、別に先に行く意味も大して無いだろ。直ぐそこだし」

比企谷が指差した方向には、ホテル【平安の林】の玄関から漏れる光がちらついていた。

「あなた達はそうでも、私は困るの…」

「何が？」「ん？」

「その…こんな時間だし、一緒にいるのを見られると…その…」

「っ…！そ、そうか」「…？」

いってる意味が分からない。

修学旅行なんだから、良いわけなら「買い物にいってました」ですむんじゃないのか？

「（なぁ、何が困るんだ？」

「（は！？わかんねぇのかよ…」

「（良く分からんが、誰かに見られるのが困ると言うのはわかった。けどそれの何が嫌なんだ？」

「（お前…」

こそこそと小声で話す俺と比企谷。

そうしているうちにホテル前までたどり着いてしまい、気づけば解散の流れになっていた。

「じゃあな」

「ええ、おやすみなさい」

「腹出しぃっ！」

俺も一声かけようと、声を発したところで比企谷につねられた。

「その、送ってくれてありがとう」

俺の痛みなど露知らず、何事もなかったように雪ノ下は部屋へと歩

いていった。

「何しやがる…」

「待て、俺はお前を助けてやったんだ」

「……どう言うことだ」

「良く考えろ。
お前は恐らく『腹を出して寝るなよ』と言おうとしただろう？」

「ああ」

「そんなことをアイツに言ってみろ。
小一時間、もしくは明日にでも制裁が待っていることは想像に固くない」

「……た、助かった…！」

その後風呂に入って寝た。

紅潮と言う言葉がある。
これは良く、顔が赤くなる事を例えて使われることは知っているだろうか？
身体的に血流が頭に上り、顔が赤くなってしまうのだが、そう言ったことが起こってしまうのは自分で止められるようなものではない。
そもそも人体におけるストッパーは、自身で外すことは出来ないとされている。
良く『人間は全体の３０％の力しか使うことは出来ない』と言われているが、つまりそういうことなのだろう。
人体における残りの潜在能力を引き出したのなら、体は耐えきれずに負傷を来すとされ、普段は脳が働き、力を抑制しているのだ。
極希に『火事場の馬鹿力』と称される形で発揮されるが、やはりと言うか、自分の意思で行うことは出来ない。
これらは想像に過ぎないが、もし仮に普段の全力が３０％で、何かを殴って陥没まで行けたとするのなら、単純計算でその３倍。貫通させることも容易くなるのだろうか。
もしもそうならば、あらゆる格闘技等でそれとなく活躍できるのだろうかと、胸を膨らませてしまう。

「…静かすぎる」

早朝４時。
何時もの癖で起きてしまう俺は、起床直後に手持ちぶさたとなり、ロビーにて新聞を読んでいた。

「最近の若い者達は、何故こうもスローペースなのか…」

「あら、鳴滝君？早いのね」

「あ、鶴見さ…先生」

女子エリアから歩いてきたのは瑠美ちゃんの母である鶴見先生だった。
この人、一児の母なのに若々しい。
シワなんてないし容姿も綺麗だ。瑠美ちゃんも大人になればこんな感じになるんだろうか。

「大変だったみたいね？」

「ええ、まぁ。
修学旅行なんて初めてですし、何やって良いのか、正直迷ってます」

「何やるにしても、学校とは別って考えればいいわ。
そりゃ、多少の規制はあるだろうけど、旅行に来た…もしくは散歩に来たって感じで良いのよ」

「はぁ。そんなもんですか」

「そんなものよ」

ふむ。

今日のスケジュールとしては、午前は比企谷達と回り、午後から自由行動。

個人的に回りたいところなんて考えてもいない。それに――

「はぁ…」

「溜め息は幸せを逃すわよ？」

葉山どもと回るなんてごめんだ…。

そうして朝の朝礼も終わり、各班ごとに回ることに。

俺は比企谷がいる班に組み込まれ、そのついでに色々と見て回るそうなのだが。

「九十九、おはよう」

「沙紀さん。おはよう」

班員に沙紀さんがいた。

「あの、さ。頼みがあるんだけど…」

唐突に下を向いて言う沙紀さん。

「どしたの？」

「えっと、これから色々回るんだけど…」

「ん？」

「…や、やっぱり何でもない」

そう言うと早足に離れていく沙紀さん。

どうしたのかわからないが、何でもないならそれで良いのだろう。

俺は気にしないことにした。

ｃａｓｅ１～お化け屋敷～

「何が【史上最強のお化け屋敷】だ…もっとマトモな名前は無いのか」

「ひっ…今何か聞こえた…！」

「私こう言うの苦手…」

俺、比企谷、由比ヶ浜、沙紀さん、戸塚は、一組となって施設内を歩いていた。

俺の前を比企谷、由比ヶ浜、戸塚が歩き、俺の横を――

「…」ギリギリ

…沙紀さんが歩いている。俺の腕を掴んで。

「お化け屋敷なんて怖くないだろ。人間の方が怖い」

「でた、ひねくれー。でも、頼りになるかも！」

「――むしろ人間が驚かす方が怖い」

「ダメだった！全然頼りにならない！」

何言ってんだか…。

「ほれ、嬢ちゃんも早く帰れよ」

「九十九…何に喋って…っ――――!?」

俺は俺で脚の裾を摘まむ女の子に話しかけていた。

それをみた沙紀さんは…走って出口に向かってしまった。

「えぇぇ…」

取り残された俺は、取り合えず比企谷の方を向き…

「いねぇ…」

誰もいなかった。

「はぁ…取り合えず成仏しな？」

『…』

女の子をあやして、俺も出口に向かうのだった。

ｃａｓｅ２～龍安寺『石庭』～

「おお、雪ノ下」

「あら奇遇ね」

「こっちに来てたんだな」

「ええ。あの石、虎の子渡の庭と言う別名があるそうよ」

虎の子渡…ねぇ。

「あの石、三つの謎があるそうだぞ」

「謎？」

「そ。

一つ、石庭は何をテーマに設計されたのか。

二つ、『五群十五石』と言われる五つの石組と十五の石は何を意味しているのか。

三つ、それらの石を配置するとき、どのような構図に基づいたのか」

「…理解できないわね」

「昔から多くの識者が推理を重ね、「虎の子渡しの庭」「七五三の庭」「心の字の庭」「扇の庭」「星座カシオペヤの庭」「五山の庭」「黄金比の庭」を初めとして、「五十五もの推理」が提唱されてきたそうだが、実際に確信に基づいた推理は制定されてないそうだ。最近だと「禅の庭」「哲学の庭」「推理の庭」って感じで呼ばれているらしいな」

「そう。博識なのね。

でもそこまで詳しいと少し引くわ」

「因みに『虎の子渡し』について、虎が三子を生むと、一子は彪で他子を食うから、

水を渡る時にはまず彪の一子を渡らせ、次に別の子を渡らせて、ま

た彪を渡し返し、さらに残りの一子を渡し、最後に再び彪を渡したという説話に基づいているそうだぞ。
つまり、あの石はそう言うと説話があるだけで、石が虎に見えると言う訳ではない」

「…そう」

何かさらに引かれているようですが、気のせいですかね？
っと、雪ノ下の更に奥に眼を向ければ、さも被害者を見るような目でこちらを見ている女子生徒が。
間違いなく俺を危惧しているな。

「あ、ゆきのん！」

「うっす」

呼ばれて振り替えれば由比ヶ浜と比企谷がいた。
その後ろにカスがいるけど。

「…場所を変えましょうか」

そう言って雪ノ下は立ち上がり、四人で人気のない場所へと移動した。

「依頼の調子はどうかしら？」

「うーん…結構難しいね、ね？」

「あんまやり過ぎて、海老名さんに嫌がられてもな」

確かに、依頼の成果としては余り進んでいないように思う。

「一応聞いた話ではそんなに変わらないそうだぞ」

「…それ、誰に聞いたんだよ」

「ん？そりゃお前…なぁ？」

「「…」」

雪ノ下を置いて二人が黙る。

お化け屋敷にいた『人達』に聞いたとは言えないだろう。俺を置いて逃げたし。

「おまけに…（葉山の行動が不自然だ」

「……」

明らかにアイツは海老名の気持ちを知っている。

それでいて丸く納めようとしているのが分かる。

「任せきりにしてごめんなさいね」

「全然気にしないで」

「代わりといってはなんだけど、一応私の方でも考えてみたの」

「何をだ？」

雪ノ下はポケットをあさる。

そして出てきたのは一枚のメモ用紙だった。

「女性に好まれる京都の観光名所。

彼らの参考になればと思って」

「わぁ。ゆきのん流石！」

「では、私は戻るわ」

「うん。また明日ー」

雪ノ下はそうして去っていった。

そうか。明日が皆で回る日か。少し楽しみだな。

その日の行程を終わらせ、俺はまた一人になってロビーにいた。

午後の自由行動はハッキリ言って暇だった。

比企谷に着いていこうとも思ったけど、比企谷にも予定があるだろうからやめておいた。

「さて…どうするか」

時刻は8時を少しだけ回ったところだ。
やることのない今となっては、時間を潰すことすら難しい。

「部屋は他のやつらで騒がしい。
かと言って風呂は論外…女子部屋？怯えられてそれどころじゃない。
そもそも何しに行くんだ。
後は…ああ、あるじゃないか、やることが」

そう。学校へ帰ってからやるであろう作文が。
それを今から仕上げておこうと、俺はロビーから立ち去るのだった。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~10879

元虐められっ子の学園生活
2016年07月24日　21時26分発行